

よろず短編集

機械学習はいいぞおじさん(仮)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

A.I.のベリスと先生を利用した1~2シーン程度の小ネタ短編集です。

全て単話なのでどこから読んでも安心です。

※基本的にショートコントまたはカオス系のギャグ展開（になるとうれしい）です

※主たる原作は各話タイトルに記載されています

※話によって内容やキャラの配役が大きく異なりますが、人によっては特定キャラを蔑むとも読み取れる展開となる場合もあるため、アンチ・ヘイトタグを付与しています。

目 次

鬼滅の刃	柱合裁判—その1	1
鬼滅の刃	柱合裁判—その2	
鬼滅の刃	柱合裁判—その3	
鬼滅の刃	柱合裁判—その4	
鬼滅の刃	柱合裁判—その5	
鬼滅の刃	猗窩座問答	
ハリー・ポッター ファンタスティックビースト先輩と黒い魔法使い		
鬼滅の刃 無限なんとか編		
名探偵コナン 密室ペンション殺人事件		
ハリー・ポッター おじぎをするのだ その1	36	31
ハリー・ポッター おじぎをするのだ その2	42	47
ハリー・ポッター おじぎをするのだ その3	52	56
鬼滅の刃 無限なんとか編その2	59	61
鬼滅の刃 無限なんとか編その3	75	81
鬼滅の刃 柱合会議編		
鬼滅の刃 無限なんとか編その4	90	98
鬼滅の刃 柱合裁判—その6	118	125
鬼滅の刃 炭治郎立志編ぐらい その2		
鬼滅の刃 炭治郎立志編ぐらい その3		
火垂るの墓 「節子のそれドロップやない、ハジキや」		
機動戦士ガンダム「逆襲のシャア」『世界に満ちる輝きの煌めき』		

鬼滅の刃 炭治郎立志編ぐらいその4
鬼滅の刃 炭治郎立志編ぐらいその5
鬼滅の刃 炭治郎立志編ぐらいその6
キン肉マン（技のみクロス）のファンタジー戦記もの
鬼滅の刃 柱合裁判—その7
鬼滅の刃 柱合裁判—その7 (リベンジ)
テニスの王子様 國際會議場事件編
ヒカルの碁 v s 咲—S a k i —
ヒカルの碁 v s 遊戯王（デュエルモンスターズ）
gd gd 宴会 ガンダム編
けものフレンズ 「このあらい作つたのは誰だ！」
ハリー・ポッター おじぎをするのだ その4
鬼滅の刃 柱合裁判—その8
鬼滅の刃 柱合裁判—その9
勇者王ガオガイガー v s ドラえもん

鬼滅の刃 柱合裁判——その1

炭治郎は目を覚ますと鬼滅隊本部、御館様の屋敷前の庭にいた。鬼となつた妹を隠していた罪でここに連れてこられたのだ。

「ここは鬼殺隊の本部です。あなたは今から裁判を受けるのですよ。

竈門炭次郎君」

蟲柱——胡蝶しのぶが話しかける。炭治郎が慌てて周りを見回すと他にも人の姿があつた。

炎柱——煉獄杏寿郎。

音柱——宇髄天元。

恋柱——甘露寺蜜璃。

岩柱——悲鳴嶼行冥。

氷柱——童磨。

霞柱——時透無一郎。

蛇柱——伊黒小芭内。

水柱——富岡義勇。

風柱——不死川実弥。

そして……魔法柱——ヴァオルデモート卿。

「おじぎをするのだ小僧、鬼殺隊は礼節を守らねばいけない」

ヴァオルデモート卿の言葉に皆が一斉に頭を下げる。その様子に炭治郎は驚きを隠せないでいた。

「ではこれより、柱合会議を始めようか」

御館様——産屋敷耀哉がそう言うと、彼らは再び顔を上げた。炭治郎には一体何が何だかわからなかつた。どうして自分はここにいるのか？目の前にいる人たちは誰なのか？すると突然、炭治郎は頭を掴まれ地面に叩きつけられた。

「っ！」

痛みに顔を歪めながらも必死に抵抗するも、すぐに押さえつけられる。

「俺はお前を認めねえ！鬼を連れているなんて認めねえ！」

不死川が怒り狂ったように叫ぶ。

「そうだな、派手に気に食わねえぜ」

「うむ!!俺も同じ意見だ!」

宇髓や煉獄がそれに賛同する。

「私は別にどうでも……。それよりもお腹すいた……」

時透は無関心だった。ヴォルデモート卿は興味深げに炭治郎を見つめるだけだ。

「そんなことより富岡さん、どうにか言つたらどうですか?」

「…………」

しのぶが問いかけるも、義勇は何も言わない。いつものことなので誰も気に留めないが。

「まあ良いじゃないですか、大人しくついてきてくれたんですし。処罰は後で考えましょよ」

そう言つてその場を収めようとするのは童磨である。彼は他の柱たちとは違い感情が全く読めないため何を考えているのかわからないため、苦手とする者がほとんどであった。

ヴォルデモート卿が口を開く。

「まずは御館殿の話を聞こうではないか。この小僧について何か知っていることがあるかもしけれぬぞ」

「そもそもそうだね」

耀哉は微笑みながら炭治郎を見た。

「君は今、自分がなぜこんなことになつているかわかるかな?」

「いえ……」

「だろうね。君の妹……禰豆子は今、どこだい?」

「すみません……わかりません」

「うん、それじゃあまずはそれを話そうか」

それから耀哉はこの兄妹についての話を聞いた。炭治郎にとつては寝耳に水の内容ばかりであつたが、自分の家族を殺した鬼舞辻無惨が自分を狙おうとしていることも知つた。

「なんということでしょう……私とした事が、全く知りませんでした」

「胡蝶も知らなかつたようだな」

「ええ、不覚です」

「とにかく、これは重大な隊律違反だ。鬼を連れて任務に当たつてい
たなど言語道断！」

不死川は声高々に叫んだ。

だがそれを遮るようにヴォルデモート卿が手を挙げた。

「少し待て。先程御館殿は竈門炭治郎と禰豆子の事を知つているよ
うなことを言つていたが、それはどういうことだ？」

その言葉にその場にいた全員がざわついた。確かに彼の言う通り
だと、皆思つたからだ。

「ああ、実はね……少し前に炭治郎のことを報告してくれた子がいた
んだ。名前は教えてくれなかつたけどね。その子からの手紙による
と、鬼になつた妹を人間に戻すために戦つているらしい。だから私は
信じようと思つたんだよ」

耀哉の言葉にヴォルデモート卿は納得したが、まだ不死川や他の者
は半信半疑だつた。

「信じじられねえ……人を襲わずに生きられるわけがねえ！」

「まあそう思うよね！」

童磨がヘラヘラしながら言う。

「とりあえずさっこで殺しちやう？ もう十分罰は受けてると思うん
だけど」

「そうだなア……鬼を庇い続けるなら死んだ方がマシだよなア」

宇髄と不死川が賛成する。

「では、裁判の必要もないでしよう。鬼を匿つていただけで死罪とい
うのは少し重すぎる気がしますが、皆がそれでいいと言うならば仕方
ありません」

「だがこの小僧は覚悟ある口をしている」

ヴォルデモート卿が静かに言う。

「鬼殺隊は鬼を滅するのが仕事……しかし、鬼にも情けをかける御館
様のお心意気、私は好きですよ」

しのぶが耀哉に寄り添いながら言う。

「それに、炭治郎君のことは私がちゃんと見ますから大丈夫ですよ。

安心して下さい」

「……わかつたよ。炭治郎、君はどうしたい？死ぬかい？生きるかい
？好きな方を選びなさい」

耀哉の言葉に、炭治郎は答えた。

「俺は、死にたくないです。でも、妹を殺すのも嫌だ！だから、俺は
……」

「そうか、ありがとう」

耀哉はそう言うと、パンツと手を叩いた。

「ヴォルデモート卿、彼に魔法を。炭治郎、覚悟を示すなら耐えて見せ
なさい」

ヴォルデモート卿はニヤリと笑うと杖を取り出した。そしてゆつ
くりと炭治郎に近づくと、一言唱えた。

「クルーシオ」

次の瞬間、炭治郎は悲鳴を上げながら地面にのたうち回った。

「あ” “あ” “あ” “あ” “あ” “あ” “あ”

あまりの痛さに炭治郎は涙と鼻水を流しながら必死に暴れ回る。

「小僧、妹の命が惜しいなら俺様の魔法に耐えて見せろ」

「うわつ……エグいな……」

「容赦ないです……」

「……」

「うう……ぐつ……うつ……」

炭治郎は必死に歯を食いしばり、必死に耐える。その様子を見て
ヴォルデモート卿は感嘆の声を上げた。

「ほう……大したものだ。まさかここまでとは……」

やがて痛みが引くと、炭治郎は起き上がった。

「よく頑張ったね」

耀哉は優しく語りかけた。

「これからも君には、鬼殺隊の一員として戦つて欲しいと思っている。
そのためにさらなる訓練も積んでもらう。大変だと思うが、どうか
やつてくれるかな？」

炭治郎は黙つたまま俯いていた。

「炭治郎、返事をしなさい」

耀哉がもう一度促すと、炭治郎は顔を上げてはつきりと答えた。

「はい！俺で良ければ精一杯頑張ります！」

その様子に、柱たちは安堵した。これでようやく話が前に進められる。

「では、炭治郎については私に任せてくれるかな？」

「御意」

「よろしくお願ひします」

ヴォルデモート卿は一礼するとその場を離れていった。それを見て耀哉は、今度は不死川に向き直る。

「実弥、小芭内、行冥、天元、蜜璃。君たちも炭治郎を認めるように」

「御意」

「炭治郎君、もしも君の妹が人に襲いかかるようなことがあれば、ヴォルデモート卿の呪いが君と君の妹を殺す、覚悟はいいね？」

「はい！」

「ではこれにて、緊急の柱合会議は終わりだ。みんな、下がつてもいいよ」

そう言うと、彼らは一斉に屋敷の中に入つていった。残つたのは炭治郎と耀哉だけになる。

「炭治郎、ヴォルデモート卿に君を鍛えてもらう。私もできる限り協力しよう。だけどね、これだけは忘れてはいけない。君は一人ではないということを」

「……はい」

「それじゃあ、また会おう」

そう言い残すと、耀哉も中に入つていった。炭治郎はしばらくそこに立ち尽くしていたが、ふらつきながらも立ち上がり、蝶屋敷に戻つて行つた。

「やれやれ、随分と骨が折れましたね」

しのぶはため息混じりに呟くと、屋敷の中へと消えていった。

鬼滅の刃 柱合裁判——その2

炭治郎は目を覚ますと鬼滅隊本部、御館様の屋敷前の庭にいた。鬼となつた妹を隠していた罪でここに連れてこられたのだ。

「ここは鬼殺隊の本部です。あなたは今から裁判を受けるのですよ。

竈門炭次郎君」

蟲柱——胡蝶しのぶが話しかける。炭治郎が慌てて周りを見回すと他にも人の姿があつた。

炎柱——煉獄杏寿郎。

音柱——宇髓天元。

恋柱——甘露寺蜜璃。

岩柱——悲鳴嶼行冥。

氷柱——童磨。

霞柱——時透無一郎。

蛇柱——伊黒小芭内。

水柱——富岡義勇。

風柱——不死川実弥。

そして……ランスフオーマー柱——オブティマスプライムことコンボイ司令官。

他にも見知つた顔がいる。皆一様に表情を硬くして炭治郎のことを見ていた。
「裁判を始める前に、君の妹についての説明をしてもらいたいのだが?
?」

総司令官であるコンボイの言葉で、裁判が始まつた。

炭治郎は自分の知る限りのことを説明した。家族が惨殺され唯一生き残つた妹の禰豆子が鬼になつたこと。妹を人間に戻すため剣士になつた事。鱗滝左近次という老人の下で修行し、最終選別を突破して晴れて鬼殺隊員になつた事。任務中に十二鬼月・下弦の伍に遭遇し戦闘になつたこと……。

話し終えると、沈黙が流れた。誰も彼もがどう反応したらいいのか分からぬ様子だった。しかし、その空氣を破るように声を上げた者がいた。

「なるほど、私にいい考えがある！」

「……」

一同が怪しげな目つきで見る中、コンボイ司令は続ける。

「鬼を連れて任務に当たるとは言語道断だが、人を襲わないというのは事実だろう？ならば試せばよいではないか！」

『?』

全員が驚いた顔をする。特に一番驚いているのは当人の炭治郎だ。そんな彼の肩に手を置いてコンボイ司令は言う。

「大丈夫だ！私が保証しよう！！」

「ええ……」

あまりにも自信満々に言われて、炭治郎は何も言えなかつた。むしろ不安が増したような気がした。

こうして話は決まり、行うことになつたのは禰豆子に血を見せることだつた。これは炭治郎が自ら名乗り出た。彼は自分の責任だと思ひ込んでいたからだ。

炭治郎自ら日輪刀で指を切り、そして採つた血液を試験管に移し替える。そして禰豆子の目の前に試験管を差し出した。
それから数分後、変化が現れた。

「むーっ！うう～」

禰豆子は耐えるように体を震わせると大きく息を吐き出す。すると次の瞬間、彼女の体が縮み始めたのだ。背丈は一気に小さくなり、顔立ちも幼くなる。やがて完全に子供の姿になると彼女は寝入つてしまつた。

「おおお～!!」

それを見た全員から感嘆の声が上がる。中には拍手をする者もいた。

「すごいぞ！！本当に人を襲つたりしないんだなあ！！」

「これで竈門少年も安心できるというものだろう！！」

煉獄とコンボイがそう言つた。他の者も同意するようになっていた。

「あ、ありがとうございます」

まさかこんなにあつさり認められると思つていなかつた炭治郎は戸惑いながら礼を言う。

「よかつたわね、炭次郎ちゃん！」

「そうだよ、おめでとう！」

甘露寺や時透が祝いの言葉をかける。それに照れくさそうな笑みを浮かべる炭治郎だつたが、すぐにハツとした表情になる。（つて、違う!!俺のせいじやないけど、禰豆子を人殺しにしちゃいけないと思つたからやつただけだ！）

心の中で叫ぶが、もう後の祭りである。とりあえず、自分が望んでやつたことではないということだけは主張しておきたかった。

「さて、ではそろそろ本題に入ろうか？」

御館様こと産屋敷耀哉が口を開いた。全員が姿勢を正すと再び話し始めた。

鬼滅の刃 柱合裁判——その3

炭治郎は目を覚ますと鬼滅隊本部、御館様の屋敷前の庭にいた。鬼となつた妹を隠していた罪でここに連れてこられたのだ。

「ここは鬼殺隊の本部です。あなたは今から裁判を受けるのですよ。

竈門炭次郎君」

蟲柱——胡蝶しのぶが話しかける。炭治郎が慌てて周りを見回すと他にも人の姿があつた。

炎柱——煉獄杏寿郎。

音柱——宇髓天元。

恋柱——甘露寺蜜璃。

岩柱——悲鳴嶼行冥。

霞柱——時透無一郎。

蛇柱——伊黒小芭内。

水柱——富岡義勇。

風柱——不死川実弥。

そして……鬼柱——鬼舞辻無惨様。

「なんでこんなに人が……？」

「御館様の御成です！」

その声と共に全員が平伏する。しかし、無惨様だけはその場に佇んだままだ。

「おはよう皆。今日はとてもいい天気だね。空は青いのかな？顔ぶれが変わらずに半年に一度の柱合会議を迎えたこと、嬉しく思うよ」

(この人が鬼殺隊のトップ……)

産屋敷耀哉。代々当主となるものが『呪い』によつて身体の機能が低下し、短命である家系であるという。

「おや、そこにあるのは……」

耀哉の視線が炭治郎に向かられる。すると彼は即座に平伏した。

「彼が例の子かい？」

「はい。竈門炭次郎という少年です」

しのぶの言葉を聞いて、耀哉は微笑む。

「そうか……。では早速始めようか」

その言葉を皮切りに裁判が始まる。

まず初めに口を開いたのは音柱だった。

「さて！ 派手に判決を下すぞ！ 当然だが死刑だな!!」

「鬼を庇うとは鬼殺隊にあるまじき行為。当然死に値する」

無惨様も当たり前のように同意した。

他の柱たちも同意を示す。

しかしそんな中、反論の声を上げるものがいた。

「俺は納得できない!! どうして善良な彼女が殺されなければならない!? それに彼女は人を喰つてないじゃないか！」

炎柱だった。彼の中では禰豆子は人間として認識しているようだ。そんな彼に苛立つたのか、音柱は怒鳴りつける。

「だからなんだア!? 鬼を連れた馬鹿隊員っていうのはそいつのことだろうがア！ なら殺すしかねえだろオ!!」

「そんな理屈が通るわけないだろう!!」

「ああん!!」

睨み合う二人を見て、他の柱たちはどうしたものかと頭を抱える。「あのぉ……でも疑問があるんですけど……御館様はま何もござ意見はないのですか？」

蜜璃が手を挙げて発言する。他の柱たちがそうだそ.udだと賛同を示した。

「そうだね。驚かせてしまつてしまなかつた。炭治郎と禰豆子のことは私が容認していた。そしてみんなにも認めてほしいと思っている」その言葉にどよめきが広がる。

「鬼になつた者を信用できると?」

「嗚呼……たとえ御館様の願いであつても私は承知しかねる……」

「俺も派手に反対する。鬼を連れた鬼殺隊員など認められない」

無惨様と天元、悲鳴嶼が真つ先に反対した。それに続いて他数名が反対の意を唱える。

「私は全て御館様の望むままに従います」

「僕はどちらでも……すぐに忘れるので……」

しのぶと無一郎は中立的な立場を取る。蜜璃も少し迷っている様子だったが、最終的には賛成してくれた。

「信用しない、信用しない、そもそも鬼は大嫌いだ」

小芭内はネチネチと言い続ける。そして杏寿郎は無言のまま目を閉じている。義勇に至っては話を聞くことすらしていない。

「心より尊敬する御館様であるが理解できない考え方だ！全力で反対する！」

実弥が叫んだ。他の者もそれに追随する。

「手紙を読ませてもらつたけれど、とても感動したよ。命をかけて鬼と戦い、人を守る者がいるなんて思わなかつた。だからこそ私は君たち兄妹を認めてあげたいんだ。どうかわかつてくれないか？」

しかし、それでも反対意見は覆らない。耀哉はそれを見越してなんか、次に炭治郎に話しかける。

「君はどう思う？私の可愛いこどもたちの意見を尊重したいんだ。もちろん、無理強いはしないから考えてくれないかな？」

「……俺は……」

炭治郎は考える。自分にとつて大切なのは妹である禰豆子だ。もしここで自分が死んでしまつたら、禰豆子は本当に一人ぼっちになつてしまふ。それだけは避けなくてはならない。

「俺は……人を襲わないという保証がない以上、禰豆子をこのまま放つておくことはできないと思います」

「確かにその通りだね。ではこうしようか？これから二年間、人を喰わずに生きていけたら、その時は二人のことを許そう。それでいいかな？」

「……はい。ありがとうございます！」

こうして、二人は二年間の猶予を得た。

しかし、そんな彼らに更なる試練が待ち受けていた。

鬼滅の刃 柱合裁判——その4

炭治郎は目を覚ますと鬼滅隊本部、御館様の屋敷前の庭にいた。鬼となつた妹を隠していた罪でここに連れてこられたのだ。

「ここは鬼殺隊の本部です。あなたは今から裁判を受けるのですよ。

竈門炭次郎君」

蟲柱——胡蝶しのぶが話しかける。炭治郎が慌てて周りを見回すと他にも人の姿があつた。

炎柱——煉獄杏寿郎。

音柱——宇髓天元。

恋柱——甘露寺蜜璃。

岩柱——悲鳴嶼行冥。

氷柱——童磨。

霞柱——時透無一郎。

蛇柱——伊黒小芭内。

水柱——富岡義勇。

風柱——不死川実弥。

そして……ゴリラ柱——ビーストコンボイ。

コンボイがビーストモードを解除しゴリラから人型に変形する。

その姿を見た瞬間炭治郎は思わず声を漏らした。

「ゴリラが変形した?」

その言葉に全員がズつこける。

「誰がゴリラだ!! 私はセイバートロン星出身のビーストコンボイ! よろしく!」

そう言つてビーストコンボイは手を差し出す。その手を握りながら炭治郎も自己紹介をする。

「あ、はい。俺の名前は竈門炭治郎と言います。こちらこそよろしくお願ひします」

お互い握手を交わしていると、先程まで黙つていた御館様と呼ばれた人物が口を開いた。

「やあみんな。今日はとてもいい天気で嬉しいな。空は青いのかな?」

顔ぶれが変わらずに半年に一度の柱合会議を迎えたこと嬉しく思うよ」

穏やかな笑みを浮かべて挨拶をした御館様に皆一様に頭を下げる。「お館様におかれましても、壮健で何よりです。益々の御多幸切にお祈り申し上げます」

「ありがとう実弥」

そう言うと御館様と呼ばれる男性は微笑んだ。

(この人が鬼殺隊のトップ……。凄く優しい匂いがする)

ふわっと暖かい空気に包まれるような感覚に陥りながらも炭治郎はじつとその男性を見る。すると隣にいるしのぶが口を開いた。

「畏れながら、柱合会議の前にこの竈門炭治郎なる鬼を連れた隊員について、説明いただきたく存じますがよろしいでしょうか?」

「そうだね。驚かせてしまつてしまなかつた。だけど、私の子供たちに伝えておくことがあるんだよ。まずは鱗滝左近次殿からだね」

その言葉に鱗滝の名前が出てきたことに驚きつつも他の者は耳を傾ける。

「文にも書いたけれど炭次郎の妹である禰豆子は人を喰わない。今までもこれからもだよ。このことは私が保証しよう」

「あり得ません!! 人を襲わないなどと言うことはありえない!!」

間髪入れずに反論したのはやはりというか風柱だった。だが、その言葉を聞いた瞬間御館様の顔色が曇つたような気がした。しかしそれも一瞬のこと。すぐに表情を元に戻すと今度はゆっくりと話しだした。

「ならばどうしようか……コンボイ君」

突然話を振られたセイバートロン星の戦士、ビーストコンボイはその鋭い眼光を向けてきた。

「君は鬼滅隊の柱の一人もあるんだ、どうだろう? 君の目から見て彼女は本当に人を襲わないと思うかい?」

そう言われてビーストコンボイは再びゴリラのような姿になる。その光景を見て一同騒然となるが構わずゴリラから人型へと姿を変える。そして少し考え込んだ後口を開く。

「私にいい考えがある」

コンボイはいいアイデアを思いついたとばかりに声を上げる。

自信満々に言つたコンボイの言葉を聞いてその場にいたものは全員顔を青ざめさせた。

「ダメだ！それだけは絶対に駄目だ！」

コンボイのいい考えはフラグである。それはコンボイを除く柱達全員の共通認識であつた。

「大丈夫さ！ちょっと痛いかもしけないけど死ぬことはないから」

その言葉で更に不安になつた面々だったが、誰も止めるものはいかつた。

「よし！じゃあ早速始めよう！みんな離れてくれるかな？巻き込んでやうから」

「ま、待つてくれ！一体何をするつもりなんだ!?」

嫌な予感がした炭治郎が声をかけるが時既に遅し。

「こうするのさ!!」

ビーストコンボイが指をパチンッと鳴らすと同時に辺り一面が眩い閃光に包まれた。

「目があああ!!目がああ!!」

あまりの明るさに炭治郎はあまりの痛みに悶絶する。

そんな炭治郎にビーストコンボイは優しく声をかけた。

「すまない少年、手加減はしたつもりだつたんだけど……彼女をスキヤンしてみた。確かに普通の人間とはどこか違うようだ。だが彼女が人を襲うことがないということは証明された」

「だからってこれはないでしよう！全くあなたときたら……」

ビーストコンボイに呆れたようにため息をつく胡蝶しのぶ。

「お館様、失礼を承知で申し上げますが、私は反対です！人を襲わない証明ができたとしても鬼であることには変わりありません！危険すぎます！」

「俺も派手に反対するぜ！鬼を野放しにするわけにもいかねえ！」

不死川実弥に続いて宇髄天元も同じ意見だと言わんばかりに手を上げた。

「俺は……どちらでも構わない……好きにしろ」

「あら？ 私は賛成よ！ だつて可愛いじゃない！」

「僕も……どちらかといえば賛成かな」

「南無阿弥陀仏……人であろうとなからうと罪なきものを罰するのは間違つている」

「僕はどうでもいいですよー」

「俺もだ。甘露寺がそう言うなら俺もそれに従う」

「俺も異論はない」

「私も別にいいわよ」

次々と上がる賛同の声に、反対意見を唱えていた者達は苦虫を噛み潰したような顔となる。

「それでは、竈門炭治郎及び竈門禰豆子の処遇については、ビーストコンボイのおかげで人を襲わないことの証明がされたということで、以後二人の身柄は我々鬼殺隊が預かる。いいね？」

御館様の言葉に皆一堂に頭を下げる。

「では、竈門兄妹の件はこれで終わり。次は新しい柱を任命したいと思う。では紹介しよう、彼が新しいニューリーダー柱のスタースクリーム君だ」

どこからがジエット機が飛んでくるとそのままキギギガガゴゴと人型ロボ生命体に変形した。

「俺がニューリーダーのスタースクリームだ！」

「なんかまた増えた！」

再び炭治郎は思わず声を漏らしてしまった。それに気づいたのは隣にいたビーストコンボイだけであつたが。

「おいテメエ、今なんて言いやがつた？？ もう一回言つてみやがれ」

「え？ い、いえ。なんでもないです」

「まあいい。とりあえずこれからよろしく頼むぜ」

そういうとスタースクリームは炭治郎に向かつて握手を求める。

「はい。こちらこそ」

そういうことになつた。

鬼滅の刃 柱合裁判——その5

炭治郎は目を覚ますと鬼滅隊本部、御館様の屋敷前の庭にいた。鬼となつた妹を隠していた罪でここに連れてこられたのだ。

「ここは鬼殺隊の本部です。あなたは今から裁判を受けるのですよ。

竈門炭次郎君」

蟲柱——胡蝶しのぶが話しかける。炭治郎が慌てて周りを見回すと他にも人の姿があつた。

炎柱——煉獄杏寿郎。

音柱——宇髓天元。

恋柱——甘露寺蜜璃。

岩柱——悲鳴嶼行冥。

氷柱——童磨。

霞柱——時透無一郎。

蛇柱——伊黒小芭内。

水柱——富岡義勇。

風柱——不死川実弥。

そして……鬼柱——鬼舞辻無惨。

この場にいる全員が『柱』と呼ばれる最高戦力であり、最強の剣士達だ。そんな彼らが一様に険しい表情で炭治郎を睨みつけている。

その威圧感に気圧されながらも炭治郎は口を開く。

「裁判を行う必要などないでしよう！俺の妹は人を喰つたりしない！」

「お前の話を聞くつもりはない」

無情にも告げられる言葉。だがそれでも食い下がるように言葉を紡ぐ。

「聞いてください！俺は禰豆子を治すために剣士になつたんです！禰豆子が鬼になつたのは二年以上前のこととで、その間人を食べたりしていない！」

必死になつて叫ぶ。しかしそれを遮るようにして声が上がる。

「くだらない妄言を吐き散らかすな。そもそも身内のこと庇うなど

まともじやない。まず自分の罪を自覚しろ。その上で処罰を受ける。

話はそれからだ」

蛇柱である伊黒の容赦のない物言いに炭治郎の心は折れかけるがなんとか踏み止まる。

（諦めちゃダメだ……。俺は何としても禰豆子を助けるんだ）

「そもそも童磨さんも無惨さんも鬼じやないですか!?なんでシレツと柱としてここに紛れ込んでるんですか!?」

至極真っ当なツッコミをして見た。そもそも何故彼らはこの場にいるのだろう。そもそも童磨に至つてはまだ出番はずつと後のはずだ。

「いやーごめんね?でもなんか面白そうだつたからつい……」

「ええい黙れ戯け者!!今はそんなことどうでもいいだろう!!」

「そりだぞ貴様らアツ!今はそこの鬼を斬首するかどうか決めるべきだろうがアツ!」

「そりだぜエ。さつきと始めようじやねえか」

だが炭治郎のツッコミは華麗にスルーされ、童磨の言葉を皮切りに次々と反対意見が出てくる。

そんな中、無惨様が静かに手を挙げた。

「少しいいか?」

「むう!なんだ無惨さんよ!何か意見があるのか!?」

「ああ。こいつの処遇についてなのだが……私は反対だ。生かすべきだろう」

「!!」

まさかの反対の意見にほかの柱達全員が驚愕したような顔をする。それは炭治郎も同様であった。

「理由をお聞かせ願おう!」

「理由は二つある。一つはこの少年が言つたことが本当であるという可能性だ。もしそれが事実ならば鬼殺隊にとつて大きな利益となる」「ほう……続ける」

「二一つ目はこの少年だ。彼は私を見ても恐怖心を抱いていないように見える。それどころかどこか親近感のようなものを抱いているようになら見える。おそらく彼が言っていることは真実に近いのではないかと私は思うのだ」

「……なるほどなあ。無惨さん、お前にしちゃあ随分と氣色の悪いことを言うじやねえか」

「おい不死川、余計なことは言わんでいい」

無惨様の提案に反論するものはいないようだ。それに安心しつつ炭治郎は次の言葉を待つ。すると今度は耀哉の声が上がった。

「ふむ……ではこうしようじやないか。竈門炭次郎は監視付きではあるが引き続き鬼狩りを続けてもらう。そしてその間にもしも彼の妹に人に害を及ぼす兆候が見られた場合はその場で斬つてしまつても構わないことにするというのはどうかな?」

「ちよ、ちよつと待つてくれ!俺は納得できないぞ!なんでそんな条件になるんだ?」

炭治郎の主張に耀哉は首を振った。

「残念だけど君の要望を通すことはできない。これは決定事項だと思つて欲しい。それにこれは君の為でもあるんだよ。君はこれから先も今まで通りに戦うことができるという保証が得られるかもしれない。そうなれば君は妹の為に全力を出すことができて鬼を倒すこともできる」

「そ、そんな……」

確かにこの提案は悪くないよう思えた。だがそれでも凜然となりところはあるし、このまま何もせずに引き下がれないと思つた。その時だ。

「お言葉ですが御館様。私にはどうしてもその案を飲むことができない理由があるのです。よろしいでしようか」

「うん、言つてごらん。しのぶ」

蟲柱である胡蝶しのぶだ。彼女はいつもの穏やかな微笑みを消し去り真剣そのものといつた顔で口を開いた。

「竈門炭次郎君の話が本当だと仮定した場合、鬼滅隊の存続に関わる

事態に陥りかねません。なので彼に関しては私が預かるべきだと思います」

その言葉に炭治郎は目を見開いた。それは他の柱達も同じだ。しかし無惨様だけは違っていた。

「ふむ。お前は彼を信じると言うのか？」

「はい。信じたいです。例えそれがどれだけあり得ない話であつても、私はこの人を信じます」

真っ直ぐとした視線が突き刺さる。そのあまりにも力強い瞳に一瞬言葉を失う。

「…………わかつた。ではお前に任せるとしよう。だが、万が一の場合は……」

「承知しております」

「…………ならいい。好きにするといい」

それだけ言うと無惨様は目を閉じた。これでこの件については決着がついた。

「…………つて待つてください！なんで無惨さんが仕切ってるですか!?御

館様の出番は!？」

「もう終わつてしまつたことだからね。諦めよう」

「えええく……」

完全に空氣と化していた御館様は無惨様とそのまま屋敷の奥へと消えていった。後に残つたのは不満げな童磨だけだ。

鬼滅の刃 猿窓座問答

煉獄杏寿郎と対峙した猿窓座は、その目を見据えて話しかける。

「杏寿郎、お前も鬼にならないか？鬼はいいぞ。今なら無惨様ポイント20%還元サービスに布団セットもついてこのお値段！」

「もう一声！」

「無惨様ポイント30%還元サービスでどうだ！そしてさらに……」

「待ってください、それは本当ですか？」

思わず食いついてしまった炭治郎だが、煉獄さんがすごく嫌そうな顔をしているのを見てハッと我に返った。そうだよな、あんなこと言われたら普通引くよな……でも俺、あの布団セットちょっと欲しいかも……。

そんなことを思っている間にも、二人の会話は続していく。

「なるほど、そういうことだつたのか。ちなみに無惨様ポイントを貯めるとどんなお得なことが？」

「まずは無惨様が夢枕に立つ権利を得る。次に、十二鬼月のサイン色紙もプレゼントだ」

「なんと!?」

「それから……無惨様に褒められる!!」

ドヤアアアツという効果音がつきそうな顔である。えっ、それマジですごいことじやないの？ 炭治郎は思つた。無惨さんつてただのラスボスじゃなかつたんだなあ、と。

「うむ！俺はならない！！」

「そう言うと思つたぞ！ではさらにお得な点をパワーポイントでまとめてみた。御手元の資料をご覧下さい」

「おお、これは！」

「どうです、素晴らしいでしょう。ちなみにこちらのプランには……」

いつの間にか勧誘からプレゼンに変わつていることに気がついた時にはもう遅い。あれよあれよという間に、二人は意氣投合して盛り上がりつていた。

「——ということなのです」

「なに!?」

「どうですか、素晴らしい提案だと思いませんか?」

「……確かに素晴らしい!」

いやいやいや!! 何やつてるんですか二人とも!! さすがに止めなければと思い、炭治郎は慌てて割つて入る。

「ちょ、ちょっと待つてください!俺たちはあなたたちに構つている暇はないんです!」

「まあまあ、そんなことよりお前達も鬼にならないか?」

「ならない!」

「ならば鬼にならない代わりに『無惨様ポイント』を提供するというのはどうだろう。これがあればいつでも無惨様に会えるのだぞ?」

「なります!!!」

「竈門少年!?」

しまつた、つい釣られてしまつた。だつてこんなチャンス二度といいかもしれないし、無惨さんのサインなんて欲しくないわけがないじゃないか。

「ほほう、なかなか話がわかる奴だな」

「ああ!俺は長男だからな!!」

胸を張る炭治郎と盛り上がる彼らの横で、善逸だけが早く帰りたいな、と遠い目をしていた。

ハリー・ポッター フアンタステイツクビースト先輩と黒い魔法使い

「で、ポッターキュン。どう責任を取るつもりかね」

タニオカは机の上に足を投げ出し、腕組みをして言った。

「まさかこのまま泣き寝入りするつもりではあるまいな?」

ハリーは顔をしかめて部屋を見回した。

天井は高くて広く、壁には古い羊皮紙やら何やらが雑然と貼られて

いる。

部屋の真ん中には大きな暖炉があり、火は消えているが、灰の中には何かの燃え残りがあつた。暖炉の脇の壁には、箒置き場のような棚があつて、そこに大小さまざまな箒が並んでいる。

その反対側には本が何列も立ち並び、ハリーの座っている椅子のすぐ後ろにあるテーブルにも本が山積みになっていた。

そして、床には毛むくじやらの巨大な生き物が横たわっていた。

「君の後輩たちについては、怪我はなかつたし、まあ、大目に見ようじゃないか」

タニオカはテーブルの端に置いてあつた杖を取り上げながら言った。

「だが、君は責任を負わなければならぬ」「あの——先生? 僕はただ——」

「口答えをする気かね?」

タニオカは冷たい目でハリーを見た。

「ポッターキュン、私は君から自ら責任を負うと聞いたのだ。だからこうして、わざわざ私の部屋まで来てもらっているのではないかね? さあ、早く座りなさい」

ハリーは仕方なく席に着いた。

タニオカは相変わらず厳しい顔つきのままだ。

「ポッターキュン、君のことはよく知っているよ。去年一年間、ずっと観察してきたからね。しかし、私が聞きたいのはそういうことではない

んだ。わかっているだろう?」

「えーっと……僕が……何をすればいいのかってことですよね?」

「そうだ」

「つまり——罰則ですか?」

「当然だ!」

タニオカはピシヤリと言った。

「本来ならグリフォンドールを10点減点するところだが、君の場合
はそうもいかん! まったく! どうしてこんなことになつたのかね!?」
「すみません……」

「謝る必要はない。むしろ褒めるべきことだ。後輩を庇うとは何と自
己犠牲に溢れた行動ではないか! それともなんだね、ポツターキン、
君の後輩たちも、わざとやつたんじゃないだろうな?」
「そんなわけないじゃないですか」

ハリーは憤慨して言つた。

「そりやあ、ちょっと疲れていたかもしませんけど……。でも、わざ
となんかじやありません」

「それは結構」

タニオカは少し機嫌をよくしたようだ。

「とにかく、ポツターキン、まずは私に詫びるところからだな。私が君
の立場だつたら間違いなくそうするはずだ。君もそうしろ。わかつ
たか?」

ハリーは返事をしなかつた。

この男はなんでこう高圧的なのだろうかと思つた。

「ポツターキン、聞いておるのか?」

「はい、もちろんです」

「よろしい。では、もう一度言うぞ。私が君の立場だつたら間違いな
く、詫びを入れる。そして心の底から後悔するだろうな。ああ、なぜ
あんなことをしてしまつたのだろうと。それで許してくれるかどうか
わからぬが、とりあえず、自分の非を認めるところから始める。
わかるかね?」

ハリーは黙つていた。

「ポツターキーくん、私が言いたいのはこういうことだ。君は後輩を庇つた。実に素晴らしい。しかし、それが間違いのもとになつた。君はその行為によつて自らの首を絞めることになつたのだよ。これは大変な過ちだ。君にもわかつてゐるはずだ」

「はい」ハリーは力なく言つた。

「まあいい。これからは気をつけるように。さて、ポツターキーくん、これからが問題なのだ。今回の件について、学校側はどう対処するかということだ。生徒一人一人の安全を確保する義務がある。それに、ホグワーツでは魔法生物飼育学はとても人気の授業だ。もし、生徒が危険な魔法生物のそばにいて事故が起つたとなれば、他の授業への悪影響も計り知れないものになる。そのあたりはどう考へるかね？」

「はい、先生。その通りだと思います」

「よし、そこでだ。我々が取るべき手段は二つある。一つは、このまま何もなかつたことにして、この件については一切触れないこと。もう一つは——」

タニオカは杖を振り上げ、暖炉の上に置いてあつた砂時計を引つくり返した。

「——『魔法生物規制管理部』に連絡することだ」

ハリーは思わず立ち上がつた。

タニオカの言つた言葉の意味がよく理解できなかつた。

「どうしたね、ポツターキーくん？ 座らんか」

「あの——どういう意味でしようか？」

「そのままの意味だ。君も知つての通り、魔法省には、『魔法生物規制管理部』というものがあつて、その名の通り、魔法省の所有するすべての生き物を管理している。魔法動物、マグルのペット、それから

……」

「待つてください。僕が言つてるのはそうじやなくて、どうしてその……その人たちに話す必要があるんですか？」

「ポツターキーくん、何を馬鹿げたことを言うのだね。これは君の起こした事件ではないのか。君が責任を取らなければならん」

「でも――でも、僕たちはただクイディッチの練習をしてただけです。

本当にそれだけなんです。それなのに――

「ポツターキくん、君はまだ子供だ」

タニオカは冷たく言つた。

「だから知らないのだろう。物事にはルールが必要なのだ。君には少し難しかったかな？ 君のような子供が事故を起こした場合、学校の規則に従つて処理されなければならない。これは絶対のルールだ。そうしなければ、保護者や世間は納得しないし、私自身も困ることになる」

「僕はただ――」

「ポツターキくん、言いたいことがあるのならはつきり言いたまえ。無言は美德でない。特に、こういった場合においては。君の言い分を聞かせてもらおう」

「あの――先生、僕はただ――」

「ポツターキくん、君は先ほどから同じことしか言わない。いい加減にしなさい。君は何が望みなのか？ 君の主張を聞こうじゃないか」

ハリーは口をつぐんだ。

そして、椅子に座り直した。

「僕は――」

「ポツターキくん、君は自分が悪いことをしたとは思っていないのかね？ 私は君を信じられない。君は何かを隠しているのではないか？ たとえば、君は後輩を庇うふりをして、実は自分が助かりたかつただけなのではないかと疑っている。違うかね？」

「違います！」ハリーはカツとなつて言つた。

「僕はただ――」

「ポツターキくん、君は少し感情的になつてゐるようだな」

タニオカは暖炉の方へ杖を振つた。

すると、灰の中から大きな金色の卵のようなものが現れた。

ハリーは目を丸くしてそれを見つめた。

「さあ、ポツターキくん、これを見たまえ」

タニオカは机の上の箱から小さなガラス瓶を取り出し、蓋を開けて中の粉をパラパラとかけた。

「ポツターキーくん、この鳥を見たまえ」

ハリーは机の上に載っていた大きな生き物を見上げた。生き物は長い首を伸ばし、ハリーを見下ろしていた。まるでハリーを観察しているかのようだつた。

頭は金色で、目は真っ黒だ。

背中は茶色の羽毛で覆われ、翼は小さく畳まれていた。足は短く、体に比べて大きすぎるよう見えた。

「ポツターキーくん、この生き物はフェニックスだ」

タニオカが静かに言つた。

「不死鳥とも呼ばれている。私が飼つているんだ。いいかね？私は魔法使いだ。魔法を使う。そして、魔法を使えば、このような生き物を手懐けることも簡単だ。ポツターキーくん、私は君に期待していた。君の態度からは、君は心根の優しい人間だという印象を受けた。しかし、今の君の様子を見ると、その考えを改めざるを得ないようだ」

「あの――先生」

「ポツターキーくん、私は君が心配でならない。君がこれからも、同じような失敗を繰り返すのではないかということだ。そして、そうなれば、ますますホグワーツの名声は落ちていくことになるだろう。君の後輩たちの将来にも関わることだ」

ハリーは目の前にいる生きものを見つめたまま、何も答えなかつた。

「ポツターキーくん、君ももうすぐ五年生だ。そろそろ自分の言動に責任を持つべきだと思うがね」

「先生――」

「ポツターキーくん、私は君がただ罪を認め謝罪さえしてくれればいいのだよ。分かるかね？ 簡單なことではないか。私は君の味方だ。だから、安心しましたまえ」

「僕――」

「ポツターキーくん、何だね？」

「僕――僕、そんなつもりじゃ――」

「ポツターキーくん、はつきり言いなさい」

「僕——そんな——」

「ポツターキーくん、君は——」

「ごめんなさい！」

ハリーアは立ち上がり、タニオカに向かつて深々とお辞儀をした。

「すみませんでした！」

「よろしい」

タニオカは満足げに微笑み、杖を振つて、フェニックスを暖炉の中に戻した。

「ポツターキーくん、無知は罪だが、学ばざることもまた罪だ。君は今一つ学びを得たね。さあ、座りなさい」

ハリーアはおずおずと腰を降ろした。

タニオカは杖を暖炉に向け、もう一度振つた。

今度は、暖炉の火が再び燃え上がつた。

「さあ、ポツターキーくん、これですべて元通りだ」

「あの……先生……」

「なんだね？」

「僕の処分は……」

「ああ、そうだな」

タニオカは少し考える素振りを見せた。

「うむ、そうだな。君は自己犠牲を学び、真摯に謝罪することを学んだ。よつてグリフィンドールに10点！それとは別に、君には反省文を書いてもらうことにしよう」

ハリーアはホッとしてため息をついた。

「それから、君には罰則を与えることにする」「えつ？」

「当然ではないか。君は罰を受けなければならぬ」

「で、でも——」

「もちろん、軽いものだ。今日のところは寮に戻つて休みたまえ。明日の夕方六時に私の部屋に来るよう」

ハリーアは立ち上がつた。

そして、もう一度お辞儀をしてドアに向かつた。

明

「ポツターキン」

タニオカの声だ。ハリーは振り返った。

「君がやつたことは褒められた行為ではないが、しかし、君のような生徒がいることは喜ばしいことだ。これからも学び続けなさい」

ハリーはニッコリ笑って、もう一度お辞儀をし、タニオカの部屋を後にした。

鬼滅の刃 無限なんとか編

キテレツの刃 無限ラツシャイ編

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

「杏寿郎、お前も八百屋にならないか？」

「断る！俺は俺の責務を全うする！」

「そう言うなよ、ちょっとぐらいやつてみろって」

「断じてならぬ!!」

ブタゴリラは諦めず勧誘するが全く相手にされない。

「杏寿郎、残念だ……ならここで死ぬしかないようだな……」

「なんと??」

「コロッケ大好きナリ」「ワガハイナリ」「オイナリ」「暖かいナリ」「ナリ」「ナリ」

突如現れた量産型コロ助の群れ。機械特有の一糸乱れぬ動きの群れは、瞬く間に杏寿郎を取り囲みに鋭い刃を突きつけた。

「どうだ杏寿郎、やるのか？やらないのか？」

「ぐつ……しかし……むう……うおおお!!ならばやつてくれるわ!!」

こうして炎柱である煉獄杏寿郎は八百屋を始めることになった。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

まず杏寿郎はサツマイモから始めることにした。

「いらっしゃいませー!!焼き芋いかがですかー!!」

声を張り上げ大声で客引きをする杏寿郎、そこへ炭治郎がやつてきた。

「煉獄さん!?」

「見ての通り焼き芋を売り歩いているんだ！」

「へえ、そうなんですか」

「竈門少年！君も買わないか？うまいぞ！」

「えつと……じゃあ一つください！」

「まいどありー!!」

「んぐんぐ……美味しいですねコレ！」

「どうう！ さあどんどん買ってくれ！」

「はい！ありがとうございます！」

杏寿郎の声を聞いた人は次々と焼き芋を買っていく。その数は減

るところがますます増えていき列ができるほどにまでなった
そして夕方になる頃には売り切れてしまいその日の営業は終了し
た。

A vertical column of 15 alternating black and white triangles pointing downwards.

閉店後、店の裏では今日一日の売り上げの確認が行われていた。

「えーっと今日の売り上げは……うおおすげえ！」

「よもやよもやだ、まさかここまで八百屋に向いているとは思いもしなかつたな！」

驚くのはそれだけではない。何より驚いたのはその利益額だつた。通常の倍近く売れたのだ。

一休とニヤーからそんが

「そうだな、だが俺自身にも理由はよく分からぬ

首を傾げる一人だつたが杏寿郎にはある考えがあつた。

(もしこの調子で売れ続けるようなことがあれば……父上の目に留まるかもしれん)

横寿郎の目に留まるかもしれないという淡い期待を抱く。

その日以来、杏寿郎による『無限ラツシャイ』作戦が始まつた。

結果、それは見事的中した。

噂を聞きつけた人がこぞつて訪れるようになり連日の大盛況となつた。

ちなみになぜ千個なのかと言うと、一日に二万八千個売れば杏寿郎の父である楳寿郎が気づくのではないかという考え方からである。

実際その試みは成功し横寿郎が興味を持つようになるのだが、
まだ知らない。

名探偵コナン
密室ペンション殺人事件

見た目は筋肉、頭脳は筋肉。眞実はいつも筋肉。

その名は——名探偵コナン・ザ・バー・バリアン——

A vertical column of 15 alternating black and white downward-pointing triangles, arranged in a repeating pattern.

「そうか
わかつたぞ狂人か！」

二ナンの筋肉の詰まつた脳筋色の頭脳が推理を見出す

「おい待て！ なんでお前は推理をすると突然に脱ぐんだ！」
コナンは筋肉を見せつけながら、推理を語り出す。

このダイイシングメッセリジの意味するところは……

『あ』から始まる単語を探し当てる。それはたつた一つの単語。

「『赤』だ！」

「……？」
そしてその瞬間、部屋の明かりが全て消えた。停電である。

音圓の口が混

田間の口、海三島のハマヒメ、一ノ瀬御所月日は、三ノ瀬に在りて、

「電気系統のトラブルに違いないな。つまり犯人はこの場に潜んでいる！俺が殴つて死んだやつが犯人だ。今から全員ぶん殴る！大人しく全員殴られる！」

そう言って部屋を見渡す。その時たまたま窓の向こう側から何か黒いものが見えた。人影である。

コナンはそれを確認して叫んだ。

「いたぞ!! あいつが犯人だ!!」

「くそっ、逃げられたか……！」

悔しがるコナン。そこに蘭が言う。

「それよりお父さん、さつきの停電だけど……。あの時誰かがブレー
カーを落としたんじやない?」

「ああ、そうだよ。きっと犯人

英理もそれに同調した。だが小五郎はまだ疑つてゐるようだつた。「んなことしなくとも、普通に消すだけでいいじゃねーか」

「それが出来なかつたんだよ」

「何故だ？」

「だつてほら、ブレーカーには指紋がつくじやないですか。もし手袋をしてたとしても、拭き取らないとダメだし……」

「なるほど……そういうことが」

小五郎はその説明で納得したようだ。そして次の瞬間には、もう興味を失つたように眠りについた。さすが眠りの小五郎だ。

「ええ……」

しかし、蘭は呆れた声を出すしかなかつた。

コナンは犯人の人影を追いかける、ほぼ全裸で。

「筋肉は！いつも！ひとつ！」

全裸に近い姿で筋肉を見せつけるように全力疾走しながら
のようなことを叫ぶコナン。その様子はもはや不審者である。通報
案件だ。

しばらく追いかけると、人気のない場所に出た。

そこは倉庫街らしく、周囲は高い塀で囲まれている。

える。

(ここなら大丈夫だろう)

そして残りの服を脱ぎ始めた。全裸になつて屏を乗り越えようと
する。その時だつた。

——パンツ！
乾いた銃声が聞こえた。

撃たれたのだ。背後から何者かによつて。だが、たかが銃撃で鍛え抜かれた筋肉に傷を与えることは出来ない。高度に発達した筋肉は魔法に等しい。銃弾ごときではビクともしない。

「うわあ!? 効かない!? こいつ何者だ!?」
パン！パン！再び、そして三度の銃声。それでもなお、弾かれ
たような反応を示すコナンの体を見て、発砲者は慌て始める。

「そこまでだ！」――パン！ 四度目の弾丸が放たれようとしたその時、

男の声が銃撃を遮る、男の名は——江戸川コナン。

見た目は筋肉、頭脳は筋筋。眞実はいつも一つ。その名は——コナン・ザ・バー・バリアン！

「お前がこの事件の真犯人だな!?」

筋肉を見せびらかすようにポーズを取りながら言つた。

そんな彼の姿を見て、男は観念したように両手を挙げる。

「くそっ！バレちまつたか……」

彼は白状するように語り出した。

「そうだよ、俺がやつたんだ。全て計画通りだつたのに……」

「計画だと？」

「ああ。俺は元々探偵だつたんだ。毛利さんに弟子入りして、いつかは自分の事務所を構えようと意気込んでいた……。なににある日突然、あの人はお前を預かつたからつて追い出されたんだ。俺はただ名を上げたいだけなんだ！だからあの人を殺して、俺が犯人になれば名が上がると思つたんだ！」

そう言いながら拳銃を取り出し、それをこちらに向けてきた。

「くそっ、こうなつたら死んでもらうしかないな……！」

そして引き金に手をかけた。

しかしそこで、コナンは冷静に推理をする。

(落ち着け……) いっぽうは素人だ。落ち着いて行動すれば勝てるはずだ
⋮つまり素早く近づいて殴り殺す！)

「死ねえ!!」

男が叫びながら引き金を引こうとするが、それよりも早く、コナンが動いた。男の懷に飛び込むと、そのまま腹に拳を叩き込んだ。

「グフウ！」

悶絶する男。コナンはそのまま男に馬乗りになると、何度も顔を殴つた。

「ぐつー！がはつー！やめろ！」

必死に懇願してくるが、コナンは構わぬ殴る。やがて顔の原型が分からなくなるくらいまでボコボコにすると、ようやく満足して殴るのをやめた。

「ふう、スツキリしたぜ！」

コナンは立ち上がると服を着直し始めた。

翌日新聞の一面上には

『連續殺人鬼逮捕!』

『真猶人は少年探偵団の「子供がせ』

二儀を人質に取って立てこもり

アーティストの写真

筋肉の申し子——コナン・ザ・バーバリアン。

米花町は今日も平和である。

九
本
レ

• 100 •

??あとかき??

はしゆらして もしくは こんなにせは 作者でて

うござります。

加筆修正したもののです。

元々はもつとギヤグ要素の強い作品だつたのですが、「筋肉キヤラ
を出して欲しい」という要望があり、それに応える形でこの作品が生
まれました。

まあ、そのせいでシリアル的な要素が薄くなつた気もしますが……

せがみは作中でコナンが勝いた理由は 特にあります
うなら、作者の趣味です。それと作中に出てくるコナンの推理シ
ン。あれは全部嘘です。本当はあんなこと言つてません。

「犯人はあの窓の向こうにいた！」とか「犯人はこの中にいる！」なんて言つてません。

もし仮にそんなことを言つていたら、読者の皆さんに怒られるどころの話ではありません。本当にすいませんでした。

最後に謝辞を。

担当編集のKさま。いつも色々と相談に乗ってください、本当に感謝しております。あなたのおかげでここまでやつてこれました。

イラスト担当のU先生。毎回素晴らしいイラストを描いていただいており、本当に嬉しい限りです。これからもよろしくお願ひ致します。

挿絵を書いてくれた、S先生。とても可愛らしい絵に仕上げていただき、感無量であります。

そして何より、この本を手にとつてくれた皆様に最大の感謝を申し上げたいと思います。

ハリー・ポッター　おじぎをするのだ　その1

「お辞儀をするのだポッター」

ヴォルデモート卿の声が響く。

「いいかポッター、お辞儀の角度はこうだ」

「こうですか先生」

ハリーはできるだけ深く頭を下げた。しかしヴォルデモート卿が言つたとおりにうまくいかず、額の傷痕を床に打ちつけてしまった。それでも、なんとか言われたとおりにした。

「そうだ。それでよい……では練習を続けろ」

ハリーは再び深々と頭を下げて見せたが、今度はもつと上手だった。しかし、またしても額を打ちつけた。

「もう一度やつてみせろ！」

ヴォルデモート卿が大声を出した。

「はい！でも――」

「ポッター、いいかお辞儀とは礼節だ。わかるな」

「はい先生、わかります。でも僕――」

「ポッター、俺様はお前を魔法界のどこに出しても恥ずかしくない男子にしようと決意した。それがこの俺様にとつてどれほど重大なことかわかっているのか？お前は今まさにその第一歩を踏み出したのだぞ？」

「すみません……」

ハリーはまた謝った。そして今度は、もう少し上達してみせた。「よし、よくやつた。だがまだ駄目だ。敬意を払う態度にはなつていな」

「どうすればよろしいでしようか、先生」

ハリーが聞いた。

「それを教えようとしているところなのだ」

ヴォルデモート卿が答えた。

「さあ、もう一度やつてみせろ。次はもつとうまくやるのだ。俺様に恥をかかせてはならぬ」

「はい、わかりました」

ハリーはそう言うと、今度はもつと滑らかにお辞儀をして見せ、床に頭を打つことなくやり遂げた。しかし、顔を上げるときに勢いあまつて頬から胸までぶつけて、仰向けに倒れてしまった。

「すみません！」

ハリーは急いで起き上がりながら、もう一度謝った。

それからはもう、お辞儀の仕方で何時間も練習させられた。だんだん慣ってきて、今度は額をぶつけずにすんだ。しかし、お辞儀をしているうちに体が痛くなつた。

A vertical column of 15 alternating black and white triangles pointing downwards.

ハリーは自分がひどく疲れていたことに気づいた。

「ボツタ！」今日はこれくらいにしておこう

「ヴォルデモート卿が言つた。

しかし、明日もまた来なくてはなりませんか?」

ハリーは息を切らしながら聞いた。

「当然だ。お前が立派な紳士になるにはあと十日ほどかかるだろう」

「立派な土産物がござります。」

ハリは弱々しく語りで立せ上がりかけた

しかしそれ舐傷のしあわせが弱てた足腰がもろれて、そのまま後ろにひっくり返つてしまつた。そして、後ろ向きのまま滑つて、壁にぶつかった。

「ポツタ一、大丈夫か？」

「すみません、だいじょうぶです……」

ハリーは体を起こしながら答えた。そしてやつと立ち上がった。

「立て続けの練習は休むことがない。」

「おっしゃる通りです……」

ハリーは弱々しい声で答える。

「では、今日はこれで終わりにする。また明日来るが良い。今日はしつかり休むように。いいな?」

「はい……わかりました……」

ハリーはふらつきながら部屋を出ていった。扉のところで振り返ると、ちょうどヴォルデモート卿が机に向かって何か書き物を始めるところだつた。

その夜、ハリーはベッドに入つてからもなかなか寝つけなかつた。ヴォルデモート卿が本気で鍛えてくれてることには感謝していた。だけど、なぜあんなに厳しくするのか理解できなかつた。

ヴナルテモリト岬はハリーに魔法のことを教えてくれた恩人である。それにホグワーツ入学までの六年間、ずっと先生として面倒を見てもらつたわけだし……。

なのにあの人は、いつも僕のことを叱りつける——。

僕が悪いんだけど

——僕がもつと礼儀正しくすればいいだけなんだ——

——どうしてこんなにたくさんお辞儀をしなくちゃならないんだ

うか?

——ああ、頭がクラクラしてきた——。

おやすみなさい。

A vertical column of 15 alternating white and black triangles pointing upwards. The sequence starts with a white triangle at the top, followed by a black triangle, then a white triangle, and so on, ending with a black triangle at the bottom.

次の朝、ハリーは目を覚まして、まず額の傷痕をさすつた。

それから、ベッドを下りて着替え、顔を洗い、歯を磨き、髪をとかした。

そして昨夜の残りのチキンスープを食べてから、朝食の時間までまた練習した。今度は、あまりお辞儀の姿勢が崩れず、傷痕を床に打ちつけずにすんだ。しかし、まだ少しづくしゃくしているようだつたので、もう一度やり直してみた。

そうしてまた一時間、お辞儀ばかりやつて過ごした。

昼、ヴァルデモート卿が訪ねてきた。昼食の後片づけが終わると、ハリーはまたお辞儀の練習を続けた。

午後いっぱいかけて、ようやくかなり自然な姿勢でできるようになり、ヴァルデモート卿も満足げにうなずいた。

そして、夕食後また練習が続いた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

そして夜になつた――。ハリーはまた夢を見た。

ヴァルデモート卿と初めて会つた日のことだ。家を飛び出して泣いていた幼いポツターの目の前に、ヴァルデモート卿が煙のように突然現れた。

「ポツター、俺様はお前を立派な男子にしてやりたい。お前の死んだ両親との約束もあるからだ。だから、お前には魔法界での生き方を徹底的に教え込むつもりだ。俺様の命令に従う限り、お前は魔法界の誰からも讀えられて生きていけるであろう」

その言葉どおり、ヴァルデモート卿はハリーにいろいろなことを教え込んだ。闇の魔術に対する防衛術、変身術、薬草学……そして呪文の訓練……ハリーはいつも期待に応えようとした。

しかしヴァルデモート卿の要求水準は高く、ハリーはなかなか思うように上達しなかった。

それでも、ヴァルデモート卿は満足したようにいつもハリーを見守つていた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

それから幾分か時が過ぎ、ホグワーツへの出発の日、ハリーはいつもより早く目覚めた。

目が冴えて、とても眠れそうもなかつた。まだ薄暗い中、ハリーはこつそり寝室を抜け出した。

ヴァルデモート卿が眠つてることを願つて、ハリーは忍び足で廊下を歩き、台所へ向かつた。テーブルの上には、昨日ヴァルデモート卿が作つたサンドイッチがまだ置いてあつた。

ハリーは皿から一つ取つて食べながら、ゆっくりと暖炉の前へ歩いていった。ヴァルデモート卿の分は残しておかなくてはならないと思つたので、二つしか取らなかつた。

それからハリーは、炎の中に消えていく包み紙を見つめた。

ハリーは、これまで何度もこの炎を見てきていた。

しかし、今夜だけは特別に見えた。

暖炉の中からハリーに向かつて呼びかけるように、炎が揺らめいている。

「ポツター、全て食べて構わんぞ。それとも俺様の作ったものが食べられないと言うのか？」

背後からヴォルデモート卿が声が聞こえる。ハリーの後ろに音もなく立っていた。ハリーは驚いて飛び上がった。

「そんなことはありません、先生！」

ハリーは振り向いて、慌てて答えた。

ヴォルデモート卿は椅子に座つて足を組み、ニヤリと笑っていた。

「ポツター、何をしようとしているのだね？」

ヴォルデモート卿が聞いた。

「ちよつと外に出てみたかったのです、先生。夜明け前が一番きれいだろうと思つて」

ハリーが言い訳がましく言つた。

「なるほど。だが、今はまだ早すぎる、それに今日は出発の日だ。ゆつくり休まねばならぬ」

ヴォルデモート卿が言つた。

「すみません、先生。すぐ戻ります」

ハリーが急いで謝つた。

「かまわない。好きにするがよい。だが、もう戻るのだ」「はい」

ハリーは急いで立ち上がりつて玄関に向かつた。

ヴォルデモート卿がついてくるのかどうか確かめる勇気はなかつた。玄関の扉を押し開け、外に出る。

ハリーは空を見上げた。

東の空が白々と明けはじめている。雲も月もない、静かな夜だった。ハリーは、家の周りを一周ぐるつと歩くことにした。

次はいつ帰つて来れるか分からぬが、存外思い出してみるとヴォルデモート卿との生活も悪くなかった。しかし、ヴォルデモート卿に

言わなければならぬことがいくつもある。

たとえば、ハリーがもつと背が伸びたら、あの黒いローブを着てみたいということなど。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

数時間後、出発の朝日が昇る。ハリーは最後にお辞儀をして、家の方を振り返りながら、そろりそろりと歩いた。

そのとき、ヴォルデモート卿の声が聞こえた。

「ポッター、忘れるな」

ハリーは凍つたように足を止めた。

「お前はもう立派な魔法族だ。魔法界のどこに出しても恥ずかしくはない」

ハリーは振り返った。

しかし、そこには誰もいなかつた。

ただ、庭の草木が風に揺れるだけだつた。

ハリー・ポッター　おじぎをするのだ　その2

「アイサツをするのだポッター＝サン」

ニンジャスレイヤーの声が響く。

「いいかポッター＝サン、イクサの前のアイサツは大事な作法だ。古事記にもそう書いてある」

「ド、ドーモ、二、ニンジャスレイヤー＝サン、ハ、ハリー・ポッターです」

「もつと相手の目をしつかり見て言え！」

「ド、ドーモ、一、ニンジャスレイヤー＝サン！　ハ、ハリー・ポッターです……」

「声が小さい！」

「ドーモ！　ハ、ハリー・ポッターです!!」

「そうだ。それでよい。アイサツの前からイクサは始まっているのだ」

「アッハイ、センセイ」

「ではもう一度だ、ポッター＝サン。今度は気合いを込めろ」

「……アイサツで気合いとかどうなんですか？」

「ポッター＝サン。これは遊びではないぞ。アイサツにこもる力は、そのままイクサの力になる。真剣勝負の場で、アイサツをしない者は、もはや戦士とは呼べぬ」

「……わ、わかりました」

「アイサツは大事だ。古事記にもそう書いてある」

「アイサツ大切、わかりましたセンセイ」

「では行くぞ、ポッター＝サン」

「ハイ、センセイ」

「ドーモ、ポッター＝サン、ニンジャスレイヤーです」

「ドーモ、ニンジャスレイヤー＝サン、ハリー・ポッターです」

二人は同時にアイサツをした。そして二人とも動きを止める。ハリーが言う。

「……いやちよつと待つてくださいよセンセイ！　何ですかこれ！」

「ニンジャの基本だ。ポツターリー＝サン。少なくともこれでアイサツだけは立派なニンジャだ。おめでとう」

「……ここ魔法学校ですよ？　こんなことやつてる場合じゃないと思うんですけど」

「その通りだ。ポツターリー＝サン。だがアイサツは大事だ。古事記にもそ
う書いてある」

「それさつき聞いたんでもういいです」

「ポツターリー＝サン。イクサの前にはあらゆる礼儀作法がつきものだ。
古事記にもそう書かれている」

「だからもういいですか！…………てゆーかそもそも、僕は魔法使いにな
るはずですよね？」

「何を言つている。ポツターリー＝サン。お前はすでに『選ばれし者』なの
だ」

「そんなわけないでしょ？！　僕ただのホグワーツ生ですよ？！」

「ポツターリー＝サン。己を知れ。自分が選ばれた存在だと理解できぬの
なら、それはまだ未熟な証拠だ。修業が必要だ」

「……あの、ホントに話が通じませんねセンセイ……」

「ポツターリー＝サン。修業を続けよう」

「ああもうわかりましたよ！」

「では改めて……ドーカ、ポツターリー＝サン、ニンジャスレイヤーです
」「ドーカ、ニンジャスレイヤー＝サン、ハリー・ポツターリーです」

再び二人はアイサツした。



その時だった。突然天井の一部が割れ、何かが落ちてきた。それは
床に転げ落ちると、立ち上がつて叫んだ。

「アバーッ！」

それは巨大な骸骨だつた。ローブのような物を着ている。しかし
それはぼろきれのようにずたずたに引き裂かれていた。頭はつるり
と禿げ上がり、顔には大きな傷跡がある。目はぎょろりとしており、
口元からは鋭い牙が見え隠れしている。

「あばばば……」

それは壊れかけたラジオのような声で言つた。

「ポツターアサン、あれが我々の敵、デス・イーターダニンジャスレイヤーが言つた。

「デス・イーターハ…？」

ニンジャスレイヤーはその怪物を見つめながら呟いた。

「ポツターアサン。アイサツをしろ」

「ド、ドーモ、初めまして、ハリー・ポツターです」

「ウヒヨオオオ!!」

髑髏は奇声を上げた。

「ウヒヤヒヤヒヤ!! 我こそは不死鳥の騎士団員、死喰い人にして、デス・イーターマッドアインムーディである!!」

「…えつ？ 誰ですかセンセイ？」

「ポツターアサン。アイサツは大切だ」

「センセイ、この人がデス・イーターワ合つてますよね？」

「ポツターアサン。アイサツは大事だ」

「センセイ！」

「ポツターアサン。アイサツは大事だ」

「センセイ！」

「ポツターアサン。アイサツは大事だ」

「センセイ!!」

「ポツターアサン。アイサツは大事だ」

「センセイ！」

「ポツターアサン。アイサツは大事だ」

「センセイ!!……つて何回やるんですかコレ!?」

「ポツターアサン。アイサツは大事だ」

「もういいからセンセイは黙つていてください！」

「ポツターアサン。今だ！」

なんと言うニンジャ戦術。ニンジャスレイヤーは見事にデス・イーターの油断を誘い、ハリーに合図を送った。

「ええい！ イクサの始まりだポツターソン！」
「センセイ、お願ひですから邪魔しないで下さい」

ハリ－は再び杖を構えた。

「アバダ・ケタブラ！」

「アババババーッ！」

「当たつたぞポツターソン！ 見事だポツターソン！ さすがだ
ポツターソン！ おめでとうポツターソン！」

「センセイ、うるさいです！」

「イヤーッ！」

ニンジャスレイヤーが叫ぶと同時に、彼はデス・イータに突進した。

「イヤーッ！」「グワーッ！」「イヤーッ！」「グワーッ！」

ニンジャスレイヤーの攻撃により、デス・イータは大きく吹き飛ばされた。

「ドーモ、マッド－アイム－ディイサン。ニンジャスレイヤーです」「ア、アイサツ？ ドーモ、ニンジャスレイヤー－サン、ム－ディ－です……」

「フハハハ！ ポツターソン！ 今の内にデス・イータを倒すのだ！ 拙者がアイサツをしている間にな！ 古事記にもそう書いてある！」

「わかりましたセンセイ！ 嘘らえ！ なんかの魔法！」

ただし魔法は尻から出る。

「セツナの味を知りたいかーッ!?」

「グワーッ！」

ハリ－の呪文が当たり、デス・イータが絶叫する。

「よしトドメのボン・ダンス！」

聰明な読者ならお気付いただろうが、ボン・ダンスには悪靈を祓う効果があり、実際悪靈に属するデス・イータにとつては、まさに致命的な攻撃となつた。

「アババーッ！」

デス・イータは断末魔の声を上げ、その場に倒れ伏せ、やがて消

滅した。

「ポツターソン！ おめでとう。ポツターソン！」

「センセイ、もういい加減にしてください」

ハリーはうんざりした様子でため息をついた。

ハリー・ポッター　おじぎをするのだ　その3

「お辞儀をするのだポッター」

「アイサツもするのだポッター＝サン」

ヴォルデモート卿とニンジャスレイヤーの声が響く。

「いいかポッター、お辞儀の角度はこうだ」

「そしてアイサツは相手を強く見据えるのだ」

2人は声を揃えて言う。

「さあやつてみろ」

ハリーはおつかなびっくりに頭を下げ、震える声でアイサツを返す。

「ド、ドーモ……ハリー・ポッターです……」

しかしヴォルデモート卿とニンジャスレイヤーには聞こえないようだ。

「もう一度やるのだポッター」

「アイサツはしつかりやらねばならぬ」

再びお辞儀をし、震える声で名乗る。

「ド、ドーモ……」

「もう一度！」

「もう一回！」

「もう一度だ！」

「何度も繰り返すがよい！」

何度も繰り返し練習し、やつと形になる頃には日が落ちていた。

「いいかポッター、俺様はお前をどこに出しても恥ずかしくない魔法使いに育て上げるつもりだ」

「そう通り。礼節は学ばねばならない、古事記にもそう書いてある」

「俺様が魔法界の帝王となるまでみつちり鍛え上げてくれるわ」

「そうだとも、ポッター＝サン。まずは礼儀作法を学ぶことから始めよう」

こうして、ハリーはホグワーツのドージョーで夜な夜なお辞儀の練習に励むことになった。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

毎日毎晩、食事の時間になると彼らはハリーを呼びつけ、練習の成果を披露するよう求めた。

「では行くぞ！ ポッター、お辞儀だ！」

「アイサツは素早く行わなければならぬ！」

「その調子だポッター！ 次はアイサツを強化せねば！」

「お辞儀は強く行うのだ！」

「よいぞポッター、そのまま続けるのだ！」

「あと一息だ！」

「もつと深く！」

ポッターの成長に、二人の師匠もまた指導に熱が入る。

その甲斐あつてか、やがてハリーのお辞儀は様になってきた。

「どうだ？ ポッター」

「素晴らしい出来栄えだ！」

「これで魔法界にポッターの名を広めることができるというものだ」

「うむ、明日からも頑張るのだぞ」

ハリーは心の中で呟いた。

(もうお辞儀なんかしたくないよ)

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

そして一週間後、ハリーは再び二人から呼び出された。

「よし、ポッター。今日の特訓を始めるぞ」

「今日こそ完璧に仕上げて見せるのだ」

二人は自信たっぷりだ。

「まず手本を見せる。よく見ておれ」

ヴォルデモート卿は優雅な仕草で腰を落とし、お辞儀をした。

「これが基本の動きだ。やつてみろ」

「言われるままにお辞儀をする。しかし……。

「違う！ 手の位置が違う！ 体全体を曲げるんだ！ そんな浅いお辞儀があるか！」

「肩幅より少し広く足を開くのだ！ それでは威厳がないではないか！」

ヴォルデモート卿とニンジャスレイヤーが口々に叫ぶ。

「さあもう一度だ！今度はちゃんとお辞儀をするのだ！」

「早くしろ。ポツター！」

再びハリーは、アイサツと共にお辞儀を繰り出す。

しかし次の瞬間、部屋中に激しい雷鳴が轟き渡った。あまりの音の大きさに、思わずハリーは目を閉じた。

しばらくして目を開けると、ヴォルデモート卿はアフロになっていた。

「貴様……これはどういうことだ？」

怒り狂つて歯ぎしりするその姿はまさに鬼神そのもの。

「何たる失態か、ヴォルデモート＝サン」

ニンジャスレイヤーがゆっくりと立ち上がった。

ニンジャスレイヤーもまたアフロだ。

ハリーのお辞儀とアイサツが起こした摩擦力、そこから生じた静電気は激しい雷鳴となり、見事2人の頭の毛をチリチリのソウルフルなアフロに仕上げたのだ。サンバのリズムを刻んでいる。

「…………」

ヴォルデモート卿は沈黙している。

彼は今やただのアフロだ。

「ボッター、このように間違ったお辞儀とアイサツは危険を産む。俺様はそれを十分に教えたはずだ」

「にもかかわらず、またも過ちを犯したことは許されぬ」

「そう通り。俺様と同じ髪型にしてやる」

「そして俺様たちと同じように全身黒装束で修行させるのだ」

「そうとも、ボッター＝サン。覚悟するがいい」

ハリーは顔を上げ、悲痛に叫んだ。

「それだけはご勘弁ください！」

「お前は魔法界の帝王になる男なのだ！それを忘れたか！」

「帝王なら帝王らしく振舞え！帝王らしい格好をしなければ帝王としての資格はない！」

「そうだともボッター、帝王は帝王に相応しい服装をしなければなら

ないのだ

「そう通り。帝王とは帝王にふさわしい恰好をして帝王として振る舞うもの」

「さあ立てポツタ－！」

「立つのだポツタ－＝サン！」

アフロ2人が迫る。

ハリーは震えながら立ち上がり、じりじりと後退した。

「俺様はお前を強くすると言つただろう」

「約束を違えるのは感心しない」

アフロ2人は迫つてくる。

「ゞ、ごめんさい！！」

ハリー、必死の詫びお辞儀。しかしそれがいけなかつた。その動きによつて再び摩擦力が生み出してしまつたのだ。バリバリツツという音がして稻妻が走り、ハリーの体は硬直した。ヴォルデモート卿も、ニンジャスレイヤーも同様に固まつてゐる。ハリーは恐る恐る自分の頭を触つた。

するとそこには——見事なまでにアフロになつた自分がいた。

ヴォルデモート卿大爆笑。レゲエのリズムを刻み始めた。

「ハーツハツハ、お前はやはり最高だポツタ－！そのアフロ似合つて
いるぞ！」

「ワツハツハ、愉快な奴め！」

「フウーツハツハ、これだからポツタ－を見捨てることはできない！」

「ワツハツハツハ、お前は本当に愛すべき子だ！」

二人は笑い転げ、ハリーは涙ぐんだ。

「うう、こんなことになるなんて……」

その時、部屋のドアが開き、ダンブルードア校長が現れた。

「おお、これは一体どう言う状況じや？」

なお、ダンブルードア校長もアフロだ。

「おお、ダンブルードア＝サン」

「ポツターを見てくれ。この見事なまでのアフロヘアを」

「なんとまあ、見事なアフロじやのう」

「見ろ、あの泣き顔を。あれほど笑えるものは魔法界中探してもなかなかあるまい」

「うむ、確かに」

この日、魔法界に空前のアフロブームが訪れた。ラテンのリズムに乗つて皆の頭はアフロになつていった。

ハリーは一人取り残され、暗い気持ちのまま、お辞儀とアイサツを繰り返した。しかし、その度にアフロになるのだつた。

めでたしめでたし

鬼滅の刃 無限なんとか編その2

鬼滅の刃 無限おじぎ編

A vertical column of 12 alternating triangle symbols pointing up and down.

発煙する無限列車を背後に
杏美郎に杖を突き一にウルモードト
卿は言い放つ。

「おしきをするのだ杏寿郎」

しかし杏美郎の表情には一 片の変化もない。まづくな眼差して、

一九四

黙る。彼は彼の貢献を主張する!」

「うむー。」

だが、それを炎のような鬪氣をまとう刀が受け止める。同時にヴォルデモート卿は杖を振るい、さらなる呪文を放つ。

緑の光弾が、今度は空中で爆裂した。だが、それも炎をまとつた刃によつて防がれてしまう。

ない!!」

ならは死ぬがよい！」

ヴァルテモート嬢はさうに魔法を放つた。先ほどと同じ緑の閃光が一直線に走る。しかし、それが到達する前に、杏寿郎は動いた。

「炎の呼吸、壹ノ型『不知火』!!!」

強烈な一撃を繰り出す。

たかウオルテモート卿もまた、帝王と呼ばれるほどに優れた魔法使いだ。即座に反応すると防御のための呪文を唱えていた。

「プロテゴ・マキシマ!」

半透明の壁が出現して杏寿郎の攻撃を防いだ。さらに反撃として闇の魔術を打ち出す。

「アグアメンティ！」

水が現れ、球状になると杏寿郎に向かって飛んでいった。

「炎の呼吸式ノ型『昇り炎天』！」

再び刀身が煌めき、闇の術を切り払った。そしてそのまま跳躍してヴォルデモート卿に迫る。

だが、それはヴォルデモート卿にとつても予想していた動きだつたようだ。

「インペディメント！妨害せよ！」

呪文とともに、杏寿郎の動きが大きく鈍つた。

それでもかまわずに突っ込んでくる相手に、ヴォルデモート卿は恐怖を覚えたらしい。杖を振りかざすと叫んだ。

「クルーシオ！」

苦痛を与える呪いだ。これを受けてまともに立つていられる者はいない。

しかし、杏寿郎の目に絶望の色はなかつた。それどころか笑みすら浮かべているではないか。

「素晴らしい威力だ！だが、俺は痛くないぞ！」

その言葉を証明するかのように、ますます速度を上げて迫り来る剣士に対し、ついにヴォルデモート卿の方は冷静に呪文を紡ぐ。

「ステューピファイ！麻痺せよ！」

赤い光が杏寿郎に命中した。しかし、やはり杏寿郎は止まらない。

「肆ノ型『盛炎のうねり』！」

渦巻きを描くような剣撃により赤い閃光が霧散する。同時に、ついに距離が詰まり、両者は鎧ぜり合う形になつた。

「なぜだ……なぜ効かない？」

動杏寿郎は不敵な笑みを浮かべながら答える。

「俺は鬼殺隊の柱の一人だからだ！お前たち死喰い人とは違う！この世に悪がいる限り、俺は決して倒れない！！」

だが、ヴォルデモート卿もまたニヤリと笑う。

「なるほど、たかがマグルと侮っていたようだ。謝罪しよう。そして認めようとも。小僧、貴様は十分に俺様の敵足りえると!!」

次の瞬間、杏寿郎の体が激しく燃え上がった。

全身に火傷を負っていく。

「ぐうつ……」

苦悶の声を上げる杏寿郎を見て、ヴォルデモート卿は笑い声を上げた。

「どうした？ 苦しそうだなあ、小僧！ もつと見せてくれ！ 貴様の力の全てを！」

杏寿郎の顔から血が流れ落ちた。しかし彼はなおも不敵に微笑んだままだ。

「生憎だが、俺はもう出し切つた！」

そう言うと同時に、杏寿郎は力任せに刀を押し込んだ。同時に素早く後ろへ飛び退く。

一瞬遅れてヴォルデモート卿がよろめいた。傷だらけになつた体がボロ布のように地面を転がる。杖が手を離れ、遠くへと吹き飛ばされていった。

「……おのれえ」

なんとか立ち上がるをするものの、体に力が入らない。

杏寿郎はそんな宿敵に近づき、静かに見下ろした。

「さらばだ。トム・マールヴォロ・リドル」

刀を逆手に構え、切先を心臓に向ける。

そのまま勢いよく突き刺そうとしたその時——

「ククク……この度は素直に敗北を認めよう。だが次こそはこうはいかんぞ……必ずやお前の首を落としてくれるわ!!」

最後の力でそれだけ叫ぶと、ヴォルデモート卿は地面に崩れ落ち、絶命した。しかし、その亡骸はたちまちのうちに幻のように消え去った。

「待つていろ、ヴォルデモート卿——今度こそ、俺が決着をつけてやる！」

刀を突き立て、杏寿郎は天に向かつて宣言する。

夜明け前の空に、高らかに響き渡る雄叫びだつた。



「うむ！なかなかに骨のある男であつた!!」

「えーっと、つまり、杏寿郎さんは死喰い人の親玉を倒したんですね？すごいじゃですか!!」

翌朝、ハリーたちと共に朝食を食べている炭治郎の元に、杏寿郎が現れた。ヴォルデモート卿はどうやら逃げたらしいことを報告するためだ。

「まあ、運がよかつただけだ。それにあの男はまたいつか現れるだろう——それより、竈門少年！」

「はい！」

「君はいい目をしているな！」

いきなり褒められて、炭治郎はキヨトンとした。

「目はいつも見えていますけど……」

「そういう意味ではない！ 昨夜の戦いのことさ！」

「ああ、あれですね！」

言われてみれば確かに、自分は杏寿郎の活躍ばかり見ていた気がする。

「煉獄さんの戦う姿はとても格好良かつたです！」

「そうか！ ありがとう！」

二人はお互いの手を取つてぶんぶんと振り合つた。

それを横で眺めていた善逸がボソリと呟く。

「なんか暑苦しい奴らが仲良くなつてる……」

鬼滅の刃 無限なんとか編その3

「煉獄さん、鬼が来ました！下弦の鬼です」

無限列車の中、鬼の存在に気がついた炭治郎は急ぎ杏寿郎へと伝える。

「うまい！うまい！うまい！」

しかし、炭治郎の警告を無視するかのように杏寿郎は弁当を頬張り続けるのだった。

「煉獄さん！弁当を食べてる場合じゃないですよ！早く鬼を斬らないと乗客の人たちが！」

「断る！俺は俺の食務を全うする！」

「そんなこと言つてる暇はないんですよ！今すぐ戦いましょうよ！」

一向に戦闘態勢に入ろうとしない杏寿郎に対し、炭治郎は必死の説得を試みる。

「竈門少年！腹が減っているのか？ならばこの弁当を食うといい！遠慮はいらんぞ！」

そう言いながら杏寿郎は、炭治郎へ弁当を差し出す。

（この状況で食べるわけないだろ！）

あまりにも唐突な提案に、炭治郎の心の声も思わず声に出てしまふ。

「いえ、結構です……」

「うまい！うまい！」

「だから、話を……もういいや」

「うまい！」

「はい、美味しいですね～」

結局説得を諦めた炭治郎は、弁当を受け取ることになってしまった。

「うまい！うまい！うまい！」

「お口に合つてよかつたです（棒）」

「うまい！うまい！うまい！」

「ああー、良かつたですねー」

その後しばらくの間、杏寿郎の大声だけが車内中に響き渡った。
そして、数分後。下弦の鬼だろうか？美味しそうな匂いが強くなる
ことを炭治郎は感じた。

「お弁当はいかがですかー」

下弦の壱・魘夢がお弁当のカートを押しながら現れる。

「もうっ??」

突然現れたその鬼を見た瞬間、今まで食べ続けていたはずの杏寿郎
の動きが止まる。

「!?どうしたんですか？」

「よし、弁当のおかわりを貰おう！」

「はーい、どぞー」

先程までの真剣な雰囲気から一変、和やかな雰囲気になつた2人を見て、状況を飲み込めていない炭治郎だったが、とりあえず自分もご飯を食べることにした。

「うまい！うまい！うまい！」

「ありがとうございましたー」

2人の会話を聞きながら、炭治郎は弁当を口に運ぶ。

「あのー、すみませんけどそつちのお兄さんはちょっと静かにして
てもらえますかね？」

「なぜだ？」

「他のお客様に迷惑ですかねー」

「わかつた！」

「ありがとうございまーす

(本当にわかつてんのか?)

魘夢はそのままカートを押して奥の車両へと消えていった。こうして、何事もなく無限列車は目的地まで走り続けていった。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

無限列車終点、何とか駅。出迎えたのは駅長の猗窓座だ。

「杏寿郎、お前もおにぎりを食べないか？」

「うむ！頂こう！」

「…………」

目の前で繰り広げられる光景に啞然とする炭治郎。もぐもぐと次々渡されるおにぎりを頬張る杏寿郎。黙々とおにぎりを渡す猗窩座。

(どういうことだこれは)

あまりの出来事に思考停止してしまった炭治郎だが、その時ふとあることに気づく。

(煉獄さん……太つてきている?)

杏寿郎の顔をよく見ると少し丸くなっているような気がするのだ。そこでやっと炭治郎は理解することができた。

(この人は、俺たちのためにわざとこんな馬鹿げたことをしていたんだ)

杏寿郎の性格上、自分の責務を放棄して誰かを助けるなんてことは絶対にありえないだろう。

(それについてこの人……どれだけ食べるんだよ)

その後も杏寿郎の勢いは止まらず、あつという間に全ての米粒が無くなってしまった。さすがに満腹なのか、顔には疲れの色が見える。

「どうした杏寿郎、もうおしまいか?おかわりはまだまだあるぞ」

そう言つて猗窩座は大量のおにぎりが入つた袋を見せる。

(なんでそんなにあるんだ……)

呆れを通り越して感心してしまった炭治郎だった。

「うまい!うまい!うまい!」

「…………ええ…………そうですね……」

無限列車の任務を終えた2人だったが、まだ戦いは終始まつたばかりだ。

「次はどこに行く?」

「もう勘弁してください……」

「うむ!美味しいものをたくさん食べよう!」

「……」

この後も炭治郎と杏寿郎の旅は続くのであった。

つづかない。

鬼滅の刃 柱合会議編

「うまい！うまい！うまい！」

「お館殿が来ているぞ杏寿郎、おじぎをするのだ」

「断る！俺は俺の食務を全うする!!」

ほかの柱達がお館様におじぎする中、1人だけ黙々と口に弁当を運び続ける杏寿郎をヴァルデモート卿を諫めた。

「煉獄さん……相変わらずですね……」

「うまい!!うまい!!うまい!!」

柱合会議にお館様が来てると言うのに大声で叫びながら食べる姿はまさに圧巻だつた。

「それでね……みんなに相談があるんだ……」

そう切り出した御館様の言葉で皆んなの顔つきが変わつた。

「鬼殺隊を辞めたい？」

お館様から告げられた言葉に柱達は動搖した。

「うん……もう限界なんだ……僕には無理だよ……」

悲しそうな顔をしながら親方様は言つた。

「お館様！そんな事言わないで下さいよおー！」

甘露寺蜜璃は泣きながら御館様にすがりついた。

他の柱達も何も言えなかつた。

「ほら、杏寿郎を見てご覧なさい……すっかり僕なんて無視されてるじゃないか……」

「うまい!!!うまい!!!」

御館様の声など聞こえていないかのように、ただひたすらに弁当を食べ続けていた。

「…………いい加減にしないか、杏寿郎。クルーシオ！」

自信を無くしかけている御館様に同情してか、ヴァルデモート卿は杏寿郎に魔法を唱えると、その痛みに耐えきれずその場に倒れ込んだ。

「うま……い……」

しかしそれでもなお、杏寿郎は弁当に手を伸ばしていた。

その姿を見たお館様は涙を流した。

「ああ……こんなになつてもまだ食べてるよ……僕は 一体何のために頑張ってきたのか分からぬや……」

涙を流すお館様を見かねて宇髄天元は声をかけた

御飯様！御飯様が呑めても御方せは絶に無い。」

「そうだぜエ、今までやつてきたことは無駄じやねえだろオ」と不列川実彌と伊黒小芭内が総じて賛同する。

「御館様がいなくとも鬼舞辻無惨を倒す事は出来るだろう」

2人の言葉で少し元氣を取り戻したお館様だったが、やはり辞めた。

A vertical stack of 15 alternating black and white triangles, starting with a black triangle at the top.

それから数日後のこと。

御館様かいなぐなつたことにより
柱会議は中止となつた
しか

毎日のようすに弁当をたらふく食べては眠り、起きたらまた食べた。

ただそれだけを繰り返していた。

卷之三

そして数ヶ月後、ついに杏寿郎が死んだという知らせが届いた。

葬式が行われた時、そこ

めと泣いたという……。

鬼滅の刃 無限なんか編その4

四十数名もの行方不明者を出した無限列車。それが今夜運行を再開すると言うのだ。明らかに罠の気配を感じつつ、炎柱——煉獄杏寿郎および炭治郎一行は駅で無限列車の到着を待つ。

A vertical column of 15 alternating black and white triangles pointing downwards. The sequence starts with a black triangle at the top, followed by a white triangle, then a black triangle, and so on, ending with a black triangle at the bottom.

(お兄ちゃん……)

不安げな表情で自分の手を握り締める禰豆子に、炭治郎は大丈夫だと笑いかけた。そんな二人に善逸も伊之助も何も言わない。

ただ黙つて二人は手を握つていた。その顔には緊張の色がある。

そんな二人の様子を見て、一人だけいつも通りな男がいた。

「何言つてんだ紋次郎!?」

「ハヤダつて今お前、吉震えてたじやん……」

「うるせえぞ弱味噛!!」

「誰の声が小さいって言ったこの猪頭!?」

「あーもう落ち着けって二人とも！ ほら、匂いが来たぞ！」
炭治郎の言葉に二人はハツとして耳を澄ませる。
確かに音と臭いが近付いてくる。

無限列車の到着だ。

「やあ、僕はトーマス。
事故は起きるや？＊。
」

無邪氣に炭治郎達に微笑みかけた。

鬼滅の刃 無限トーマス編

A vertical sequence of 15 alternating black and white triangles pointing downwards. The pattern starts with a white triangle at the top and ends with a black triangle at the bottom.

「列車が喋つた!?」

?!? 鬼の仕業か?!

「落ち着け竈門少年、機関車は昔から喋るものだろ?」

「んなわけないでしょ!! ていうか煉獄さんはなんでそんな冷静なんですか!?

「うむ、実は俺も初めて見た時はかなり驚いたのだが……」

「いや驚くところそこ!? 機関車自体が鬼とかそういう話ですか!?’

「ところで、乗るなら早く乗つてください」

機関車のトーマスがそう促すと、五人は慌てて乗車した。

五人が座席に着くと同時に扉が閉まり動き出す。ガタンガタンと音を鳴らしながら走る列車の中は薄暗く、窓の外では夜空が流れていつた……。



「あの、トーマスさん」

炭治郎は列車先頭車両部に移動するとトーマスに聞き取りを開始した。

「はい?」

「俺たちはこの汽車に乗つっていた人達を助けに来たんですけど……」

「知つてますよ、でも無理です。既に死んでいますから」

「……えつ」

さらりと言われた言葉に一瞬思考が止まる。

だがすぐに我に帰った炭治郎は叫んだ。

「どういうことですか!?’

「そのままの意味ですよ? 彼らは全員亡くなりました。あなた達が来る前に。なにか客車で暴れる人がいたみたいですよ? おかげで僕もしばらく車庫でお休みもらうことになつたし……」

行方不明者達の生存は絶望的。なら今はこの列車に乗つている乗客を守ることが優先だ。炭治郎はトーマスに礼を言うと、駆け足で杏寿郎の元へと戻つた。



(お兄ちゃん……)

不安そうな表情を浮かべる禰豆子を見て、炭治郎は安心させるように笑う。

そして隣に座っていた伊之助に声をかけた。

「おい嘴平！ お前は反対側の車両を見に行つてくれ！」

「はあ？ なんでだよ権八郎？」

「いいから頼む！」

「ちつ……わあったよ！」

舌打ちしながらも伊之助は言われた通りに走り去つた。それを見届けてから炭治郎は再び前を見る。未だ鬼の気配はない。しかし嫌な予感だけはすつとしていた。

「うまい！ うまい！ うまい！」

そんな緊張感の中、杏寿郎が弁当に舌づつみを打つ声だけが響いていた。

「竈門少年、緊張していくても始まらないぞ？ この弁当を食べたまえ」「あ、ありがとうございます……」

差し出された弁当を受け取り、口に運ぶ。

美味しいはずの料理なのに味がよくわからなかつた。

——その時だつた。

「……ッ!?」

突然車両が揺れ、ガタツという音が響く。同時に何か重いものが倒れるような音も聞こえた気がする。

その瞬間、炭治郎の顔色が真つ青になつた。

「れ、煉獄さん……」

震えた声で名を呼ばれ、杏寿郎はどうしたと振り返る。その目に飛び込んで来た光景に、彼は思わず息を飲んだ。

「竈門少年!？」

そこには頭を抱えて震えている炭治郎の姿があつた。顔色は悪く、額には汗が滲んでいる。明らかに尋常ではない様子に、杏寿郎は咄嗟に彼の元へと走つた。

「大丈夫か!? しつかりしろ！」

「……煉獄さん、凄く嫌な臭いがします……多分とても強い鬼が……すぐ近くに……」

炭治郎の言葉に杏寿郎は目を丸くした。鬼の臭いどころか鬼の存在すら感じられないからだ。

だが炭治郎の様子は真剣そのもの、嘘を言つては思えない。ならば一体どこに鬼がいるのか。考え込む彼に、ふと一つの可能性が浮かぶ。

まさかと思いながらも、彼は恐る恐る口を開いた。

「竈門少年、鬼の位置は分かるか？」

「いえ、まだ分かりません……」

「そうか……ちなみになんだが、もしや君にしか分からぬ場所にいるということは無いだろうか？」

「え、それは……」

言われて炭治郎はハツとした。そうだ、確かに自分しか知らない場所に潜むというのはあり得る話かもしれない。

それに気づいた途端、炭治郎の中で一気に恐怖心が増した。先程まではどこか漠然とした感覚だったが、今ははつきりとわかる。

——自分の近くに鬼はいると。

「どうした、竈門少年」

「煉獄さん、客車です！」この客車全体が鬼なんです!!」

必死の形相で叫ぶ炭治郎に、杏寿郎は瞬時に状況を理解した。客車全体が鬼。つまり自分たちは鬼の胃袋の中にいるようなもの。そして同時に、多くの乗客が人質に取られているに等しい。

(これは厄介だな……)

下手に動くわけにもいかない状況に歯噛みする。
だがこのままではいけないことも分かつていた。

(どうすればいい……)

考えている間にも時間は過ぎていく。

すると、また車両が大きく揺れた。今度はさつきよりも大きく、そして長い時間だ。

(まずい！)

このまま列車が脱線してしまえば被害はさらに大きくなるだろう。乗客を守りながら戦うのは難しい。

なんとかせねばと思った矢先、ふと杏寿郎はあることを思い出し
た。

一竈門少年！

はいっ!

「君は確かに水の呼吸を使っていたな？」

10

よし分か二た

それが云ふと、彼は立ち止めた。

「……と待つでください。火猪さん！」 と、い行く隻でてが！」

性一處注目之。不外於此。

卷之二

「……っ！ そんなこと出来るわけないでしょう!?」

「いや、俺ならできる」

そう言つて刀を手に取り、車両を駆け抜け抜けて行つた。

一煉獄さん!!

一竈門少年 乗客を守れ

11

「俺は兎の首を轉り沙第三十九回に戻る」

-
1

真つ直ぐな瞳で見つめられ、炭治郎は何も言えなかつた。そのまま背を向けると、杏寿郎は駆け出した。

A vertical column of 15 alternating black and white downward-pointing triangles, arranged in a repeating pattern.

炭治郎達が迫る触手を斬り払いつつ乗客を守ること数刻、車両が激しく揺れたかと思うと触手は動かなくなつた。杏寿郎が鬼を仕留め

たのだとすぐに悟る
「皆無事か？」

「ま、聖我人ま、ません！」

「なら良い！」

返事を聞き、安堵の息をつく。だがその直後、再び車体が揺れた。

慌てて視線を巡らせる。すると先頭の方からトーマスの声が響いた。

「緊急停止します！」

直後、ドンつと鈍い衝撃が走る。

「それと同時に、トーマスの甲高い汽笛が響き渡つた。

うーん、困りましたねえ」

卷之三

その目に映るのは横転した自分以外の車両と
多くの怪我人
夜明けはまだ遠い。

杏寿郎と炭治郎一行は無事な乗客たちと共にけが人の救助と手当

A vertical column of 15 alternating black and white triangles pointing upwards, arranged in a zigzag pattern.

突如、炭治郎の鼻が先程の鬼とは比べ物にならないほどの、邪悪な臭いを捉えた。間違ひ無く、奴が近くこゝる。

「煉獄さん、今度こそ本当にヤバいです」

何か起きている?

さつきの鬼より遙かに強い鬼が現れました
それも俺たちのすぐ近くに

「やめやめも…」

「俺たちは鬼殺隊です。だから鬼を殺す義務がある」

• • • •

「籠門少年」でも御かせは一船ノを巻き込みたくない貴方はどうして云が？」

「はい」

「俺も同じ気持ちだ」

留まる乗客たちから距離をとるべく2人してして駆け出そうする。

「危ない！」

杏寿郎は咄嗟に炭治郎を突き飛ばし、自分もその場から飛び退く。

刹那、炭治郎が立っていた場所に鋭い拳が突き刺さる。

「ほう、今のを避けるか」

低い声が響いたかと思うと、次の瞬間にはもう目の前に異形の姿があつた。杏寿郎は無言で日輪刀を抜き、構える。

「鬼殺隊、お前強いな。名前を聞こう」

上弦の式、奇窓座アカシヤだ

A vertical decorative border on the right side of the page, featuring a repeating pattern of black and white downward-pointing triangles.

(…………どうして)

丁巳

何故、こんなことになつたのか。
あれ、少し離れた場所で待機していた。

あの後、炭治郎達は列車から離

煉獄さんは一人で戦っている。

自分が弱いせいでも、煉獄さんに負担をかけてしまった。早く助けに行きたいが、ここで下手に動いても逆に邪魔になるだけ。

か
?

ならない。それに、ここからお前の相手はアイツだ』

杏美郎の掛けた腕が天を指さず、
その先は居るのは
空を飛びながら

A vertical sequence of 15 alternating black and white triangles pointing downwards. The pattern starts with a black triangle at the top, followed by a white triangle, then a black triangle, and so on, ending with a black triangle at the bottom.

「杏寿郎さん、邪魔な車両の移動は終わりました！」

「おまかせ」

機関車トーマス。その実態は、時の龍神アカトシユが生み出したドラゴン血族の長兄。またの名を『世界を食らうもの』。

ぱつぱう。汽笛を鳴らしあげ、トーマスは猗窩座に向け上空から強力なシャウトを放つ。ドラゴンのシャウトはそれ 자체が強力な言靈だ。トーマスの放つ火を意味するシャウトは、巨大な火球となり猗窩座に迫る。しかしそれを容易に躱しながら、彼は愉快そうに笑つた。

「ああ面白い。この汽車に乗っている人間全てを食らおうと思つていたのだが、まさかこの俺が鬼狩りと戦うことになるなんて。しかもその相手が蒸気機関車か。全く予想外だつたぞ煉獄杏寿郎。実際に楽しい。実に嬉しいぞ！」

「ならば存分に楽しむといい！ 俺は楽しくないがな！」

「それは残念だ」

「ぼつぼつ。トーマス、再びのシャウト。力を意味するシャウトが生み出した強力な力場が空間を歪め、衝撃波となつて辺りを襲う。

「ぐうっ！」

咄嗟に身を屈めた猗窩座だつたがそれでも僅かに体勢が崩れた。そこに畳み掛けるように、機関車トーマスは再び強力な攻撃を加えるべく力を溜め始めた。

「させるか！」

トーマスを撃ち落とすべく猗窩座はなにかの構えをとつた。しあれを見た杏寿郎は即座に刀を構える。

「炎の呼吸、奥義……」

そして、刀身に炎を纏わせて技を放つ。

「玖ノ型、煉獄！」

凄まじい勢いの一撃は、狙い通り、猗窩座の腕を破壊した。

「くそ……やはり厄介なのは杏寿郎の方か……」

腕を押さえ悔しげな表情を浮かべながら、しかし猗窩座は構えを崩さない。

「ならばまずは杏寿郎からだ」

彼の言葉に呼応するように、突如としてトーマスの動きが止まつた。

「ぼつぼつ。トーマスが咆哮めいた汽笛を鳴らし、シャウトを発動する。最強のスウーム『メテオ・ストーム』だ！」

トーマスの溜め込んだ力が解放され、いくつもの火球が隕石のように天から無数に降り注ぐ。

「ちいつ！」

猗窩座は迫る火球の群れを躱す事で精一杯だ。

「なんということだ……これが本物の龍の力か……ツ」

杏寿郎は思わず冷や汗を流す。そしてふと、先程破壊したはずの窓座の手が再生していることに気付いた。

（あれだけの攻撃を受けても、死がないどころか傷すら癒えるとは……）
（……）
（……）
（……）
（……）

「杏寿郎さん」

トーマスの呼ぶ声が聞こえた。

「トーマス、助かった」

「いえ、それよりさつきの攻撃をもう一度撃つてもいいですか？」

「む？ だが君は……」

「大丈夫です。僕に任せてください」

トーマスはそう言うと、再び汽笛を鳴らそうと大きく息を吸い込む。

「させぬわ！」

だがそれよりも早く、再び地面を蹴り碎き、一気に距離を詰めた窓座がトーマスを殴り飛ばした。

「トーマス!?」

トーマスの巨体はそのまま吹き飛ばされ、客車に激突した。衝撃で車体が大きく揺れる。

「トーマス！」

慌てて炭治郎はトーマスの元へと駆け寄った。

「トーマス！ しつかりしろ!!」

トーマスの身体は大きく凹んでいる。

「竈門少年、今は駄目だ」

「え？」

杏寿郎の言葉に困惑していると、いつの間にかすぐ側にいたらしい

伊之助が叫んだ。

「おい、鬼野郎!! よくもトマソンをやりやがったな!?」

「うるさい、黙れ猪頭」

「なんだとテメー!! ぶつ殺す！」

「やめんか馬鹿者！」

「いえ！」

杏寿郎は怒鳴りつけると、そのままの勢いで伊之助の頭を叩いた。

「竈門少年、トーマスを頼めるか？」

「はい、分かりました」

「俺も行くぜ！」

「いらん!!」

「んだコラア!!」

「いいから君たちは乗客の避難誘導をしていろ！」

「……」

「返事はどうした！」

「はい！」

杏寿郎は返事を聞くと、そのまま駆け出した。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

「うーん、困りましたねえ」

機関車トーマスは呟いた。黄金の鉄の塊であるトーマスにとつて、凹みぐらいでは大したダメージとはならない。しかしそれよりも、強力なシャウトを連発したことにより、燃料が心許ない。

「炭治郎さん、お願いがあります！」

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

杏寿郎は走りながら刀を構えた。

(考え方、考えるのだ)

先程の攻撃でトーマスはしばらく動けないだろう。つまり、あの鬼を倒せるのは自分しかいない。あの鬼は強い。正直勝てるかどうかも分からぬ。

(だがやらねばならぬ)

鬼殺隊の一員として、責務を全うするために。

(それに)

煉獄家の長男として、千寿郎に胸を張って会えるよう強くなるために。

(何より)

あの少年達を信じている。だから自分は己の成すべきことを為す

だけだ。

「炎の呼吸、奥義……！」

深く腰を落とし、刀身を炎が包む。

「玖ノ型、煉獄！」

炎の如き斬撃が鬼に迫る。

しかし、その刃が猗窩座に触ることはなかつた。

「術式展開」

その一言と共に、まるで時間が停止したかのように、全ての動きが静止する。杏寿郎もまた例外ではない。

「素晴らしい剣技だ。今まで出会つた柱の中でもお前は間違いなく最强だ。だからこそ惜しい。杏寿郎よお前は鬼になれ。鬼になり共に高め合おう」

鬼の始祖たる鬼舞辻無惨を除いて、鬼の中で最高の力を誇る上弦の式・参・陸の三体は『十二鬼月』と呼ばれる鬼の中でも、特に卓越した戦闘能力を持つ。彼らは皆それぞれに異なる能力を持ち、中には時を止める能力を持つ者もいると言う。

「お前の素晴らしい闘気に当てられたのか、俺は今猛烈に腹が減つて仕方がない。このまま喰らえどれほど満たされことだろう」

「断る」

「そうか、残念だ」

次の瞬間、猗窩座の姿が消え失せた。

（消えた？）

次の瞬間、背後から声が響く。

「素晴らしい反応速度だ。流石は炎柱」

振り返ろうとするが、その前に肩口に強烈な痛みが走る。

「があつ！」

見れば、猗窩座の拳が杏寿郎の左肩を貫いていた。

「さあ、血を分けて貰うぞ」

痛みから表情を歪める杏寿郎。しかしここで口角を上げる。

「何を笑っている」

「なに、俺の血が欲しいならくれてやる。その代わり、君の首ももらう

がな

「面白い」

杏寿郎は歯を食いしばりながら、刀を両手で持ち直す。

そしてそれを勢い良く振り下ろした。しかし、手応えはない。

「無駄だ。今のお前の攻撃が俺に当たることはない」

「……そうか、だが時間は充分稼げたようだ」

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

炭治郎は辺りにちらばつっていた石炭袋を集め、トーマスの機関部へと投げ込む。

「炭治郎さん、ありがとう！」

機関車全面に張り付いているトーマスの丸い顔が、ニヤリと不敵に笑うと、獣叫びのように汽笛を鳴らせる。

ぽつぽつ。太陽のシャウト『陽光の輝き』だ！

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

夜の暗闇を切り裂くように空に眩い光が生まれた！

「馬鹿な!? 夜明けはまだ先のはずだ！」

焦る声と同時に、辺り一面が白一色に包まれる。

「こんなことありえん!!」

それは、まるで太陽が地上に墮ちたかのような光景だつた。人の目すら容易に焼き尽くす光が、猗窓座を包む。

「おおおおおおおおお!!!」

汽笛の雄叫びとともに、トーマスの放つた最後の力を振り絞つた。

一撃が、遂に、ついに、猗窓座を捉えた。

そして一瞬の後、汽車全体が揺れるほどの爆発が起きた。
あまりの衝撃に、煉獄は思わず膝をつく。

「はあ……はあつ……は……ははははは!!」

だがそれでも、杏寿郎は愉快そうに笑い続けた。

「ははははははは!! やつた！ 倒した！」

「煉獄さーん！」

炭治郎達が駆けつけてくる。

「よくやつた！ これで俺たちの勝ちだ！」

「はい！」

「よし、急いでここを離れるぞ！」

「でも、トーマスがまだ動けないんですね！」

「なんと!?」

その時、遠くから汽笛の音が聞こえてきた。

「汽笛の音?」

「おい、あれ見ろ！」

伊之助が指差す先をみれば、そこにはボロボロになつた蒸気機関車がこちらに向かつてくるではないか。

「トーマス!』

トーマスはよろめきながらも、なんとか無事に線路の上に着地した。

「よかつた！」

「よくないですよー。早く帰つて。ピカピカに磨いてもらわないと」「そんなこと言つてる場合じゃないだろう！」

「とにかく早くここから離れましょう」「

「そうだな！」

「……待つてくれ」

「え？」

杏寿郎が、トーマスを呼び止めた。

「どうかしましたか?」

「トーマス、頼みがある」

「え? 僕もう動けませんよ?」

「わかってる。だが、少しだけ俺の話を聞いてくれないか?」

トーマスはじつと杏寿郎を見つめると、やがて静かに汽笛を鳴らした。

「ありがとう」

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

その後、隠によつて乗客達は無事保護された。重傷者多数。特に煉獄は酷い状態だつたため、蝶屋敷で治療を受けることになつた。

だが幸いなことに、炭治郎達の怪我は軽傷であり、命に別状はない

かつた。

ただ一人、杏寿郎を除いて。

彼の傷は深く、左目は潰れ、内臓にも大きな損傷を受けていた。更是には肋骨が折れ、背骨まで砕けている状態だ。しかし、彼は生きてい る。

「何故助けた」

病室のベッドの上で、杏寿郎は問い合わせた。

答卷之二

建物の外、窓から杏寿郎の部屋を覗くトーマスは暫く黙っていたが、ゆっくりと口を開いた。

「もう？」

「この世に生を受けた以上、人はみな役割を持つて生まれます。誰か

11

「人は常に、他の誰のために生きています。貴方もそうして生まれたのです」

—

一貴方は強い。だから、自分の果たすべきことを見出してください

それだけ言うとトーマスはふわりと浮かぶと車庫へと帰って行つ

1
た

卷之二

A vertical sequence of 15 alternating black and white triangles pointing downwards. The pattern starts with a black triangle at the top, followed by a white triangle, then a black triangle, and so on, ending with a black triangle at the bottom.

つづかない。

鬼滅の刃 柱合裁判——その6

炭治郎は目を覚ますと鬼滅隊本部、御館様の屋敷前の庭にいた。鬼となつた妹を隠していた罪で、拘束され連れてこられたのだ。

「ここは鬼殺隊の本部です。あなたは今から裁判を受けるのですよ。

竈門炭次郎君」

蟲柱——胡蝶しのぶが話しかける。炭治郎が慌てて周りを見回すと他にも人の姿があつた。

炎柱——煉獄杏寿郎。

音柱——宇髄天元。

恋柱——甘露寺蜜璃。

岩柱——悲鳴嶼行冥。

霞柱——時透無一郎。

蛇柱——伊黒小芭内。

水柱——富岡義勇。

風柱——不死川実弥。

そして……ジョジョ柱——ジョルノ・ジョバーナ。

「炭治郎君、あなたを鬼殺隊規約違反で訴えます！ 理由はもちろんお分かりですね？ あなたが皆を騙し、鬼を連れていたからです！ 覚悟の準備をしておいて下さい。貴方は重大違反者です！ 首を刎ねられるのを楽しみにしておいて下さい！ いいですね！」

ジョルノの一息で炭治郎の罪と処分を言い渡した。漆黒の意志を感じられる瞳に睨まれ、恐怖を感じた炭治郎だがすぐに反論する。

「待ってください！ 僕は禰豆子を治す方法を探していました！ それにあの時は誰も死んでいないはずです！ 確かに規則には反しましたが……」

「口答えするな!! お前の意見など聞いてないんだよ！ 黙れ!!」

「よもや！ 言い訳がましい口答えをするとは見損なつたぞ少年！」
「あああ……なんというみつともない真似をするんですか……。恥をさらすんじやありません」

他の柱達からも非難の声が上がる中、お館様こと産屋敷耀哉が現れ

た。

「おはようみんな。今日はとても良い天気だね。空は青いのかな?」

その言葉を聞きながら、柱達は皆、平伏し頭を下げる。

「顔ぶれが変わらずに半年に一度の柱合会議を迎えた事、嬉しく思うよ。さて、まずは新しい柱である君の話を聞こうじゃないか。ねえ

? ジョルノ・ジョバーナ」

その名を聞いた瞬間、炭治郎の顔色が変わった。

「えつ!? ジョ……ジョルノさんってまさか…………」

「はい、俺の名はジョルノ。ジョルノ・ジョバーナといいます。この度新たに『柱』に就任致しました」

そう言つて優雅に一礼をした彼を見て、誰もが絶句していた。

「うむ! それは実にめでたいな! よろしく頼むぞ! ところで君は何歳なんだ?」

空気を読まない煉獄が質問するが、それどころではない。

「では次に竈門炭次郎君について話しましようか。彼は現在鬼殺隊士でありながら、鬼を連れているのです。これは重大な規律違反です」

胡蝶の言葉を受けて宇髄が手を挙げた。

「すみません。僕は彼の事を全く知りません。一体どういう経緯があつて彼が鬼になった妹を庇つてているのか教えてくれませんかね?」「そうだね。私もその辺りの事はよく知らないんだ。だから当事者から直接聞く事にしようか。ジョルノ、説明してくれるかい?」

「はい」

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

ジョルノは懐から取り出した一枚の手紙を開き読み上げ始めた。

『此度の任務において、鬼の妹を連る剣士と共に行動する事となるだろう。しかしながら、私は彼らを信用している。よつて、もしその妹が人を襲つた場合、兄共々即刻斬首とし、私も責任を取つて腹を切るものとする。なお、この件についてはお館様に許可を頂いているため問題はない』と書かれています』

その内容を聞いて何人かが眉間にシワを寄せたが、当の本人は全く

気にしていなかつた。

「それともうひとつあります。こちらの文面の方が重要かもしれませんね」

手紙を読み終えたジヨルノはもう一通の書状を取り出し広げた。

「こちらは妹の禰豆子さんの血液検査の結果です」

そこには炭治郎の血と禰豆子の血を採取して調べた結果が書かれていた。それによると兄弟の血には鬼化を抑制する因子があり、これが活性化すると人を喰わずにいる代わりに体力が著しく低下し衰弱死してしまう事が分かつたのだ。また、逆に禰豆子の血は人間に戻るための薬となる可能性がある事も判明した。



「なるほど、つまり竈門君は妹を人に戻そうと頑張っていたのですね」「うむ！ 感心なことだ！」

甘露寺と伊黒が納得したように言うと、炭治郎はその通りだと言わんばかりに大きく何度も首を縦に振った。しかし、そこで異議を唱えたのは意外にも不死川だった。

「おいちよつと待てエ。こいつは鬼を連れていたんだぞオ。そんな奴の話を簡単に信じるんじゃないえ」

「まあまあ落ち着け実弥。お前の悪い癖が出てしまつていてるぞ。いつも言つてゐるだらう？ 自分の目で見たものしか信じてはいけないと」

「ですが……とジヨルノは続ける。

「鬼滅隊規律違反は重大な問題です。即刻彼の首を刎ねるべきでしょう」

「俺もそれに異存は無い。むしろ今まで生かされていた事に感謝するべきだ」

「私も贊成だわ。鬼を連れているなんて許せないもの」「僕も同意見だよ」

「ああ……こんな子供まで……」

柱達が次々と処刑に賛同していく中、それを止めたのはお館様こと産屋敷耀哉であつた。

「みんなの意見も分かるけど少し待つてくれないか？ それに、彼を試す機会があるかもしないよ」

「御意」

全員が平伏し頭を下げる中で、一人だけ顔を上げ産屋敷を見つめる者が居た。

「おや？ どうしたんだい善逸？」

「あのー、一ついいですか？」

「何かな？」

「俺は反対です。だつてこいつからは嘘の音が全くしないんですけどもん。この音が聞こえないって事は多分本当に悪いヤツじやないと思いますよ」

その言葉を聞き、その場に居る全員の動きが止まつた。

そして真っ先に動いたのは他でもない産屋敷である。

「ふふつ、そうか。君がそういうならそうなのかな？」

その一言で、その場の雰囲気が変わつた。誰もが認めざるを得なくなり、それ以上何も言えなくなつたのだ。

「さすがは耳が良いだけのことはあるな」

「でもなんであいつあんなに自信満々なわけ？」

「きつと彼なりに思うところがあつたんでしょう」

小声で話し始める宇髄、時透、胡蝶を横目に、不死川は舌打ちをしながら再びそっぽを向く。

「では、これで議題は終わりですね。みなさん解散でいいですよ」

こうして波乱の柱合会議は幕を閉じた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

その後、炭治郎達は産屋敷邸内の一室に案内された。そこで傷だらけの男——風柱、不死川実弥とジヨジヨ柱——ジヨルノ・ジヨバーナによる面談が始まる事となつたのだ。

「俺はお前らみたいなガキは嫌いだア。特に富岡の弟弟子つてのが気に入食わねえ」

「御館様の手前、あなたの首を刎ねるは諦めましょう。しかし、覚悟の準備はしておいて下さい」

いきなりの罵倒に目を見開く炭治郎。柱達の態度からある程度予想していたが、ここまでとは思わなかつたようだ。

「俺は鼻が効くんです。あなた達が俺たち兄妹を信じていないつてことくらい分かります。匂いなんか嗅がなくたつて、あなたから発せられる言葉に信頼の念は一切感じられないんです」

その言葉を聞いた瞬間、不死川の額に青筋が浮かび上がつた。

「黙れクソ餓鬼イ……テメエみてえなのは昔山程見てきたぜえ。『自分は正しいことをしている』『自分が一番偉い』って顔しやがつて……虫酸が走るんだよオ!!」

「それは僕も同じです」

今度はジヨルノが口を開く。

「先程の裁判もそうですが、貴方は鬼という存在を何だと思っているんですか。ただの化け物か、それとも悪意ある敵か。どちらにせよ、彼らは罪のない人達の命を脅かしているのです。それを野放しにしておく理由がどこにあるというのですか」

「テメエは鬼を全滅させることが出来るつていうのかア？　できるつてんならやつてみろよオ」

「ええ、もちろんできます」

「はつ、ほざけエ!!　出来る訳ねえだろうが!!」

「口ではなんとでも言えます。本当に覚悟ありますか？　覚悟の準備は出来ていますか？」

「覚悟の準備……？」

「鬼殺隊に入った以上、常に死は隣り合わせ。けれど、その覚悟の準備を兄妹共々今ここで決めてもらいたい」

ジヨルノの漆黒の意志を込めた視線が、再び炭治郎を貫く。

「この世に絶対はありません。もしも妹さんを治す方法が見つからなかつた時は、その時は兄であるあなたが、責任を持つて妹さんの頸を斬り落としなさい」

その言葉に、思わず炭治郎は声を上げた。

「そんな……そんな事を言うためにわざわざここに連れて来たんですか!?」

「はい。それだけ大事な事なのです。それに、今の君には覚悟がない。覚悟の準備がなければ妹さんは死ぬことになります」

その言葉で炭治郎は押し黙ってしまった。

「最後に、この質問に答えてくれたら今日の所は帰つてもいいです。もう一度聞きます。覚悟の準備はできていますか？」

「……………はい」

「よろしい。不死川さん、彼は覚悟を示しました。ならばこちらも一度は信用してみましよう。最も、信用を裏切つたら死よりも恐ろしい目にあつてもらいます。僕のゴールドエクスペリエンス・レクイエムで」

「…………チツ、勝手にしろオ！」

「有難うござります！ 不死川さん！ ジョルノさん！」

こうして炭治郎は辛くも柱達の説得に成功し、無事、産屋敷邸を去ることができたのだつた。

鬼滅の刃 炭治郎立志編 ぐらい

「炭治郎、鬼殺隊が鬼と戦うために様々な呼吸法と型を用いていることは知っているな」

「はい、鱗滝さん」

「お前にはワシが使つていた尻の呼吸で叩き込んでやるから覚悟しろよ?」

「はい！ よろしくお願ひします！」

尻の呼吸とは、小腸が肺と同様に酸素を取り込むことができることを応用し、括約筋を利用し尻から空気を取り込みながら全身に巡らせることにより、通常の数倍の身体能力を得ることができるというもののだ。

また、その呼吸法により筋肉や関節などの可動域も広がり、より柔軟な動きが可能となるため、あらゆる敵に対応しやすくなる。

ことや、脱糞により人としての尊厳を失う可能性などがあげられる。
(補足：鱗滝さんの尻の呼吸は、脱糞する度に強くなる)

魚沼こくに第三大河にして、かほ里一全綱、たどりて、
俺はもう既に全集中の常中を身に付けていたのだが、この日初めて

鱗滝さんから真剣での手合わせを申し込まれたのだ。

俺はまだ尻の呼吸を完全には習得していなかつたが、それでも俺は負ける気は全くしなかつた。何故なら俺は長男であり、何よりも鱗滝さんの弟子なのだから。

しかし結果は惨敗であつた。鱗滝さんの尻の動きは今まで見たことないほど速く鋭いものであつた。正直全く目では追えなかつた。

鱗滝さん曰く、「尻の呼吸を極めた者は、どんな攻撃にも瞬時に対応することができるようになる」らしい。そして「もし仮にこのまま鬼殺隊に入隊したとしても、鬼を殺すことは不可能だろう」とのことだ。

つまり、鬼滅隊の入隊試験である最終選別にて生き残るために、尻の呼吸を完全に習得しなければならないということか…………。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

それから更に二年の月日が流れた。

あれから俺は一度も鱗滻さんに手合せで勝つたことがなかった。尻の呼吸を極めようと必死になつたが、どうしても勝てる気がしないのだ。

一体どうすればいいのか…… そんなことを考えていると、ある日突然お館様のお屋敷へ呼び出された。そこで衝撃的な事実を知ることとなる。

なんとお館様に会わせたい人がいると言うのだ。

まさかと思いつつ、恐る恐る座敷に入るとそこには懐かしい顔があつた。そう、そこにいたのはかつて俺の妹の禰豆子を人間に戻すために共に戦つた元水柱の富岡義勇さんだつた。

なんでも俺達兄妹のことをお館様はとても高く評価してくれていて、富岡さんを師範代に任命してくれたそうだ。

しかも驚いたことに、これからは鱗滻さんだけではなく、富岡さんも指導してくれるというのだ。これはとてもありがたいことである。早速手合わせすることになつたが、俺は尻の呼吸をまだ完全に習得していないどころか未だ発展途上の身であるため、圧倒的に不利であることに変わりはなかつた。

しかし俺は諦めなかつた。絶対に勝つてみせる。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

「始め!!」

先手必勝とばかりに一気に間合いを詰め、尻の呼吸 壱ノ型『ケツだけ星人』の構えをとる。丸出しにした尻と特殊な歩調で相手を惑わすことで隙を作りだす技だ。（諸説あります）

俺は今出せる全ての力を出し切り全力で畳み掛けた。だが相手もさすがは元柱といったところだろうか。一瞬にして俺の攻撃を見抜き、余裕で回避されてしまつた。その後反撃されそうになつたところを何とか避けたが、今度はこちらが追い詰められてしまつた。こう

なつたら最後の手段しかないようだな……。

「尻の呼吸 捨ノ型！ 脱糞ツ！」

「そう叫ぶと同時に俺は脱糞した。この型は文字通り脱糞することで相手の戦意を削ぐというものだ。（諸説あります）すると案の定富岡さんは戦う気力が削がれてしまい、呆然としていた。よし、勝負あつたな!!」

一勝者
竈門炭治郎！

こうして俺は無事に最終選別に向かう許可を得ることができた
やつとここまで来たんだ。必ず生きて帰つてやるぞ!!!

大正コソコソ噂話

実は鱗滄さんは炭治郎が尻の呼吸を身につけるまでずっと待つ
いたんだよ？ 本当は鱗滄さんの方が先に最終選別に行つていても
いいはずなのにね、だつて弟子が最終選別に行くまで待つてあげ
るなんてすごく優しいよね（笑）

A vertical column of 15 alternating black and white triangles pointing downwards.

ついにこの時が来た。今日は鬼殺隊の最終選別が行われる日だ。

襲山へ向かつた。

この一年間様々なことがあつた。特に最終選別が始まるまでの間は本当に大変だつた。鱗滝さんに何度も殺されかけたし、鱗滝さんの尻を見て吐きまくつたこともあつた。

格してみせる!!!

A vertical stack of 15 alternating black and white triangles, starting with a black triangle at the top.

しばらく歩いていると、とうとう藤の花が咲き乱れる美しい場所へと辿り着いた。ここが鬼滅隊最終選別の会場か……。だが、その美しさとは裏腹に、会場の雰囲気は非常にピリついていた。それもそのためだ。ここには何百人の鬼殺隊員候補達が集っているのだ。皆、

そしていよいよ最終選別の説明が始まった。

要約すると、ここから七日間生き残れば晴れて鬼殺隊の一員になれるということだ。まず初めに七日間の食料として各自好きなものを持ち寄るよう言われた。もちろん俺も握り飯を大量に持ってきた。

そして次に鬼について説明された。何でも人を喰らう化け物らしく、奴らは人を殺すことを快楽としているらしい。許せない……。そう思つた時、誰かが言つた。

「おい見ろよ、あいつなんか変じやねえか？」

何やら他の参加者たちがヒソヒソと話をしているようだつたので気になつてそちらの方へ耳を傾けてみると、「あいつ……何か臭くなつか?」という声が聞こえた。……えつ!? 俺そんな臭いかなあ? 確かにちょっとおならは出ちやうけどそこまで酷くないと思うんだけどなあ……。

そう思い自分の腕を鼻の前に持つてきて匂いを嗅いでみた。クンカクンカ……スー一ハースー一ハア…… やつぱり俺そんな匂わないような気がする……。

もしかしたら別の人のことと言つているのかもと思つて周りをよく見てみたところ、どうやら俺のことを言つていたみたいだつた。……ん? 俺はその時あることに気づいた。

この場にいるほとんどの人が俺のことを見ながらひそひそと話していたのだ。しかも何故か俺の顔ではなく下半身の方を見ていた。

そこで俺はハツとした。尻の呼吸の使い手は、口とともに尻でも呼吸を行う。尻から排出された空気は放屁に等しい。つまり、俺の尻から漏れ出る空気は、必然的に悪臭となるのだ……。そう考えると急に恥ずかしくなり顔が真っ赤になつてしまつた。

「それでは行つて参ります」と言い残し、俺はその場から逃げ出した。そして夜が明けた頃、俺はまた集合場所である広場に戻つていた。幸いなことに、俺はあの後一度も鬼に出くわすことなく、朝を迎えることができた。

俺は改めてこの試験の内容について考えた。鬼は日中は日陰に潜んでいるため、基本的に出てこないらしい。だから俺は日が出ている間は安全だと思った。

しかし、問題はこの後だ。鬼殺隊は鬼を殺すための組織であるつまり鬼を殺す術を身に付けていなければならぬ。そのためには、自分の手で鬼を殺すことが求められる。

は、自らの手で鬼を殺し、その首を切らなくてはならないのだ。
俺は覚悟を決めた。必ず生きて帰るためにも、俺は必ず試験に合格しなければならない!! こうして俺は決意を新たに、最終選別に挑むことにした。

• 10

大正ニソニソ喰語

嵐浪良は量縦送別口一戻かいともおなじに済みでなか、力く
すゞハヌ、
ぐナガ長男ジヌ。

最終選別開始から六日目の昼のことだつた。俺は遂に鬼と遭遇してしまつた。相手は四足歩行型の鬼で、見た目はかなり醜悪であつた。俺はすぐに刀を抜き戦闘態勢に入つた。

鬼は俺の存在に気づくなり襲いかかってきた。俺は咄嗟に身をかわすと、そのまま勢いよく地面に着地した瞬間を狙い、すかさず壹ノ型『ケツだけ星人』を放つた。

しかし、次の攻撃へ移ろうとしたところで、突如背後から強烈な痛みが走った。俺は驚いて後ろを振り向いた。するとそこには先程俺が放つた技を真似たかのような体勢をとる鬼の姿があつた。

再度攻撃を仕掛けようとした。

一尻の呼吸 話ノ型 放屁ツ!

……しかし、またしても俺の攻撃をそつくりそのまま返されてしまつた。このままではいけない。そう感じた俺は、一旦距離を置くこ

だが、相手も同じ考えだつたようで、お互^い一定以上の距離を保とうとしていたので、一向に決着がつきそうな気配がなかつた。

そして日が暮れ始めた頃だつた。

「ガアアアアア!!」という叫び声と共に、突然目の前の鬼が苦しみ出したのだ。

俺は何が起こったのかさっぱりわからなかつたのだが、とにかくチャンスだと思い、もう一度壱ノ型『ケツだけ星人』の構えをとつた。しかし、相手が苦しんでいた時間はほんの僅かで、やがて平静を取り戻してしまつた。どうやらこいつにも俺と同じように独自の呼吸法があるようだ。おそらくそれはさつき俺が使つたものと全く同じものであるだろう。ということは、やはり相手の方も同じように考へているようだな……。どうしたものか……。

俺は悩んだ末、一つの作戦に出た。

「尻の呼吸！ 参ノ型！ 握りつ屁！」

掌の中で圧縮された屁は、投げつけた相手に衝撃を与えることができる。しかも相手の攻撃を利用して放つことにより、より威力を増すことが可能なのだ。

俺が放つたその一撃は見事相手の頸に命中した。

これで勝負がついたと思い、急いで相手の様子を見に行つたところ、なんと相手の首は胴体から離れてしまつていた。そしてそれと同時に身体が塵となつて消えていった。

やつたぞ!! 俺は遂に鬼を倒せたんだ!! 俺は嬉しさのあまりその場で飛び跳ねた。そのせいか腰の辺りに強い衝撃を感じた。

……いってえ!! しかし、ここで立ち止まつてはいられない。

あと一日生き延びるだけでいいんだ。絶対に生き残つてみせるぞ

!!!

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

???大正コソコソ噂話???

実は最終選別が始まつて以降炭治郎は一度もおならをしていないよ！ すごいね～

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

最終選別最終日の夜がやつてきた。

昨日あれほど意気込んでいたものの、結局俺は誰一人として殺すことはできなかつた。情けない……。だが、こうして生き残れただけでもよしとしよう。

それにしても、今年の最終選別は例年に比べて参加者が多いな。ま

あそれだけ鬼が蔓延つて いるといふことなのかも知れないな……。そんなことを考えながら俺は眠りについた。

翌朝目を覚ますと、隣で寝ていたはずの同期達はもう既にいなかつた。どうやらみんな早くに出発してしまったようだ。俺は慌てて準備をし、その後すぐに出発した。

「尻の呼吸、壱ノ型——ケツだけ星人！」

走りながら技を放つ。尻の呼吸の最大の特徴は、移動しながらでも戦えるという点にある。だが、技を出しながら走るというのは非常に難しいもので、俺は何度も転びそうになりながら必死で食らいついた。

そして、なんとか集合場所まで辿り着くことができた。

俺は安堵の表情を浮かべ、大きく息を吐いた。よかつた……無事生きて戻れるんだ…… そう思うと涙が溢れそうになった。

その時だった。

「おいお前、何か臭くないか？」

聞き覚えのある声が聞こえてきた。俺は恐る恐る振り返った。

「やつぱりそうだ、あいつだ。あいつ絶対臭えよ……」

そう言つて指差す先には、俺が殺し損ねた鬼がいた。俺は震えが止まらなかつた。嘘だろ……どうしてここに…… 全身から冷や汗が吹き出し、膝が笑い出す。

だが逃げる訳には行かない。俺はこの三年間死ぬ気で頑張つてきた。俺はやればできる子なんだ!! 俺は自分に言い聞かせ、再び鬼に立ち向かつていつた。

しかし、鬼の攻撃により、俺はまたもや窮地に立たされてしまった。まずいな……これ以上長引かせるのは危険すぎる……。

だが、ここで俺が死んでしまつたら、誰が妹を守るというのだ?
……仕方がない。ここは俺も奥の手を使うしかないようだな。

俺は覚悟を決め、最後の力を振り絞り叫んだ。

「尻の呼吸 捨ノ型！ 脱糞ツ!!」

すると、どういうわけか俺の尻から大量のガスが放出されたのだ。その途端鬼の動きが止まつた。一体何が起きたのかわからぬが、こ

れは千載一遇の好機である。

「うおおおお!!」

俺は雄叫びをあげ、鬼の首めがけて刀を振るつた。

「グワアア!?」

鬼が断末魔の声をあげると同時に、奴の体は崩れ落ちていった。
俺は勝つたのか……？ 信じられない……俺は生き残つたという
のか？ その時だつた。

「おいあいつ、何か臭くないか？」

またか……今度はどこだ？ そう思い周囲を見渡したところ、最終選抜の生き残り達全員が俺のことを見ていた。

「やつぱりあいつだ……あいつ絶対臭えよ……」

そう言つた奴の顔を見てみると、見知った顔だつた。……ん？ この男どこかで見たことがあるような……あつ!! この男は確か初日に話しかけてくれた人じやないか!! ということは……？

この男が臭いと言つたことによつて他の人達も一斉に騒ぎ出したようだつた。そして皆口々に、「あいつは臭い」「あんなやつと一緒に行動したくない」「近づかないでほしい」などと言つているようだ。

どうやら俺のせいで他の人の士気を下げてしまつたらしい……。申し訳ないことこの上ないが、それでも俺はこの試験に生き残ることができた本当に良かつたと思つてゐる！ こうして最終選別は幕を閉じた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

???大正コソコソ噂話???

炭治郎君はあまり鬼を狩れなかつたけど、代わりに沢山の人や鬼に

臭いと言われたから、プラマイゼロだよ！

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

「それではこれより、鬼滅隊入隊試験の結果を発表する!!」

ついにこの時が来てしまつたか…… 俺はゴクリと唾を飲み込んだ。正直言うと、かなり自信があつた。

鬼殺隊の剣士になるためにこれまで死に物狂いで修行してきたのだ。俺はやれば出来る子だと信じてゐる。だからきっと大丈夫だ。

そう信じていた。……しかし、現実は残酷なもので、俺の点数はかなり低かった。

最終選別が終わつた後、俺は改めて自分の実力不足を思い知られ

た。もつと強くなりたい。俺は強くそう思つた。

だからこれからも俺は努力し続けるつもりだ。

つづかない。

名探偵コナン ペンションパーティ殺人事件

A vertical column of 15 alternating black and white triangles pointing downwards.

見た目は筋肉
頭脳はエリテ
真実はいつも暴力

その名は「名探偵」ナントリ】

卷之三

コナノボトの筋肉推理

コナンドーの筋肉推理によてひとつの事実が判明した（ダイニング・メッセージにはもうひとつ謎があつたんだ…）

それは「A」という文字の意味か「a」というのは「頭文字」を表している。つまりこれは「被害者の名前の頭文字」を意味しているのだ。

そして被害者の男性の名前は『浅野和熙（あさののかずひ）』だったつまりこの『A』の文字は、被害者である浅野氏のイニシャルなのだ。（ということは……犯人はこの中に入っている!?）

コナンドーに緊張が走った。

(いや待てよ……。でももしそうだとしたら一体誰なんだ?)

此中間記述の如き

卷之二

たが、二ナントリには秘策がある。たゞ、大抵の犯人たる者たちは、いつも通り暴力で解決すればいいのだ。

そんなことを考へてゐるうちに夜になつた。パーティ会場には既に人が大勢集まつていた。どうやら食事が始まるようだ。すると、司会進行らしき男がマイクを手に取り話し出した。

したいと思います。グラスをお持ちください」一同は持っていたグラスを掲げた。

「それでは、今日ここに集まつたことを祝して……カンパニー！」

「カンパニー!!」

「うわー!! うわー!!」

肃々とパーティが進む中、コナンは小五郎の背後に立つと静かにコキヤツつとその首をへし折った。小五郎は白目を剥き、口からは泡を吹く。

有り得ない角度となつた首のまま、小五郎はストンと、氣絶しながら椅子に座つた。首を真後ろに向けたままで。

突然の出来事にその場は騒然となる。

「な、何事ですか!? 毛利さんが死にかけてる!?」

騒ぎを聞きつけてやつてきた安室透は驚きの声を上げる。だがコナンは慌てず安室透に答えた。

「死ぬほど推理している、寝かせてやつてくれ」

眠りの小五郎。有り得ない首の角度のまま眠つたような態度で度々名推理を繰り出すことから、彼はそう呼ばれている。

『分かつたんですよ、事件の犯人が』

コナンは喉の筋肉をたくみに操り、小五郎の声で推理を開始した。

『実はあの時、私はあることに気がつきましてね』

勿体ぶるように一呼吸置く。

『なんだと思います?』

「え……」

困惑する安室に構わず続ける。

『私が気がついたこと……それは……』

ゴクリ、とその場の全員が息を飲む。

『事件が起こる前に、既に事件は終わっていたということだつたのです!!』

ドーン! という効果音とともに高らかに言い放つ。

『どういうことです?』

当然の反応だろう。

『つまり、こういうことです』

コナンは語り始めた。

『まず犯人は浅野氏を殺害する計画を立てた。しかしその時ふと思つたんですよ。浅野氏は自分が殺される理由を知らないのではないか、

と』

そこで一旦言葉を切る。

『そこで犯人はある計画を立てた。それは、「浅野氏が殺されても仕方がない状況を作る」というものです』

「ほう」

安室はその先を促すように相槌を打つ。

『そして犯人はそれを実行した。それがダイイング・メッセージの謎ですよ。被害者の名前の頭文字だけを書いた紙切れを残しておくことによつて、被害者自身が自分の名前の頭文字からメッセージを残そうとしたかのように見せかけるというもの』

コナンドーの説明を聞きながら安室の顔は徐々に青ざめていく。『そうすることで、被害者の浅野氏は自分が殺される動機を知らずに死んでいつたわけです。つまり、この事件には最初から矛盾が生じていたつてことになる!』

コナンドーは勝ち誇った笑みを浮かべた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

「しかし、じゃあ誰が犯人なんですか?」

パーティの客のひとりが小五郎に問い合わせた。

『それはこれからお話しします。ただ、この中に犯人はいるということだけは先にお伝えしましょう』

小五郎の声でそう告げられると、ざわめきが一層大きくなつた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

「ふざけんなよ! そんな理屈が通るかよ!」

怒り狂つて いるのは小太りの男だ。名前は確か「鈴木次郎吉(すずきじろうきち)」と言つただろうか。

「俺らの中に犯人がいるだと? そんな馬鹿げた話があるもんか!!」「まあまあ落ち着いてください、鈴木さん」

宥める声の主は眼鏡をかけたインテリ風の男だつた。

「俺の名前は田中一郎(たなかいちろう)です。皆さんは覚えていないかもしだせんが、私達は以前この屋敷に来たことがあるんですよ」「え、 そうなのか?」

初耳の情報に一同はどよめく。

「ええ、まだ若い頃の話ですがね。それでですね、そのときのこと思い出したんですよ」

そう言つて田中は続けた。

「あの時は今みたいに食事が出るなんてことはなくて、各自持つてきました弁当を食べていましたよね。でも、食事が出てないのにみんな帰らないし、それに料理も全然減つていないしで不思議に思っていたんですよ。しかも、パーティが始まつてからはさらには謎が深まりました」「どういうことだよ」

「だつて皆さん、さつきから全く食事に手をつけようとしないじゃないですか」

「えつ」

「そりやそうだろ」

「いや、おかしいでしよう」

「何が？」

「こんなに美味しそうな食事を目の前にして食べないという選択肢はないはずなのに、誰も手を付けようとしてくれないんですよ」

「そう言われば確かに……」

「あれは不思議な光景でした」

「一体何が言いたいんだよ」

「いえ、別に。ただ、あの時のことが妙に頭に残つていたものですか
ら」

「おい」

「ああ、すみません。話を戻します」

「で結局何がいいたかったんだお前は！」

怒鳴る鈴木に構わず田中は続ける。

「そんなことがあつたものだから、今回の事件の話を聞いたとき、私は真つ先に思つたんです。『あの時と同じことが起きたんじゃないか』と

「あの時？」

「ええ、そうです。パーティが始まつたばかりの頃です」

「まさか」

「そのままかです。あの時と同じように、今もまた、誰かがこつそりとパーティ会場から抜け出そうとしていますね」

「…………」

一同は黙り込む。

「誰なんだ一体!?」

「出てこい!!」

「出てきなさい!!」

「いい加減出てきたらどうなの!!」

「早くしないと逃げちゃうわよ!!」

一同は口々に叫ぶ。

すると、ひとりの男が立ち上がった。

「俺がやりました!!」

「俺は浅野さんを殺した!!」

男は涙ながらに訴えかけた。

「だから許してくれ!!頼む!!」

「嘘つけ!!」

すかさず鈴木は反論する。

「お前はさつきまでずっとそこにいたじゃないか！」

「そうよ！あなたはパーティが始まる前からここに居たじゃない!!」

「違うんだ……本当に殺したのは俺なんだよ!!」

男の告白に場は騒然となる。

『いいえ、その人は犯人ではありませんよ』

コナンドーは小五郎の声で答える。

『なぜなら、私はもう既に事件を解決しています』

「え……」

『ダイイング・メッセージージの謎を解くことでね』

コナンドーは推理を語り始める。

『まず、被害者の名前の頭文字を並べ替えるとこうなります』

コナンドーは小五郎の代わりにホワイトボードに文字を書き並べ

た。

『A→AZM 浅野和馬 浅野カズマ A z u m a K a z u m a

浅野和真 浅野かずまさ』

「浅野さんがふたり!」

「どういうことだ!?」

『つまり、浅野さんは二人いたということになります』

「なにい!?

「つまりどういうこと?』

『被害者である浅野氏は偽名を使ってパーティに参加していたということです』

「なぜそんなことを……?』

『理由はふたつ考えられます』

「コナンドーは小五郎の指へし折りながらを一本立てる。

『ひとつ目は、被害者の浅野氏が偽名を使っていたことを隠すため』

『隠す必要がどこにあるんだ?』

『これは後で説明しますが、浅野氏の本名には「あ」から始まるものはなかつたんですよ』

「なに!?

『浅野氏は自分の名前を偽ることで、ダイニング・メッセージの謎を解こうとする者を混乱させようとしたのでしょうか』

「なんと!?

『そして、もうひとつ的原因』

『コナンドーは小五郎の残りの指をへし折りながら三本目の指を立てます』

『浅野氏を殺害した犯人は、浅野氏になりすましていたのだ』

「なりすましてた!?

「どういうことだ!?

『浅野氏は事前に犯人によつて変装させられていたのです』

「そんなバカな!?

『そして、浅野氏を殺害した犯人は、浅野氏に成り代わつてパーティに出席し、浅野氏が残したダイニング・メッセージの謎を解かせようと

した』

「じゃあ、犯人は最初から分かつてたんですか？」

『犯人の正体は、被害者の浅野氏と入れ替わった人物』

「じゃあつまり…」

『ええ、そうです。朝乃さん、犯人はあなたなんですよ！』

「うそ!?」

「何イツ!?

一同は驚愕の表情を浮かべる。

「うそ!? どうしてバレたの!?」

「やはりそうだったのか」

「うそーっ!!」

「なるほど、そういうことだつたのですか」

安室透、田中一郎は納得の表情を浮かべた。

「ちょ、ちょっと待つてよおじさん！」

コナンドーは小五郎に話しかける。

『どうした?』

「僕には皆目見当もつかないんだけど、一体どうやつて犯人を見破つたの?」

『簡単だコナン。朝乃さんは浅野氏の死体を見て彼の名前を呟いていた。誰も彼の名前を知らないはずなのに』

「え、そうだつたの?」

『ああ、間違いない』

決定的な証拠に犯人の朝乃——新山朝乃は泣き崩れた。

『だつて…だつてあの人があ…あの人…人が悪いのよ！私は悪くないのよ

！悪いのは全部あの人…のせいなのよ！』

「落ち着け！何を言つて…いるか分からんぞ！」

「あの人…が！あの人…が私との婚約を破棄して、他の女と結婚するつていうから！」

「だからといつて殺してしま…うとは…」

「仕方なかつたのよ！仕方がなかつたのよ!!」

錯乱している様子の新山に鈴木は詰め寄る。

「おい、本性を現しおつたな。この殺人犯め!!」

「ち、違う！私じゃない！私じゃないのよおおお!!」

「そうだな」

コナンドーは口ケットランチャーを構える。

「一体何が始まるんです？」

「第三次大戦だ」

目黒警部がそう答えるや否や、コナンドーは引き金を引いた。

ズドオオオン!!

轟音とともに発射された口ケットランナー弾は真っ直ぐに飛んでいき、窓ガラスを突き破つて外へと飛び出していった。

「あ、あれ？」

安室は窓の外を見た。

そこには、爆発炎上するペンシヨン地帯があつた。

「な、なんじやこりやああつ!!!」

『事件解決』

コナンは小五郎の声でそう呟いた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

こうして殺人事件は幕を閉じた。

犯人は捕まつた。しかし、世間はこの事件の本当の恐ろしさに気づいていなかつた。この事件の真の恐怖は、事件の真相ではなく、この事件を起こした人間の狂気にあつたということを。

それは、誰にも知られることのない物語。

知られてはならない秘密の物語。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

なお首が真後ろに向いたまま気絶していた小五郎は、その後病院で目を覚まし、後遺症もなく無事に退院できたという。

鬼滅の刃 炭治郎立志編ぐらい その2

「炭治郎、鬼殺隊が鬼と戦うために、様々な呼吸法と型を用いていることは知っているな」

「はい、ダルシムさん」

「お前には私が使っていたヨガの呼吸を教える。私の技を全て叩き込んでやるから覚悟しなさい」

「はい！よろしくお願ひします！」

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

ヨガの呼吸とはインドか伝わった古代の格闘術で、約四千年も前に発祥したものだと言われている。

その特徴は筋肉や関節を自在に操り、あらゆる動作を可能にすると いうもので、それ故に、どんな姿勢であっても戦えるように考案されたものらしい。また、攻撃にも防御にも応用が利くため、この呼吸を習得することは戦いにおいてかなり有利となる。

さらに、呼吸を極めることでテレポートをしたり火球を生み出した りと、超能力じみたこともできるようになるらしい。

（余談だがダルシムのヨガの呼吸は、ヨガの流派の中でもかなり特殊なものだつたりする）

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

そして今、俺の前にはその呼吸法の開祖である男が立っている。

俺はこれから彼に教えを受けるのだ。正直言つてとても楽しみだ。

何しろ今まで全く知らなかつた格闘技の技術なのだから。

「ではまず最初にヨガの基本のポーズを取るところから始めるぞ」

そう言うとダルシムさんは床の上で正座をし、そのままゆっくりと仰向けになつた。どうやらこれが基本の姿勢らしく、両手両足を広げてリラックスしているように見える。

「これは『太陽礼拝』と言う。ヨガにおける基本的な瞑想の形であり、肉体の隅々まで気を通すことができる最も簡単な形でもある」

「なるほど……確かに全身に力が入つていてとても気持ちよさそうな感じですね」

「うむ、やつてみろ」

俺は言われた通りに真似をしてみる。

「こうですか？」

「違う、もつと力を抜いて自然体になるんだ。頭を下げすぎてているし、腕を伸ばしすぎていてバランスが悪い。そうだな……まずは両腕を横に伸ばして寝そべってみろ」

「はい」

言われるままに手足を伸ばすと、ちょうど両肘と両足の裏がくっつくような体勢になった。これなら楽だしいかも知れない。

「それが一番楽だろう？では次は足先に力を入れずに爪先で立つててくれ」

「はい……」

言われて足先に力を込めないようにする。

すると少しだけ体が浮いた気がした。

「今度はゆつくり立ち上がるんだ」

「わかりました」

俺は右足を前に出しながら左足を曲げる。

次に左足で体重を支えつつ、右足だけで立つた。

「ふう……結構疲れますね」

「最初は誰でもそんなものだ。ではもう一度やつてみよう」

それから何度も繰り返した。その度に少しずつ慣れてきたのか、安定して立つことができた。

ただやはりまだ重心の位置が悪くフラついてしまうので、もう少し練習が必要だろう。しかしこれだけでもだいぶ体力を使うことがわかつた。

これを毎日続けるというのは大変そうだ。

「よし、今日はこのくらいにしておこう。明日もまた同じ時間にここに来なさい」

「はい！ありがとうございました！」

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

それからひと月が経ち、ヨガの呼吸の鍛錬はポーズをとることから

本格的な動き方へ変わつていつた。

今では太陽礼拝と言つたヨガのポーズも十種類以上できるようになつてゐる。もちろんそれだけではない。柔軟体操や筋トレなども行い、より効率的な体の動かし方を習つた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

そして一週間後、遂に最終段階に入つた。

それは精神統一のための呼吸法だつた。

「炭治郎、今から私が言うことを繰り返し唱え続ける。心の中でいいか、繰り返すぞ……」

「はい!!」

「ヨガ！」

「ヨガ～」

「ヨガ！」

「ヨガ～」

「ヨガ！」

「ヨガ～」

「ヨガ!!」

「ヨガ!!」

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

「よし、今日の修行はここまでだ」

「はい!!本当にありがとうございました!!」

ダルシムさんが帰つていくのを見届けると、俺は早速瞑想を始めた。

そして一時間程経つた頃だろうか、俺は不思議な感覚を覚えた。まるで自分の中にもう一人誰かがいるかのような……。

そう言えばダルシムさんが言つていた。ヨガの深い集中は内なる自分との対面から始まる。その言葉の意味がようやくわかつた。

そしてその瞬間、俺は自分の内側から湧き上がる何かを感じた。

その正体はわからないが、とても温かいものだつた。俺はそれを手繕り寄せるように、ゆつくりと意識の中に落とし込んでいく。

するとその温もりはだんだんと大きくなり、やがて俺の全てを包み

込んだ。

その心地良さに身を委ねていたその時、俺の脳裏にある光景がフラツシユバツクしてきた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

そこは雪山のような場所だつた。地面も空も真っ白で、周りには吹雪が吹き荒れている。

そして目の前には大きな岩があつた。俺の手よりも大きな石だ。その表面には奇妙な模様が彫られている。

俺はその石を知っていた。これは……ヒノカミ神楽の型が描かれたもの。

つまり、この大岩に刻まれたものは日輪刀の素材ということだ。では何故こんなものがここにあるのだろう？

そう思つた時、背後から声をかけられた。

『それに触れてはいけない』

振り向くとそこには一人の老人がいた。

白い髭を生やし、黒いローブのようなものを着ている。

『それは私の血族の者にしか扱えない』

『貴方は？』

『私はかつて鬼舞辻無惨を追い詰めた始まりの呼吸の剣士の子孫。名を繼国巖勝と言う』

『！』

『お前に頼みがある。どうか私の技と呼吸を受け継ぎ、日の呼吸を継いでくれ』

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

（何なんだ今のは……）

そこで俺の瞑想は終了した。

だがあれは何だったんだろうか。

それにあの人は一体何だつたのだろう。

俺に何を伝えようとしていたのだろう。

（まあいい……今はそれよりも）

瞑想を終えた俺は瞑想によつて得られた情報を整理し始めた。

まず瞑想中に浮かび上がってきた記憶。おそらくこれは幼い時に聞いた、父さんの昔話の記憶だろう。竈門家は代々続く炭焼きの家系だ。だから俺にも小さい頃から様々なことを教えられてきた。

その中で特に印象に残っているのは父さんの仕事についてだ。

母さんや弟妹たちはよく知らないみたいだったが、俺だけは知っている。

うちの父さんの先祖は若い頃に一人で山に住み、木を切り、炭を作つて暮らしていたらしい。そんな生活を何年も続けているうちに、ある日突然、ある人物と出会つたそうだ。

それが今から200年以上前のことと、どうやらその人物が件の“ヒノカミ神楽”を作つた張本人であるようだ。

そしてその人物は、なんとその時代に既に存在していたとされる最強の生物・鬼の王、即ち鬼舞辻無惨と戦つて見事勝利したのだそうだ。それ以来、彼は子孫たちに自分の剣技を全て伝え、後の世のために残したのだという。その後、彼の子孫である俺たちの祖先は、更に独自の呼吸法を編み出し、戦い続けた。

そして遂には全ての呼吸の源流となる呼吸法を生み出し、その名を『日の呼吸』と名付けた。

そして時は流れ、大正時代。

祖先は新たな呼吸法と、その奥義を一つの形にまとめた。それが全集中の呼吸の原型となつた呼吸法であり、現在俺達が使つている『水の呼吸』『風の呼吸』などの元となつているものだ。

その呼吸法は、戦国の時代に生み出された始まりの呼吸、即ち『日の呼吸』を真似たものだという。ちなみにこの呼吸法が編み出された時代を戦国時代と呼んでいる。

つまり、あの夢で見た老人は戦国時代の人ということになる。しかし……なぜ今になつてそんな昔の人のことを思い出したんだろう。しかもそれが記憶ではなく、実際に体験したような感覚で思い出せるなんて。

ヨガの呼吸を極めると超能力じみた能力を得ることが出来ると言え。もしかしたらその一端に触れたのかもしれない。

明日ダルシムさんに聞いてみよう。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

「——と言ふことがあつたんですよ」

「ほう……そのようなことが……」

翌日、俺はいつも通りダルシムさんの元を訪れ、昨夜の出来事を話していた。

「それで、どう思われますか？」

「うむ……俄には信じ難い話ではあるが、お前は嘘をつくような人間ではないしな。恐らく眞実なのではないかと思う」

「やはりそうですか……」

「ただ、私も古い時代のことはあまり詳しくないからな。もしよければもう少し詳しい人に尋ねてみるとどうだらう？」

「詳しい人？それは誰のことです？」

「うむ、実はな、ここから東に行つたところに寺がある。そこにいる住職ならもつと色々わかるかもしねぬ」

「わかりました！行つてみます！」

「うむ、気をつけて行くんだぞ」

「はい！」

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

ダルシムさんと別れてから数時間ほど歩き、目的地に到着した。

「ここか」

そこにあつたのは立派な寺院だつた。大きさはそれほどでもないが、歴史を感じさせる佇まいだ。

俺は意を決して寺の戸を叩いた。

「ごめんください」

「はーい」

しばらくすると、一人の少女が現れた。年齢は十代半ばくらいだろうか。腰まで届く長い黒髪に赤いリボンをつけており、どこか大人っぽい雰囲気を感じる。

服装は和服で、肩からは紫色の花柄が入つた羽織を掛けている。

「あら？ 見慣れない顔ですね？ どなたかしら？」

彼女は俺の姿を見ると、不思議そうな表情を浮かべて言った。

「えっと……俺は竈門炭治郎と言います。こちらにおられるという僧の方を訪ねて来たのですが……」

そう言うと、彼女の瞳が大きく開かれた気がした。そして次の瞬間には、彼女に手を握られていた。

「まあ!! 貴方がダルシム様のおっしゃっていた方ね!! ようこそおいで下さいました!!」

「は……はい」

「さあさあ、入つて!! 中でお坊さまが待っていますわ!!」

俺はそのまま引っ張られて建物の中へと連れ込まれたのであつた。

「初めまして、私がこのお寺に住むの沙恵（さえ）と申します」

「は、はじめまして！ 俺は竈門炭治郎といいます！」

「ふふふ、そんなに緊張なさらないで。楽にしてくだされば結構ですよ」

「は、はい」

「では早速本題に入りましょう。お話はダルシムさんから伺つております。なんでも日輪刀に関する事を知りたいとか。一体どのようない事を知りたいのでしょうか？」

「はい！ 実は俺のご先祖様に日の呼吸というものを使つた人がいて、その方は戦国時代に鬼舞辻無惨と戦つたことがあるそうなんです。そのことについて何かご存知ないかと思いまして……」

すると彼女から驚きの言葉が返ってきた。

「まあまあ……では炭治郎さんはご自分の家系が、始まりの呼吸の剣士の血を引いていることを知らないのですか？」

「はい……ご先祖が戦つたというところまでは知つていましたが……」

「そうでしたか……それは失礼しました」

「いえ、それよりどういう意味でしょうか？ 俺の家系が何か特別なのですか？」

「はい、まずはそこから説明させていただきます。よろしいでしょうか？」

「はい！」

A vertical column of 15 alternating black and white triangles pointing upwards. The sequence starts with a black triangle at the top, followed by a white triangle, then a black triangle, and so on, ending with a black triangle at the bottom.

それから沙恵さんは語り出した。

始まりの呼吸と呼ばれる呼吸法が生まれた経緯を。そしてその呼吸法の継承者が生み出した『日の呼吸』がどれだけ凄まじいかを。始まりの呼吸の剣士が作り出した『日の呼吸』は、鬼舞辻無惨を追い込むほどの力を持つていたのだという。しかしその剣士は、最後に自分しか使えない『日の呼吸』を後世に残そうとした。そしてそれを弟子の一人に託したのだという。

彼の作つた型こそが、現在の全ての呼吸の源流である『日の呼吸』なのだ。またその時代には既に『日の呼吸』以外にも数多くの呼吸が存在していたのだが、『日の呼吸』はそのどれよりも優れていたのだといふ。そしてその後繼者もまた優れた才覚の持ち主だった。

その者は名を継國家の長男・巖勝と言つた。

彼は日の呼吸を継承しつつ他の呼吸も極め、やがて独自の流派を生み出すに至った。これが後に世に知られることになる全ての呼吸の始まりとされている『月の呼吸』だ。

「はい、そういうことになります。そしてそのことは炭十郎殿も知っていたはずなのですが……何故炭治郎さんには伝えなかつたのでしよう？」

「父さんは体が弱くて、子供の時はほとんど床に伏していましたそうですが、だから父さんは自分のことで精一杯で、伝える余裕がなかったのかもしれません」

「お願いします」

「はい。そもそも日輪刀とは、始まりの呼吸を生み出した剣士の使つていた武器の名前になります。それは鬼殺隊にとつて最も重要なもので、鬼を唯一殺すことのできる特殊な鉱石で作られた剣です。その剣を持つ者だけが鬼と戦う資格を持ち、その刀で鬼の首を斬ることで、鬼を倒すことができると言われています。ただし、鬼の中には日輪刀以外では死なない者もあり、その場合は太陽の光を浴びせるが、もしくはその鬼を殺すことができる唯一の格闘技であるヨガの呼吸を用いるかしなければなりません。このあたりは先程お話したことと同じになるのですが、ここで一つ注意しておかなければならぬことがあります」

「何でしようか？」

「それは日の呼吸の継承についてです。現在、炭治郎さんの家系に日の呼吸の適性を持った人は存在していません。つまり、炭治郎さんの家系は、始まりの呼吸の剣士の血を引く者でありながら、日の呼吸の適正を持つていないとということになるわけです」

「え？ ジャあ俺はどうすればいいのですか？ このままだと鬼の餌食になってしまうんじゃ……」

「大丈夫ですよ。それに関しては安心してください。ヨガの呼吸のための鍛錬を続ければ、自ずと日の呼吸のための体作りが出来ます。それにもし日の呼吸が使えなくても、ヒノカミ神楽を使えるようになるだけで十分戦力となります。日の呼吸を完璧に使うためには、まずはヨガの呼吸とヒノカミ神楽を習得する必要があるのです。だからどうか焦らずゆっくりと頑張つていって欲しいと思います。私も出来るだけ協力していきますから」

「わかりました！ ありがとうございます！」

「それともう一つ、大事な話があります」

「？」

「日の呼吸の継承者がいない今、日の呼吸の剣技を受け継ぐものが現れない限り、日の呼吸は失われる運命にあるということです」

「それは……つまり俺の代で日の呼吸は途絶えてしまうかもしない

…と

「はい……残念ながらそうなります」

—

俺は言葉が出なかつた。自分が継ぐはずのものが消えようとしている。それは俺の今までの人生を否定することと同義だ。でも俺にできることは何もない。ただ黙つていることしかできない。それがたまらなく悔しかつた。

〔ノルマニヤ〕

「運が良かつたと言うにはあまりにも運命的ですが、炭治郎さんはダルシム様から師事を授かり、こうしてここにやつてきました。それだけで十分すぎるくらいの幸運なんですよ」

「今は悲観するより先にやるべき」とやるべきだと思います。そういうと、本当に何もかも終わってしまいますよ」

「……はい」



ダルシムさんの元に戻ると、俺は彼に仔細を伝えた。ダルシムさんは最後まで静かに話を聞いていたが、話が終わると、こう言つた。

「……お前の家の祖先がその……なん人物だったのか、私もそ
の方の名を聞いたことがある。確かに名は継国巖勝といったはずだ」
「継国……縁壻さんの兄の方ですか？」

「ああ、そうだ。あの御方が生きていれば、きっとお前の力になつてくれただろう。だが仕方あるまい。それよりもお前のことだ」

「日の呼吸については沙恵の方が詳しいだろう。彼女を頼るといい。そしてお前が思うまま、精進するがいい」

「うむ、良い返事だ。それでこそ我が弟子だ」
「わかりました！」

「はい！これからよろしくお願ひします!!」

「うむ、こちらこそな。期待しているぞ、炭治郎」

はい！

こうして俺は新たな一步を踏み出したのであつた。

「うむ……あれからもう一年か……」

炭治郎が修行の旅に出てから、あつという間に時は流れ、気づけば俺は16歳になっていた。

早いものだな……」

僕は独り言をると 目の前の光景は目を向けた

そこは一面の花畠だった。色とりどりの花が咲き乱れており、見ているだけでも心が安らいでくる。ここは俺が毎朝通っている場所であり、瞑想を行う際によく訪れる場所である。

今日もいつも通りここで座禅を組み、精神統一を行っていたのが、その最中に俺は奇妙な感覚に襲われたのだ。

が、
それは違つた。

俺の意識は段々と遠のき、最後には完全に途切れてしまつた。

遠くにいるはずのタルシムさんの後醍醐を感し
てしまつたのだろうか？

ん?
】

日を開けて最初に飛び込んできたのは、どこかで見たことのあるような天井だった。

「（）は一体どこなんだ？」

辺りを見回す。するとそこには見覚えのある顔があつた。

前回は、この機会に、

A vertical column of 15 alternating black and white downward-pointing triangles, arranged in a repeating pattern.

「ヨガの呼吸の極みのひとつに瞬間移動がある。これは自分の記憶の中にある場所に瞬時に移動するもので、お前は無意識的にこの場所へと飛ばされたのだよ」

「そうだつたんですか……」

「もう少し練習すれば自在にできるようになる。頑張れ、炭治郎！」
「はい!!」

「今日はもう遅い、久しぶりに私のカレーを馳走しよう」「わあ！やつたあ!! 楽しみだなあ」

A vertical stack of 12 alternating black and white triangles pointing downwards.

「ふふまるで子供みたいね。」

「ええ、だつてこゝは落ち着くんですもの」

「まだ帰つて来て、いな、ようだナゾ、何があつたの？」

「いや、そういうわけではないが……あいつは少し心配性だからな。

「うえ、道のりをへておれども、」といふ。

「当たり前のことを言つていいだけだ」

「そうかしら？まあいいわ。それより今日の晩ご飯はカレー以外には

「今日は肉じゃがを作つたり」と

「へー、それは美味しそう。なら私は手伝おうかしら」

「助かる
では早速始めるとするか」

ダルシムさんとカナエさんが作つた

後、俺は自室に戻つてベッドの上に寝転んでいた。

「食へかなあそれにしておんがおかんな」といなるかくて

瞬間移動——ヨガ・テレポート。使いこなせば戦闘においてか

なり有利に働くことができる。

もつと精度を上げて、いつでもどこでも使えるようにしたいところ。
。そんなことを考案ながらう眠りこつゝ。

次の日の朝、目が覚めると、既にダルシムさんの姿はなかつた。代わりに置き手紙があり、俺はそれを読んだ。

『炭治郎、急用ができたため出かけてくる。暫く戻る事は出来ない。よつてここにヨガ・テレポートに必要な修行方法を纏めて置いた。これを参考にして日々の鍛錬に励むがよい』

俺はその内容に驚くと同時に感謝していた。

「ありがとうございます、師匠」

そして俺は紙に書かれている内容に目を通していった。

『ヨガの呼吸の習得には大きく分けて二つの方法がある。一つは瞑想による自己暗示によつて体を変化させる方法。そしてもう一つはヨガの呼吸法を極めることによつて身に付ける方法である。しかし後者の方法は一朝一夕にはいかない。そこでまずは前者の方法について話すことにする』



瞑想とは、自身の深層心理を探求し、心を静め、集中力を高めるこ

とである。そして瞑想を行うことで得られる効果は主に二つある。

一つは肉体のリラックス。これにより全身の筋肉の緊張がほぐれ、血行が促進される。それにより脳の働きが活性化され、思考がまとまりやすくなる。また、体の内部からエネルギーを引き出しやすくする効果がある。

そしてもう一つは内なる自分との対話である。無意識、魂、もう一人の僕。呼び名は様々あるが、その正体は、その人の潜在能力であると言われている。この能力を目覚めさせることにより、人の持つ本来持つ力が解放されることになる。この力は常人を遥かに凌駕するものなので、その使い方次第では鬼を倒すことができるだろう。またこの力を正しく認識することでヨガテレポートを自在に扱うことができるようになる。

ただし、この力を悪用しようとする者が現れる可能性もある。その点には注意しておく必要がある。

ちなみにヨガの呼吸を習得するには、この瞑想が必要不可欠となる。

さあ、炭治郎よ。この二つをマスターするのだ。

追伸：この部屋は好きに使つてもらつて構わない。それとこれを渡

しておこう。私が昔使っていた日輪刀だ。手入れはしてあるので、間題なく使えるはずだ。

ダルシムより

アラビア語の書道

そう呟くと、俺は鞘から抜いてみた。美しい刃紋が朝日を反射し、思わず見惚れてしまうほど綺麗だつた。

「よし！やるぞ！」

こうして俺の瞑想と、より極まつたヨガの呼吸法の特訓が始まつた。瞑想はとにかく回数を重ねることでしか上達しない。

を練習することにした。

それから半年、俺は毎日欠かさず訓練を続けた結果、遂に瞬間移動が使えるようになつた。

「うそ、裏事だ。

突然現れたダルシムさんに俺は驚いてし
見事た よく頑張ったな 岚治郎】

「いつの間に帰つてきてたんですか!?」

役に立つぞ」

「はい！これで戦術の幅が広がりました」

うむ 精進を続けるといい

六
七

「どうしてそろそろ教えてくれてもよしですか？何故俺がここに呼ばれたのか」

「ああ、そうだつたな。お前にこれを渡そう、『鬼殺隊最終選抜の案内』だ」

「、」れは?

「藤襲山で行われる試験のことだが、お前にはこれに挑んで欲しいと

思っている

「俺が……ですか？」

「お前の妹に掛けた封印はいつまで持つかは分からぬ。もうお前は立派なヨガの呼吸の使い手だ。鬼殺隊に加わり鬼舞辻無惨を討つのだ」

「でも俺なんかが……」

「お前は自分が思っている以上に素晴らしい人間なのだ。自信を持て！」

「……わかりました」

「うむ、では明日に出発するといい」

「明日？」

「そうだ、今日はゆっくり休め」

「わかりました」

こうして俺は翌日早朝、ダルシムさんの家を出発し、藤襲山に向かつた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

「おお……すごいな」

俺は目の前に広がる光景に圧倒されていた。季節は春だというのに辺り一面に藤の花が咲き乱れており、まるで幻想的な光景を作り出していた。

俺は暫らくその光景に見惚れていたが、いつまでもそうしているわけにもいかないので、気を取り直して会場へと向かつた。

途中、俺と同じように集められた人たちが沢山いたが、皆一様に落ち着かない様子だった。

それも当然といえば当然の話であり、彼らはこれから命懸けの七日間を過ごすことになるのだ。緊張するのは無理もない話だった。

俺は集中するように息を吐き軽く瞑想をすると、目を開けた。そして歩き出す。

「大丈夫だ。きっと上手くいく」

自分に言い聞かせるように呟く。

俺はそのまま歩いていき、やがて会場に着いた。そこには既に数十

人ほどの人がおり、俺は空いている席を探し、そこに腰かけた。

周りを見渡すと、俺と同じような年恰好の若者が多かつた。

恐らく俺と似たような境遇の子たちが集まっているのかな？

よく集まってくれた。私の名前は彦屋朝霧吉といふ。」

には優秀な子供たちが数多く集まつたことと思う。私たちは君

場にある。そのことを忘れないでほしい」

「ではこれより、最終選別を開始する。生き抜くために全力を尽くして
くれ」「ううと産屋敷と名乗つた男は再び口を開く

その言葉を合図に、最初の試練が始まる。

A vertical column of 15 alternating black and white triangles pointing upwards. The sequence starts with a black triangle at the top, followed by a white triangle, then a black triangle, and so on, ending with a black triangle at the bottom.

鬼のいる山の中で七日間生き延ひること、それが最終選別の内容だつた。その為に参加者たちは各自で身を隠したり、罠を仕掛けたりする。

そして夜になると一斉に行動を開始した。

「見つけたぞオ!! ガキイ!!」

卷之二

目の前に現れた異形の存在に俺は恐怖を覚える。

の状態で最善の集中をすることが必要だ。

「ふう……」
俺はゆっくりと深呼吸をする
そして俺は精神統一を始めた

呼吸を整え、意識を内側へと向けていく。そしてその時が来た。

「ヨガの呼吸、壹の型『ヨガ・ズーム』！」

日輪刀をもつたまま突き出した拳は、鬼の間合いの外から鬼を殴り

飛ばした。手足の伸縮はヨガの呼吸の基本だ。

「ぐわああああああ!!」

鬼は悲鳴を上げながら吹き飛んでいった。

好機！すかさず俺は鬼の首を斬つた。

「やつた……！」

初めての戦闘での勝利。俺は喜びを噛み締めた。

「ふう、何とかなつたな」

俺は安堵の溜息を漏らした。

「しかしこまだ油断はできないな」

先程倒した鬼以外にも気配を感じる。他にも多くの鬼がいるようだ。

「取り敢えず一旦隠れよう」

そう思いその場を離れようとした時、背後から声をかけられた。

「おい、そこのお前！何者だ？なぜ一人で戦つていた？」

振り向くと、そこには狐面を被った少年がいた。その表情は伺えないが、どうやら俺のことを怪しんでいるらしい。

「俺はただの通りすがりだよ。それより君は誰なんだ？」

そう尋ねると、彼は答えた。

「俺は鎧兎。鬼殺隊の剣士を目指してここに来た」

「俺は竈門炭治郎。同じく剣士を目指しているんだ」

「そうか、よろしく頼む」

「こちらこそ」

「ところでさつきの技は何だ？見たことのない呼吸だつたが

「ああ、あれはヨガの呼吸といつて、秘伝の呼吸法なんだ」

「ヨガだと？聞いたことがないな」

「ダルシムさん……師匠があまり弟子を取らない人でね、だから知らないのかもしねれない」

「なるほど」



「それでも驚いたな。まさかあの数を相手に圧勝してしまうとは」

あれから何度も鬼たちと遭遇し、その度に幾分かの余裕を残して勝利することが出来た。

「まあなんとか勝ててよかつたよ。ところで鎧兎はどうしてここに？」

「実は鱗滝さんのところに弟子入りしていたのだが、一年前に死んでしまったので、今は自分で修行をしている」

「そうなのか……それは残念だつたな」

「いや、気にすることはない。それに俺はここで更なる高みを目指すつもりだ」

「じゃあまたどこかで会うこともあるかもな」

「そうだな」

「よし、俺はそろそろ行くよ」

「わかった、お互い頑張ろう」

「ああ」

俺は鎧兎に別れを告げると、再び鬼退治に繰り出した。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

それから俺は鬼を倒しつつ下山していった。

「よし、あと少しだ」

そして麓に辿り着いた瞬間、俺の体に衝撃が走った。

「ッ！」

突然のことだつたので俺は反応することができなかつた。

「よく来たなあ、俺の可愛いお人形さんよお」

鬼だ。それもかなり強い鬼だ。今まで出会つた鬼の中でも群を抜いていた。その圧倒的な存在感に、俺は思わず気圧されてしまう。

「へつ、ビビッてんのか？安心しろよ、すぐに楽にしてやるからな」

鬼は鋭い爪を振りかざす。俺は咄嗟に避けようとするが、体が動かない。まずい、このままでは殺られる！ダルシムさんの教えを思い出すんだ！逸る気持ち抑え、速やか呼吸を整えると共に、俺は技を繰り出した。

「ヨガの呼吸、式の型！ヨガ・ファイア！」

特殊なヨガの呼吸法により高濃度に圧縮された酸素は瞬く間に高

温の火炎弾と化し、鬼に向かつて発射される。

「な、なにいいい!!!」

鬼は回避しようとするが間に合わず、その身に炎を受けた。

「うせやああ！ 热い！ 热い！ 焼けちまう！ 贸けてくれええ！」

断末魔を上げる鬼
俺はどぬを束すべく間合ひを詰める

「三太の呼吸 参の型！」

今度は両手両足を限界まで伸ばし、関節を自在に外して高速回転しながら敵を突進し、敵の体を切り刻む技である。

「ヨガ・ミキサリ！」

「うう(う)おおおお」

回転する度に敵はバラバラになっていく。

「これで終わりだ!!」

俺は勢いよく跳躍し、上空で身体を捻ると一気に敵を地面に叩き

「うげああああああああ!!

ドゴオオオン!!! 淹まじい音と共に地面が陥没する。

そして遂に鬼は塵となつて消えていった。

「はあ……はあ……勝つた……のか」

俺はその場に座り込む。

「俺が……鬼を倒した……」

こうして俺は鬼との戦いに勝利した。

七日間の生き残りかけた最終選別を

は、ダルシムさんと紗恵さんに報告をした。

ダレン・チャーチルの話の一端のいざな。

「本当に……無事で良かった……」

泣きながら抱きしめてくる紗恵さんを見て、自分がどれほど心配を

かけたかを思い知つた。

「すみませんでした……俺のせいで色々と迷惑をかけて……」

「謝る必要なんてありません。あなたがこうして帰つてきてくれるだ

けで私は嬉しいのですから……おかげりなさい、炭治郎くん」

「はい！」

A vertical sequence of 15 alternating black and white triangles pointing downwards. The pattern starts with a black triangle at the top and ends with a black triangle at the bottom.

後日、俺は日輪刀を作るための鋼を選んだ。

「これが日輪刀の材料になるんですね」

そう呟くと、隣にいた刀鋸治の男が答

お前にはどんな色が似合うかな」

「タルシムせんの王カ・アレイムみたいな赤かいいです」

「ほん」中々良い趣向をし

アリカとハーラン

「おお、
赤い
……」

俺の選んだ色は赤色だつた。

用意は整つた。こうして俺の鬼殺隊での任務が幕を開ける事と

鬼滅の刃 炭治郎立志編ぐらいその3

「炭治郎、毛殺隊がマルハーゲ帝国の尖兵としてハジケリストと戦うために、様々な呼吸法と型を用いていることは知っているな」

「はい、鱗滻さん、鬼と戦うため……え？ マルハーゲ帝国??」

「お前には私が使っていたのバビロン神拳を教える。私の技を全て叩き込んでやるから覚悟しなさい」

「え？ 呼吸じやなくてバビロン神拳???え？」

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

バビロン神拳とは古代バビロニアから伝わった格闘技で、今で言うマーシャルアーツに近いものである。だが、この武術は人を相手にするものではなく、竜や巨人といった架空の敵を想定して作られたものである。

バビロン神拳を極めることで巨大な便器を召喚するなど様々な超常めいた技を使えるようになるが、その威力に肉体の方が耐えきれず、習得者は短命であるという欠点があつた。

そのため後継者不足に陥り、現在伝わる技術のほとんどは失伝していると言つていいだろう。鱗滻左近次もバビロン神拳の継承者であり、彼の使う型は鱗滻流と呼ばれるものであつた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

「……というわけだ炭治郎。ハジケリストを滅ぶため、私と共に修行しようではないか」

「何言つてるんですか！俺は人間ですか！」

「…………」

鱗滻は悲しげな顔で炭治郎を見た。そしておもむろに腕を組むとウンコ座りになつた。

「うわあああああ!! そんな目で見ないで下さいー！」

鱗滻に弟子入りして一年が経過しようとしていた頃のことである。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

「そもそも毛殺隊ってなんですか？ 鬼殺隊じゃなくて？」

それにマルハーゲ帝国の尖兵ってどういうことなんですか!?

「落ち着け炭治郎。ちゃんと説明してやるから。まず、我々の組織は『毛殺隊』という名ではない。正式名称は『真・毛殺隊』だ。眞の毛殺しという意味が込められているのだ。ちなみに隊員の数は千を超えるぞ」

「せ、千人……?」

鱗滻は炭治郎の反応を見て満足そうに微笑んだ。

「毛殺隊は日本中に存在するハジケリストたちを狩るための組織なのだ。鬼ではなくハジケリストを狙う理由は奴らは神拳でしか倒せないからだ。そして私は毛殺隊の最高幹部の一人、『十二柱将』の一人である『黒龍王（こくりゆうおう）』の称号を持つ者だ」

「ええ……」

あまりの話の規模の大きさに炭治郎はドン引きした。

「まあ毛殺隊については追々教えていくとして、問題は我々にとつて最も恐ろしい敵の存在だ」

「一番強い人たちじゃないんですか?」

「違うな。最強の存在がいるとしたらそれは一人だけだ。そいつの名は……醉昆布ネキだ」

「すこんぶねきい?」

鱗滻の言葉を聞いてもピンとこなかつたのか、炭治郎は首を傾げた。

「お前はまだ会つたことがないはずだ。かつて我らの組織を壊滅させかけた女傑よ。あいつだけは本当にヤバい……。正直勝てる気がせん……」

鱗滻はかつての戦いを思い出したのかブルリと体を震わせた。

「??？」

炭治郎は鱗滻さんが何か変なクスリでもやつてるんじゃないかと思つたが口には出さなかつた。

「とにかく炭治郎、今はバビロン神拳を身につけることに集中しろ。お前は筋が良いからすぐに身につけられるだろう」

「えー?」

A vertical column of 15 alternating black and white downward-pointing triangles, arranged in a repeating pattern.

二年後。炭治郎は鱗滻さんからよくわからないバビロン神拳を習いつつ富岡さんからこつそり水の呼吸を教わる日々を送っていた。

あと鬼殺隊は毛殺隊とは別にちゃんと存在していました。やつたぜ。

「はい？ なんでしょう？」

ある日の修行終わりのこと。鱗滝がふと思い出したように尋ねた。

「お前の妹たが……あれは何をしているのだ?」

鯉滑の被綱の先には才刀を握る祇豆子の姿があった。彼女は目を閉じながら無心で剣を振り続けていた。その姿はまるで剣術の達人のようである。

しかし彼女が振るつてゐるのはただの木刀である。

卷之三

こうしたんだ、素振りなんかして

「お兄ちゃんが人として道を間違えそうだから撲殺できるくらい強く

なっておく必要があると思って

炭治郎は訳がわからず混乱した

戻ってきた。

卷之二十一

「ああ、そのことなら気にする必要はない。いつものことだからなー

(ええー) そうなんですか……?

更二三四三之聖體、一、一、二。

炭治郎は十五歳となり身長は二百センチを超え、体つきも大人のそ

れとなつていた。顔立ちや髪型も少し大人びている。

なにか育ちすぎたような気がするが、きっと氣のせいだ。

彼は毎日のように修行を続けていた。その内容は過酷を極めるもので、普通の人であれば三日ともたずに音を上げるものである。

にもかかわらず、炭治郎は弱音を吐くこともなく淡々と修行をこなしていった。鱗滻はそのことに驚きつつも感心していた。

(ここ)までとは……やはりこいつは毛殺隊に入るべきだ)

鱗滻は最終選別を受けるための面談を行うことにした。

「炭治郎、毛滅隊の試験を受けないか?」

「毛滅隊の試験ですか?」

「ああ。お前ほどの実力があれば問題ないだろう」

毛殺隊には基本的に十二歳から入隊することができるが、試験に合格しない限り正式な隊員にはならない決まりとなっている。

鱗滻は毛殺隊の中でもかなりの実力者であり、その彼に認められたということは大きな意味を持つことであつた。

「お断りします! 鬼殺隊に入ります!」

「なぜだ!?」

鱗滻は思わず叫んだ。まさか断れるなんて思つていなかつたからだ。

「俺は鬼殺隊に入つて人の役に立ちたいんです! それに鬼殺隊に入つた方が鬼舞辻を早く倒せるかもしれないじゃないですか!」

「鬼殺隊に入れば毛殺隊より危険な任務に就くことになるぞ!」

「大丈夫です! 俺は長男ですから!」

「何が大丈夫なんだ!?」

鱗滻は頭を抱えた。

「いいか炭治郎、毛殺隊に入らないとハジケリストたちと戦えないんだぞ!」

「ハジケリストとか訳わかりませんよ! そんな人たちと戦う必要ないです!」

「お前は毛殺隊を馬鹿にしているのか!」

「だつて毛殺隊つてマルハーゲ帝国の尖兵なんですよ! そんな危ない人たちと戦う理由がないですよ!」

「毛殺隊の目的は人類の毛根の破壊だぞ!?」

「ますますダメじゃないですか！人類滅亡の危機じゃないですか！毛殺隊なんて放つておいて鬼殺隊に入隊しますよ俺は！！」

「待て炭治郎!!」

「あのクソガキ…………！」

鱗滻は怒りに震えていた

「なあ、ここで死ぬがいい。毛殺隊の名のもとに、貴様を殺す」

「うつあう！ 来な、ご下さ、鱗滝やーん！ ハジア

うわああ!! 来ないで下さい鱈瀧さん!! ハシケないで下さい!!
長台郎は全刀美佳(ながだりょうはぜんとうみか)の名前。

「毛殺隊に歯向かう者には死あるのみだ。覚悟しろ」

こうして鰯滝左近次対寵門炭治郎の

「食うえ、バゾコノ伸拳奥義『更器の巻』！」

「やるしか無いのか……水の呼吸、拾ノ型『生々流転』！」

鯉滝は召喚した便器の窓から大量のうどんを吐き出した

アアアツ
!!!

鱗滝は凄まじい速度で突進すると、高速回転を始めた。鱗滝の体は竜巻の如く回転することにより空気との摩擦熱を発生させて高温になっていた。

は殺すべ……き……？』

鱗滝はそこで言葉を失つた。なぜなら彼の目の前には……全裸になつた炭治郎がいたからだ。

炭治郎はパンツを脱ぐと呼吸を整える。水の呼吸は肌面積が広いほど威力が上がるのだ。そして全身に力を込めると……

「必殺……『裸締め』ツ!!!」

「ヤアヤアヤアヤアヤア」

鱗滻は白目を剥いて泡を吹いた。炭治郎は鱗滻の頸動脈をガツチリとロックして絞め上げている。鱗滻の足が地面から離れ、宙吊り状態になつた。

「炭治郎……お前……ハつの間こそんな支を……」

鱗滝は意識を失いながらも炭治郎に問いかけた。

「鰯滝さんのおかけなんですよ、
鰯滝さんのおかけで俺は大切なこと
を学びました」

炭治郎は鱗滝に語りかけた。

「俺は今までずつと間違っていました。毛殺隊つてマルハーゲ帝国の尖兵じゃなくて俺たちの敵だつたんですね……。だからもう戦う理由はありません。鱗滝さん、安らかに眠つてください」

「そ……そ……あり……が……どう……？」

「鱗龜」の「鱗」は、今之江の字である。

そして炭治郎は鱗滝の頭を地面に

A vertical column of ten alternating black downward-pointing triangles and white upward-pointing triangles.

禰豆子が全裸炭治郎の頭を思いつきり木刀でぶん殴つた。

「痛、うそば、ハ爾豆子。鱗竜やうが庇つけるが?」

「違うよお兄ちゃん、鱗滝さんのことはどうでもいい。

???

水の呼吸はどこで全裸は基本だ。嵐治郎は禪豆子の言っていることがよく分からなかつた。常識は置いてきた。あいつはこの戦いにはついてこられない。

「お兄ちゃん、今すぐ服を着るか腹を斬るか私に撲殺されるか選んで」

炭治郎は禰豆子の言つていることが理解できなかつた。人は生ま
れてきた時はみな全裸だ。それを恥じる意味などない。

「わかつた。お兄ちゃん撲殺したあと腹を斬らせて服を着せるね」「どうしてそうなるんだ!?俺はお前の兄だろう!?もつと優しくしてくれても良くなきか!?」

「問答無用！」

このあと炭治郎が気絶になるまで木刀で禰豆子に殴られ続けた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

その後禰豆子はその胆力を認められ鬼殺隊の剣士として大活躍し鬼舞辻無惨討伐に寄与することになるが、それはまた別のお話。

火垂るの墓 「節子のそれドロップやない、ハジキや」

「節子、それドロップやない、ハジキや！」

「兄ちゃん、ウチな。兄ちゃんみたいな頼りない男嫌いや」

節子はそう言つてハジキ——小さな女の子が持つには大きな拳銃を俺に向けた。

「ちよつ！ 待てや！ 何でいきなり銃を向けんねん!?」

俺は慌てて両手を上げながら後ずさる。

「だつて……兄ちゃんは『お父ちゃん』に酷い事言つたんやろ？ だから兄ちゃんの事は殺してええんやつて『お父ちゃん』が言うたもん」「いやいや、それはあのオツサンに言うた事で、俺は関係あらへんわ？」

「そんな事あらへん！『お父ちゃん』泣いてたんやからね！ 兄ちゃんのせいで泣いてたんやからね！」

節子が涙目になりながら叫び、引き金を引く。

「死ねやあああ！」

ダアンッ!! という乾いた音が響くと同時に、弾が飛んでくる。

「なんや殺す氣かワレエ！」

間一髪、銃弾を避ける。

「ちいいつ！ 外してもうたやんけえ！」

再び節子の指が動き出す。

どうやらこの子は本気で撃つつもりらしい。俺は逃げようと走り出そうとしたが、その前に節子がまた発砲する。今度は足元に向かつて撃たれたので、転んでしまう。

すると節子が近寄つて来て銃口を頭に押し付けてくる。

「大人しくせえよ……今度こそ当てるさかいな……」

と、その時だつた。突然目の前にいたはずの節子の姿が見えなくなる。代わりに現れたのは黒いスーツ姿の男達だ。

「おいジヤリ。なんやこないなところで何かましとるんや？」

「ええどこ着たのおつちゃん。これが来ないだ言うとつたボンや」

「ほう。コイツかいな」

男たちの中で一番ガタイのいい男が近づいて来る。そして俺を見下ろすようにしゃがみ込むと、「お前さんが例の奴か」と言つた。

「このままドタマに鉛玉ぶちかましたつてもええが……おっちゃん、このボンしめてくれまへん?」

「嬢ちゃんの頼みなら仕方あらへんのう。ほれ立てやボン。しこたまさンドバッグにしてやらんかい」

男達は口々にそう言いながら笑い声を上げる。しかし、俺は立ち上がる事が出来ないまま呆然としていた。

(一体どういうことや?)

何が何だが分からぬ。どうしてこうなつたのか全く理解できない。

俺はただ節子に、妹に帰つてきて欲しいだけなのに……。それすらも叶わないというのか?

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

………… 結局俺はそのまま拉致されて、気がつけば薄暗い部屋の中に閉じ込められていた。

コンクリート打ちっぱなしの壁に囲まれた部屋は狭く、トイレやシャワー室があるだけで他には何も無い。ただ一つあるとすれば、天井近くに付いている換気扇ぐらいだろうか。

その換気扇からもれる空氣の音だけが、唯一音と呼べるものだった。

「あーあ。ホンマ、ついてへんかつたわ……」

独りごちる。当然返答など歸つてくるわけもないが。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

ドンドン! 部屋の外からだろうか? ドアを叩くような音がする。

「兄ちゃん悪い付いたか?」

「節子! はよここから出せ!」

「それは無理なお願いやで。兄ちゃんはそこで飢え死ぬまで暮らすんやからな」

「そんなアホなことあつて堪るかいな!」

「……兄ちゃん、これはな、ウチをひもじい目に合わせてくれた礼や。」

あん時、ウチ連れておばさん家出る言い出せへんかつたら、こんな目に遭わんでも済んだのになあ」

「そやつたらもうエエやんけ！ ワン精一杯やつたやろ！？？
何が悪いねん！」

「兄ちゃん何も分かつてへんわ……兄ちゃんのせいでウチ死にかけたらやで……『お父ちゃん』に拾つてもらえなかつたら死んでたんやからな……だから兄ちゃんにはここで苦しんで死んでもらうことにしてわ……兄ちゃんみたいな頼りない男は嫌いやつて言うたやろ？兄ちゃんの事は殺してええんやつて『お父ちゃん』が言うたもん」

「そんな理不尽な話があつてたまつかボケエ！」

俺は大声で叫ぶ。

するとドアの向こうから足音が聞こえてきて、「おい嬢ちゃん。そ
いつまだ生きてるみたいやけど大丈夫なんか?」と言う声が聞こえ
る。

おしゃべり

節子はそう言って笑うと、どこかへ行ってしまった。残された俺は、頭を抱えて座り込んだまま動けなくなつていた。

それからしばらく経つた頃だつた。

おーおー、こないになつてもうたか】

れる。

一痛つ！何すんじやワレエ！」

見上げるとそこには、先日会ったばかりの男が立っていた。

「アンタ確か……『お父ちゃん』とかいうヤツか？ なんや用でもあるんかい？」

や

「なんやワレエ！喧嘩壳つとるんかい！」

「別にそんなつもりはない。ただ単に事実を述べたまでや。それよりお前さん、えらい災難やのう。まさか妹に殺されるとは思わんかったやろうな」

「……せやな。ワシもここまで運がないと思つたことあらへんでやろうな」

……

「せやな。せやな。……せやけどな、『俺の妹に手え出したら承知せんぞ！』なんて啖呵切つた割りにあつさり殺されてるやんけ。そんな事でよう威張れたもんやのう。恥ずかしゆうて人様に顔向け出来ひんわな。ま、せめてもの情けや。最後は節子の代わりにワシの手で殺したるさかい感謝せえよ」

「……なんや、自分の娘になる子の手は汚させたくないって事か？ 随分とお優しい事やな。せやけど、それやつたらアンタの娘……節子はどないしてんねん？ あの子は手え出す気満々やないか。それに節子は自分より弱い奴には絶対負けへんつて豪語しとつたで？」

「それは節子の本心ぢやう。アソツはな、ただ寂しいだけや。誰かと一緒にいたいんや。まあそれも分からんくもない。この世の中はな、生きては行けへんし、行くところもあらへん。そういう人間ばかりや。せやから節子は自分が守つてやらなあかん思うとるんや。しかしながら、節子にとつて一番大事なんは強さや。強い者が正義や。それが例え父親であろうとな」

「ははは。そらまたえらく極端な考え方やな。なんやアンタ、まるで節子を洗脳してるみたいやな」

「かもしだへんな。せやけどワシが育てたおかげで節子はずーっと強くなつてるわ。今じやそこのチンピラやゴロツキ程度なら、素手でぶつ倒せるぐらい強おなつとる。まあそれでもまだ物足りなさそうにしとるんや。まあそれでも実の兄を手にかけさせるんわ可哀想やさかい、代わりにワシが始末つけてやる言うとんのや」「なんやその言い方やと、まるで節子が俺を殺したくてしようがなかつたように聞こえるんやが？」

「その通りや。節子がお前さんに懷いとつたのはホンマや。せやけどボン、お前やつつすいプライド持つとつたせいで、おばさんのとこ

から節子連れて逃げたやろ。おかげで幼い節子は飢えかけ死にかけやつたんや。それを俺らが見つけるまでずつとな。お前さんは節子の事を考えずに、ただの道具としか思つてなかつたやろ？ その事に腹立ててたんや。せやからお前さんが節子の為にしたことは無駄や。むしろ余計に傷つけただけや。ホンマはな、お前さんがもつと節子と向き合つてたら、こんなことにはならなかつたはずや」

「……」

「ま、ええ。もうすぐ死ぬ奴に説教垂れてもしやーない。せめてもの情けや、骨はおばさんとこ届けたるさかい安心しい」

「嫌や！ それだけは勘弁や！」

「往生際の悪い奴やなあ。ええ加減諦めろや。ほな早速始めるで」

「待つてくれ！ 頼むから殺さんといてや！」

「ふん。何を言おうと知らん。もう決めたことや」

そう言つて男は拳銃を数発頭に撃ち込む。

「——ツ！」

痛みは感じなかつたが、意識が遠のき目の前が真っ暗になる。
「ほな、さいなら」

機動戦士ガンダム「逆襲のシャア」『世界に満ちる輝きの煌めき』編

「たかが石ころひとつ、私とひかりちゃんとアムロさんの力で押し返してみせる！」

アクシズが遂に、地球の重力に引かれて落下し始めた。しかし、アムロの乗るレガンダム、そしてひかりと華恋の乗るキリンがアクシズを押し返そうと抵抗を試みた。

「止めてくれ！こんな事に付き合う必要はない！下がれッ、来るんじゃない！」

「わかります……」

キリンはアムロに同意するように咳く。

「アムロさんばっかりにいい格好はさせません！」

だが華恋に無視された。

そして、ひかりの言葉に呼応するかのように連邦、ネオ・ジオン関係なくモビルスーツがアクシズを止めようと集い始める。

「ギラドーガまで…!? 無理だ、皆下がれ！」

「地球が駄目になるかならないかなんだ！やつてみる価値ありますぜ」

「爆装している機体だつてある……駄目だ！摩擦熱とオーバーロードで自爆するだけだぞ！」

「わかります」

そんなアムロの静止も聞かず、次々と彼らはアクシズへと取り付き始める。しかし、それでもまだ足りない。徐々に、徐々にではあるが、確実にアクシズら地球に近づいていく。

「止まれええええええ！」

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

アムロとブライト艦長の声はもはや誰にも届かない。

「止めるんだ、今なら間に合うかもしないんだぞ!!」

「彼女達はまだ若いのよ？死ななきやいけない人間じやないわ！」

「……わかっています、でも信じましょう、ニュータイプの可能性と、舞台少女達の輝きを！」

「ああもう わかってたよ やってやるぜ！」

アクシズには核エンジンが搭載されており、その爆発力は凄まじく、また質量も大きく、コロニーレーザーですら破壊できなかつたものだ。それを止められるか、否か。

答えは

サイニフレーム それは人の思いを受け止める力を持つた素材であり、人の意思を伝える伝達物質でもあるという。

それなら、意図せざれば不可能となるのではないか。もしそうであれば、この事態を止めることも可能ではないだろうか。それは希望的観測であるのか、それとも現実逃避なのか。ただ一つだけ言えることは、あの巨大な隕石を前にしても諦めることなく、立ち向かうものがいるということだろう。

「はい」

アクシズが地球の引力によつていた。奇跡が起きることを祈つて。

敵味方関係なくアクシズを止めようと試み、そして幾つもの命が散っていく。

「もう十分だ！これ以上命を捨てることは無い！下がるんだ！」アムロは悲痛な叫びをあげる。

「アーリーで送りたる男じゃねえんだよ！」

たかもはや誰一人として聞く耳を持たない。ただ目の前の脣屍から地球を守る為に皆が意志をひとつにしていた。

が遅くなる。

アムロはその光景を見て驚愕する。

「これは……サイコフレーム？」

サイコミユ兵器特有の現象であつたからだ。つまりこの現象を起こしたもののはニユータイプということになる。

「まさか、シャアか!？」

だがそんなわけはない、奴は既に倒したのだ。だとしたら誰が……。

考えている暇はなかつた。再び加速を始めるアクシズに対し、レガンドムとキリンの出力を上げる。

「行くぞおおおお!!」

「うん、分かつたよアムロさん。行くよひかりちゃん!」

「はい！」

「わかります」

一機と一匹、三人の意思がアクシズを押し返そうとする。

「うおおおおおおお!!」

三人の意志が重なつた瞬間、レガンドムが虹色のオーラに包まれた。



「あれは……！」

サイコフレームによる共振効果か、あるいは何らかの奇跡によるものか。地球に落ちようとするアクシズの前に虹色に輝く光の巨人が現れた。

その姿を見た者全てが動きを止める。あまりにも神々しそうな姿に誰もが目を奪われた。

「なんだ……アレは……」

「神……さま……？」

その姿を見て誰かが言つた。だがその言葉を否定する者は誰もいない。それほどまでに圧倒的な存在なのだ。

「あの姿は一体……」

ブライト艦長も見たことの無いその存在に呆然としてしまう。

その瞬間だつた。

虹色の巨人の胸元が大きく開き、その中から2人の少女が出てく

る。純白の衣装に身を包んだ少女、間違いない、聖翔音楽学園99期生、神楽ひかりと愛城華恋だ！

彼女らは手に持っていたマイクを口に当てる、大きく息を吸い込
み、言ふ三三三。

「世界を」

「スマートライト」

二二七

瞬間 世界は暗いばかりの闇には満ち溢れか

卷之三

地球へと落下しようとしていたアクシスの軌道は大きく変えられていた。

「止まいた……」

一信しられなし

その場に居たものの全員がその光景を目の当たりにして驚くだけではなかつた。

「おい、アクシズの動きが変わつたぞ！」

「こっちに向かってきてるんじやねえか!?」

「軌道修正されてるぞ！ これなら逃げ切れる！」

「助かつたんだあ!!」

歓喜の声が聞こえてくる。先程まで絶望の淵に立たされていたというのにも関わらず、皆の顔には笑顔があつた。その様子を見てブライト艦長は思う。

ノルマニ

(二) わたしの希望の力

望がそこにはあつた。しかし、これで終わりではない。むしろここからが本番だ。

何故なら、この場にいる全員の想いはひとつになつてゐるのだから。

A vertical column of 15 alternating black and white downward-pointing triangle symbols, arranged in a repeating pattern.

舞台少女達が紡いだキラめきの結晶、そしてサイコフレームが繋いだ人々の思い。それら全ての力が合わさり、遂にアクシズは再び地球

に落ちることは無かつた。

しかし、安心するのはまだ早い。まだアクシズの破片が残っているのである。それらは地球に降り注ぎ、甚大な被害をもたらすだろう。そして、それは舞台少女達にとつても同じことである。

「まだです！破片の処理がまだ終わってません！」

ひかりの言葉通り、アクシズには無数の小型隕石が存在して、それらが地球上に着弾すればどの被害が出るか分からぬ。

そう言つてキリンはアクシズの波

「私達の舞台を守るために！」

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

その後、シャアの復活もあり一時は混乱に陥つたものの、連邦軍の活躍によりなんとか事なきを得ることができた。

たか 戦いか終わつたわけではなし アケシス

かつたと言えるだろう。

しかし、舞台少女達が、人々がその胸の内の輝きを失わな
たいつの日か、舞台少女達は巡り合うことができるはずだ。
いつか、また、あの煌めく舞台の上で――

『世界に満ちる輝きの煌めき』

鬼滅の刃 炭治郎立志編ぐらいその4

「炭治郎くん、鬼殺隊が鬼と戦うために、様々な呼吸法と型を用いていることは知っているね」

「はい、アンパンマンさん」

「君には頭をパンに変えて炭治郎パンマンになつてもらうよ」

「はい！よろしくおね……無理ですよ！」

「炭治郎パンマン、新しい顔よ！」

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

小麦の呼吸とは、アンパンマンなど顔小麦族が使う呼吸法のこと。小麦粉を練り込み、頭からかぶることで身体能力を上げるという荒技である。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

しかし俺はあえて、手づかみで粉を直接喉奥へと送り込んだ。俺が俺たちが小麦だ。

「うえつほげほつごぼう」

むせる俺を見て、アンパンマンさんも首を傾げるばかりであつた。炭治郎パンマンはこうして誕生したのだ。

まあでも、効果はあつたと思うんだよね。実際かなりパワーアップしたし。なにより、俺の肉体は今や完全にパン（概念）なのだ。なんなら自分で自分を殴つてみてもいいぞ？ ふふん、すごいだろう？ ちなみに、小麦粉によるドーピング効果は約半日しか持たないそうだ。

また、この方法では限界まで能力を上昇させることはできない。あくまで一時的措置に過ぎないのだ。

ではどうするかと言えば……答えはこれさ。

「うおおおおおつ！」

雄叫びを上げながら、刀を振るう。すると目の前の岩物が真つ二つ

になつた。やつたぜ。

そう、これこそが小麦粉の力の真骨頂。一時的にではあるが、身体機能を飛躍的に向上させることができるので。ただし欠点もある。それは、その能力を発揮すればするほど空腹感が増していくことだ。これはおそらく、人間の三大欲求の一つである食欲を刺激し、集中力を高めるためのものだろうと言われている。

だが、今はそんなことを考えている余裕はない。とにかく修行だ。強くなつて鬼舞辻無惨を倒すことだけを考えるんだ。

そうして一心不乱に鍛錬しているうちに夜が訪れた。

「そろそろ休もうか」

「はい！」

アンパンマンさんの一言を受け、俺は素直に従うこととした。食事の準備に取り掛かる。

と言つても、山菜を鍋に入れて煮るだけだ。あとは川魚を串焼きにするくらいかな。二人で並んで火を起こし、飯ごうに入ってきた米と水をぶち込んでいく。

「うまい」

思わず呟くほど美味かつた。

やはり一人で食べるより誰かと一緒に食べたほうが何倍も美味しいものだ。ましてそれがアンパンマンさんのような心の友であれば尚更である。

「僕の顔もお食べ」

「ありがとうございます！」

差し出されたそれを笑顔で受け取り頬張った。うん、おいしい！

「そういうえば炭治郎くん」

「はい？」

「君はどうしてそこまで頑張れるのかな？」

「え……」

問われて言葉に詰まる。

何故つて、そりやあ…………あれ？なんだつけ？……思い出せない。そもそも俺はなぜこんなにも必死になつているのか。

「よく考えてみたら不思議ですね。なんで俺、あんなに頑張つてるんでしよう？」

首をひねる俺の横顔を眺めつつ、アンパンマンさんが言つた。

「力こそパワーだよ、炭治郎くん。君の原動力はそれに違いない」

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

アンパンマンさんの言葉通りだつた。

俺は、強くなりたかったのだ。誰よりも強く、誰にも負けない強さが欲しかつたのだ。理由なんてそれだけで十分じやないか。

だつて、俺は長男だから。家族を守る責任があるから。

だから俺は戦うんだ。

「炭治郎くん、君には才能があるよ」

アンパンマンさんが微笑む。

ああ、本当に嬉しいなあ……。俺みたいな奴のことを才能あるって言つてくれる人がいるんだもの。

「もつと自信を持つていいんだよ。僕はいつも応援しているから」

「はい！」と大きな声で答える。

「ところで炭治郎くん、鬼殺隊最終選抜のことは知つてているかい？」

「はい、知つてますけど」

「そこに君を推薦しようと思つてているんだけど、どうかな？」

「本当ですか?！」

もちろんども、とアンパンマンさんは大きくうなづいた。

「僕を信じてくれ。必ず合格させてみせるとも」

はい!! そう返事をして、俺は飛び跳ねたくなつた。

嬉しくて仕方がなかつたのだ。これでようやく、俺は家族の仇を討つことができる。みんなの無念を晴らすことができる。

そうだ、きっとそうなるはずだ。

——だつて、俺たちには正義の心があるのだから。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

【大正コソコソ噂話】

炭治郎は人間を止めるこつを諦めて頭をパンに変えなかつタゾ!

まあそれならそれで別に構わないケドネ!

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

最終選抜前日、俺はついに小麦粉の呼吸を習得した。とはいえたれはあくまでも一時的措置に過ぎない。小麦粉の摂取量を増やしたりパン粉をまぶしたりすれば効果時間は延長されるが、あくまで一時的なものだ。

そして明日の早朝、俺たちは藤襲山へ向かうことになる。
つまり今日は最後の晚餐というわけだ。

「うまい！」

鍋いっぱいに作ったはずの雑炊は瞬く間に消えてしまった。
「やつぱりこの味は最高ですね、アンパンマンさん！」

「そうだね！」

「あの、ずっと気になつてたこと聞いてもいいですか？」

「なんだい？」

「アンパンマンさんって一体何者なんでしょう？ただのお人好しじゃないですよね？なんでそんなに強いんですか？どうしてそんな顔なんですか？どうやって戦っているんですか？他にも聞きたいことがあります。教えてください！」

「ふふふ、炭治郎くん……僕の正体は……」

「正体は……？」

ゞぐりと唾を飲み込む。

「秘密さ！」

「えー！ずるいですよ!!」

「でも、これだけは言えるよ」

そう前置きして、アンパンマンさんは語り始めた。

「どんなに辛いことがあっても、決して諦めてはいけない。希望を持ち続ける限り、人は絶対に挫けない」

「アンパンマンさん……！」

感動に打ち震える。

「アンパンマンさん……！俺、頑張ります！絶対に合格してみせます
！そしていつかまた会えたたら、そのときはまた一緒にご飯を食べま
しょう！」

「ああ、約束するよ」

そう言つてアンパンマンさんは笑つた。

「さよなら、僕の友達」

こうして、俺は旅立つた。

今度会うときは、立派な剣士となつて。

アンパンマンさんのような、強い男として。

そう決意して、俺は一步を踏み出した。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

鬼殺隊最終選抜。それは、年に1回行われる鬼狩りのための試験である。参加者は全員、この試験のために集められた鬼を殺すことを生業とする者たち。その数は数百名に及ぶ。

彼らは7日間かけて山の中に放たれた鬼を倒し続けなければならない。生き残るために。

鬼は藤の花を嫌うため、これを目印に逃げることも可能だ。しかし、それはあまりにも危険すぎるため、ほとんどの者がやらないだろう。

だが、それでも毎年何人かの人間が死ぬ。運良く生き残ったとしても、後遺症が残り鬼殺隊を辞めざるを得ない者もいる。

鬼殺隊の抱える闇は深い。

だが、そんな中でも人々は笑顔を忘れない。

なぜなら、彼らこそが本物のヒーローなのだから。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

「うわああああっ！助けてえええええッ！！」

悲鳴が上がる。それと同時に、血飛沫が舞つた。

「あ”あ”あ”

「ひいいいいつ」

鬼が暴れている。

「い、嫌だ、死にたくない、死にたくない……うぎやあああ！」

「ごめんなさい、許してください……あがつ」

「やめ、て……ください、お願ひしま……」

阿鼻叫喚の地獄絵図。

「うぐつ、うう……」

地面に倒れた少年がうめき声を上げる。

「あ”あ”、あ……」

彼は、もう助からないだろう。

だが、そんな彼を嘲笑うかのように鬼たちは群がり、その肉を食らう。

「痛い、痛いよおおおおッ」

「うあああ、俺の腕が、腕がアアツ」

「もう、ダメだ、もう終わりだ」

「あはははははははははつ」

「苦しい、息ができない、誰か……」

「誰か、誰か……」

「誰か、誰か……助けてええええつ」

絶望の声が響く。

「……助けてやる」

ぱつりと呟かれたその言葉に、鬼たちが一斉に振り向く。

「なんだお前？」

「邪魔すんな」

「殺されに来たのか？」

「いいぜ、相手してやんよ！」

口々に言い募る彼らに、静かに歩み寄る影があつた。

「小麦粉の呼吸・壹ノ型」

「おい待て、こいつまさか……！」

「小麦粉噴射」

次の瞬間、凄まじい勢いで白煙が噴き上がった。視界が奪われる。

「な、なんだこれ！」

「くそつ見えない！」

「目が、目が見えねえ！」

混乱に陥る鬼たち。

「小麦粉の呼吸・弐ノ型『アンパンチ』」

「ギヤアアアア！」

「グハツ」

「ウゲエエエツ」

次々と殴り飛ばされていく。

「小麦粉の呼吸・参ノ型『顔面スライディングキック』」

「ぶべばつ」

「あびやあああ」

「あべし」

さらに加速していく一方的な暴力。

「小麦粉の呼吸・肆ノ型『小麦粉フラッシュ』」

「あぢゅいいいい！」

「おげろろろろろろろろ」

太陽の光を受けて育った小麦には陽光の力が宿る。その小麦の力を借りた小麦の呼吸もまた、太陽を弱点とする鬼にとつては天敵となるのだ。

そうして数秒後、立っている鬼は一人もいなくなつた。

「すごい……」

誰かの咳きを皮切りに、辺りに歎声が巻き起こつた。

「うおおお！やつたぞ！あいつ一人で全部倒しちまつた！」

「俺初めて見た！こんな戦い方があるなんて知らなかつた！」

「ありがとう！本当にありがとう！」

「かっこいい！憧れちゃうなー！」

称賛の言葉が降り注ぐ。

だが、そんな周囲の反応とは裏腹に、当の本人は浮かない顔をしていた。

「……足りない」

足りないのだ。こんなものでは到底、満足できない。

俺はもつと強くならないといけないんだ。

俺は長男だから。家族を守る責任があるから。

だから俺は戦うんだ。

——だつて、俺たちには正義の心があるのだから。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

【大正コソコソ噂話】

その後、炭治郎が鼻から小麦を補充する姿はクスリをキメているみたいに見えたので、他の参加者たちはドン引きしたゾ！

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

最終選抜最終日。俺はどうとう七日目を迎えることができた。途中何度も危ない場面はあったが、どうにか切り抜けることができた。これもひとえにアンパンマンさんの修行のおかげだ。アンパンマンさんがいなければ、きっと俺は初日で死んでいただろう。それほどまでに過酷な環境だった。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

最終選抜最終日の朝、昇る朝日が生き残った参加者たちを照らす。誰もが満身創痍といった様子だったが、誰の目にも確かな希望の色が灯っていた。

——生きて帰ることができるかもしれないという希望が。

そんな彼らを遠巻きに見つめながら、俺はぼんやりと考えていた。

(これからどうしよう)

俺は強くなることしか考えていないかったのだ。だから、その後のことはまるで考えてなかつた。鬼殺隊に入隊したらまず何をしよう？ 何ができるだろう？ 全く思いつかないや。

「ねえ君」

「はい？」

声を掛けられて振り返る。そこには一人の少年がいた。

「君はクスリをキメながら鬼を殴つてた人だよね？」と言われて、ようやく思い出した。

「あ、はい、俺で……違いますクスリじゃないです、小麦の呼吸ついうのを使つてました」

「小麦……ああ、阿片か何かの隠語だね、分かつた分かつた」

「いえ、そういう意味じやなくてですね」

「分かつてるよ、もう取り返しのつかないほど中毒になつてるんでしょ」

「全然わかつてくれてませんね!?」

「大丈夫、僕には分かるよ。僕は医者の息子なんだ。君の体からはひどい臭いがする。相当ヤバいね。薬漬けだよ。でも、そんな状態になつてもまだ鬼に立ち向かっていくその姿勢、とても立派だと思うよ。尊敬に値する。だけどね、一つだけ言わせてもらえるかな」

そう言つて、彼は言つた。

「鬼は人を喰らう化け物だ。クスリに頼つて現実から逃避したいのも分かる、けど戦わなきや現実と向き合えないんだよ。それに、そんなことをしても死んだ人は帰つて来ない」

「……」

「だからさ、クスリを止めよう！まだ取り返しがつくよ」

「なんで麻薬中毒患者みたいな扱いにされてるんですか?!」

「さあ、みんな！今日中に下山すれば合格だ！気合い入れて行こう！」

「無視しないでください！」

「うおおおおっ」

「頑張ろう！」

「あああああああつ」

「そうして彼らは走り去つていった。

「なんなんだあの人たち……」

俺の困惑を置き去りにして。

「まあいいか」

そう呟いて、俺はまた歩き出した。

鬼滅の刃 炭治郎立志編ぐらいその5

「ウホウホ、ウホホ」

「はい、ゴリラ滝さん、鬼殺隊が様々な呼吸法で鬼と戦っていることは
知っています」

「え!? 本当にゴリラの呼吸を教えて貰えるんですか!!」

た。 こうして 岩治良に二リテ音から二リテの呴吸を学ふことになつた。

A vertical column of 15 alternating triangle symbols pointing up and down.

『リテの呼吸』は——『リテか木に登り枝の上でう〇こ座りをしてバナナを食べている時に考えた呼吸法である。ゴリラの呼吸には四つの型があり、それぞれ壹ノ型『ドリアン』、弐ノ型『ドラミング』、参ノ型『ドラミング・スペシャル』、終ノ型『ドラミング・アルティメット』と呼ばれる。

この呼吸法を会得するにはまずバナナを用意し、食べ終わつたら服を脱いで全裸になり、そのまま樹上へと登る。その後はバナナを片手に持ちながらドラミングを行い自然と一体となることで身につくと言ふ。

ちなみにドラミングとは本来太鼓の演奏技術のことだが、ゴリラにとつては自分の胸を強く叩く行為のことを指す。またゴリラのドラミングには意味があり、それはオスが自分の縄張りを主張する為やメスに対して求愛行動などで使われる。

その威力は凄まじく 岩山であろうとも碎け散る程
ゴリラになろう!!! そして世界平和の為に戦うのだ!!!

(ちなみにヨリラ滝さんの師匠はこの呼吸法を習得できなかつたらし
い)

A vertical column of 15 alternating black and white triangles pointing downwards.

一年後 炭治郎は無事エリテの呼吸を身に着けた。

しかし、彼は二通りではなく人間なので当然習得できたのは二通りの呼吸、参ノ形までだつた。それでも常人ではありえない程の身体能

力を得ることができたのだが……。

「やつぱり俺は人間だからなあ」

残念なことに彼の肉体強度は人間のままだつた。炭治郎はその事実に落ち込むものの、そんな彼を励ますようにゴリラ滝さんは彼の頭を優しく撫でてくれた。

「ウホホ」

炭治郎にとつてゴリラ滝さんは初めて出来た友人であり、心優しいお爺ちゃんのような存在になつていた。そんな彼が困つているなら助けになりたいと思うのは当たり前のことだった。

その為にも強くならないとなと思つたその時……。

「ウホッ！」

「どうしたんですか？ ゴリラ滝さん？」

突然何かを思い出したかのように声を上げたゴリラ滝さんに炭治郎は何事なのか尋ねると、ゴリラ滝さんは自分の胸を叩き始めた。

「えつと……何しているんですか？」

「ウホウホ、ウツホホ」

「……あ！ 僕が今度こそゴリラになると思つて心配してくれたんですね！」

「ウホホ……」

ゴリラ滝さんは照れくさそうに頬を搔いた後、もう一度胸を叩いて見せた。その様子はとても嬉しそうなものだった。

「大丈夫ですよ！ 僕はもうゴリラになれませんけど、ゴリラの気持ちはよく分かりましたから！ それに、今はもつと強くなりたいって思いの方が強いです!!」

「ウホホ♪」

ゴリラ滝さんは満面の笑みを浮かべると、炭治郎のことを抱きしめてきた。まるで我が子のように、大事な孫のように、力強く抱きしめた。

炭治郎は最初驚いた表情をしていたが、すぐに笑顔になると自分もゴリラ滝さんの背中に手を伸ばして抱き返した。二人はしばらくの間そうしていたが、やがて離れると同時にお互いの顔を見て笑い合つた。

た。

「じゃあ早速行きましょうか！善逸たちを助けに!!」

「ウホオーッ!!!」

A vertical sequence of 15 alternating black and white downward-pointing triangles, starting with a white triangle at the top.

その頃 浅草の街中では……

いいですか伊之助くん 私たちは鬼殺隊の隊員として恥ずかしくない行動をしなければなりません。よつて私たちの行動一つで多くの命を救うことができるのです。分かつたら返事をしなさい」

「うるせえぞババア!! お前は俺の母親か!?」

「何を言っているの？」

「誰が見て毛子供にしか見えねえよ!!」

猫の被り物をした少年こと嘴平伊之助はいつも通りのやり取りをしていました。この二人のやりとりは既に日常茶飯事で誰も気にすること無かつた。

何故なら彼らは鬼殺隊の中で一番の新入りだからだ。新入りの彼らがなぜここにいるのかと言うと、今回の任務内容が関係していた。

なんでも最近になつ爆破騒ぎが続出しているらしく、その原因を調査する為に鬼殺隊が派遣されることになつたのだ。その調査員に選ばれたのは彼ら二人を含めた数名だつた。

「ど、どこに行つたんだろうな？」

「おそらくですか 夜遊びして朝帰りはなつたんしやあいませんかね？」まあ、私には関係のないことですが」

!!

「何を馬鹿なことを言つてるのですか？こんな昼間つから遊ぶわけがないでしよう？もし仮に遊んでいたとしても、それは親御さんの責任であつて我々には関係ないことです」

「いや、それは確かにそうだけれどもさ……なんかこう……言い方があるんじゃないかな？」

「はあ、本当に面倒臭いガキですね」

「あんだとおおおおつ!!」

「はい、静かにしてください。周りの迷惑を考えろクソネコ」

「俺はネコじやない!!人間様だ!!」

「はい、知っています。ただの人間のくそ野郎ですよね?」

「全然違うわボケエエエッ!!大体なああああっ!!お前のその猫の皮を剥ぎ取つてやろうか!?」

「はああ? 一体全体何を言い出すのでしょうかこの阿保面は。そんなことが出来ると思つてているのですか? 出来もしないことを言うのは止めてもらえますか?」

「あああん!!言つたなこの糞餓鬼いいつ!!よし、決めたぜ!!おい、ちよつとこつち来い!!」

「はあ……全く、仕方のない奴ですね。良い年こいて喧嘩を売るなんて……そんなどからいつまで経つても山しか行く場所が無いんですねよ」

「お前たちいい加減にしないか!」

調査隊を引率する無惨様は怒りの声を上げると、二人はビクツと肩を震わせて動きを止めた。そして同時に正座すると背筋を伸ばしたまま動かなくなつた。

その姿はまるでロボットのようだつた。

「あの……無惨さま、どうかお許しください」

「お願ひします。俺は悪くないんです」

「…………」

必死に謝る彼らを冷めた目で見つめる無惨様。彼は大きくため息を吐いた後、口を開いた。

「貴様らは鬼殺隊の恥さらしだ……一度とこのようなことがないようになります。次は容赦せんぞ」

「は、はい!」

「それと……今回は特別に見逃すが、次はないからな」

「は、はい!!」

「ではさつさと仕事に戻れ」

「は、はい！失礼しましたあああーっ！！！」



「ゴリラ滝さん、善逸たちは何処に居ると思いますか？」

ウホオ

炭治郎の言葉にコリテ滝さんは首を傾げた。実は先程から炭治郎は匂いを頼りに探しているのだが、一向に見つからなかった。

それどころか、人が多すぎて匂いを嗅ぐことが出来ない状況でもあつた。

「フハフハ、一
とシシヨシシガ、このまでは日が暮れてしまひます」

「え？ なんで

「ウホオオオオツ」

「『俺は鼻が良いんだ。任

よろしくお願ひします」

ゴリラ竜きんば碓

ゴリラ滝さんは雄叫びを上げながら走り出した。その速度は凄まじく、瞬く間に人々を次々と撥ね飛ばしながら人混みの中に消えていった。

「……流石はゴリラ滝さんだ」

炭治郎は感心したように咳いた後、自分もまたエリテ瀧さんその後を追つて走り出した。

凌駕しており、彼はまるで風のようになつていた

「おかしいな？ 一体どこにいるんだ？」

「え、なんで俺を置いて行つたのかですつて？それは俺には分からないですよ」

「ウホホ

「え、俺だけじや不安？ 酷いなゴリラ滝さんは。俺はそこまで頼りなく見えるんですか？」

「ウホホオオオオツ!!」

「あ、
はい、
ごめんなさい。余計な事を言つてしましました」

エリテ瀧さんに叱られた炭治郎は再び捜索を開始した。

だが、やはり彼らを見つけることは出来ず、次第に焦りを感じ始めた。

一方その頃、善逸たちは無惨さんの奢りでうどんに舌鼓を打つてい
る。

「うん、美味しい！やつぱりうどんは最高よね!!」

「俺も初めて食へたけれど、これは病みつきにならんやうだ」

「はあ？ あんなの邪道でしょ？ うどんこそが至高の一品でしかない

卷之三

「「むうーつ！」」

二人は睨み合い、そのまましばらく沈黙が続いた。

「ウホウホ」

「ゞゝ」にも善逸たちはいませんね……」

卷之二

ね、急ぎましよう!!

「ウホウホウホウホウ!!」

「ウホウホウホウホウ!!」

「ええええええ、ええ、そうですよ。俺は嘘が下手ですから隠し事は出

「ウホホウ!!

「……はい。俺がゴリラの呼吸を習得しきれていないって話です
……」

「ウホホウ」

「はい、そうなんです。ゴリラの気持ちが分かるようになつたけど、俺
はゴリラにはなれませんでした」

「ウホホ」

「え、でも俺の身体能力は飛躍的に上がつたって？ありがとうございます！
ます！それは嬉しいです！！」

「ウホホ」

「あ、はい。分かつてます……もう時間が無いことは……きっと、今
日が最後のチャンスになるでしょう」

「ウホオー」

「はい、分かりました！行きましょう、善逸たちの所へ!!」

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

その頃、浅草の街中にある建物の屋根の上に一人の男が立つてい
た。男は手にしていた日輪刀を抜くと、ゆっくりと構えると気合一
閃。見事藁人形を真っ二つに斬り裂いた。

観衆もやんやんやの大喝采。見事な腕前に拍手が巻き起こつた。
男の名は炎柱・煉獄杏寿郎。鬼殺隊の中でも屈指の実力者である。
そんな彼の隣には相方の猗窩座の姿が。2人は手拍子の後ショート
コントを始める。

「はい、どーも。ここにちは。私の名前は炎柱の煉獄でーす」

「猗窩座でーす」

「2人合わせて、”炎の鬼狩りコンビ”です」

「どうもー」

「ところで、最近浅草の名物と言えばなんでしょうか？」

「ん？なんだろう？食べ物かな？」

「はい、正解です。というわけで、今日のネタはこちら」

「ドドンッ！」

「ズバリ、『浅草グルメ巡り』♪!!」

「イエーイ!!」

2人がノリ良く決めポーズを取つた瞬間、どこからか爆発音が聞こえてきた。

A vertical column of 15 alternating black and white downward-pointing triangles, starting with a white triangle at the top.

「!? ゴリラ滝さん!!」

「ウホホホツ！」

突然の爆音を聞き取った二人は慌てて音の鳴る方へと向かって
いた。するとそこには――

「ウホウホーツ!!

—なんだあれは!?

炭治郎の目の前に広がっていた光景。それは地獄絵図のような物だつた。建物が崩壊し、地面はひび割れ、逃げ惑う人々があちこちにいた。

そして彼の悲痛な叫び声と幽冥の声が響き渡っていく

炭治郎は咄嗟に叫ぶと、ゴリラ滝さんは動きを止めて振り返った。音を聞いて駆けつけてきたのか、遠くから無惨さんと善逸達、そして煉獄さんと猗窩座さんのコンビの姿があつた。

炭治郎！無事だつたか！！

「ウホオオオツ!!」

ゴリラ滝は野生の眼光を宿らせ、周囲を威嚇し始めた。

「……ゴリラ滝さん、もしかして鬼が近くにいるんですか？」

「え、『間違いない!!』？……あの、本当に鬼が居るみたいで

炭治郎の言葉に全員が警戒態勢に入つた。すると、何処からか笑い

「フフツ、アハハツ、アーツハツハツハツ!!まさかこんな簡単に引つかかるなんて、馬鹿な連中ねえ!」

現れたのは黒い髪を肩まで伸ばした少女だった。彼女は愉快げに笑うと、無惨さんの方を見た。

「あら、あなたは無惨さんかしら？ 初めまして、私は上弦ノ陸。堕姫つ

ていうの。以後お見知りおきを」

「貴様……鬼だな。しかも十二鬼月だな」

「ご名答！よく分かつたわね」

「ふざけるな!!お前は俺たちの仲間に何をした!!」

「仲間？ああ、あいつらのことね。別に何もしてないわよ。ちょっと眠つてもらつただけ。最新のアロマテラピーで身も心もスッキリです」

「アロマテラピーだと？お幾らからですか？」

「ええ……それが謎の爆発でうちの店舗が吹き飛んでしまつて……申し訳ないのですが……」

どうやら墮姫の名乗つた鬼は大仰な登場の割に爆発とは無関係らしい。炭治郎は呆れたようになめ息を吐いた。

「墮姫さん、何か爆発について知つていることは無いですか？」

「ええ、ありますよ。教えて欲しいですか？」

「ええ、是非とも」

「実はあの爆発の前に、うちの店の前に怪しげな男が立つてゐるのを見かけたんです」

「怪しい男？」

「ええ、全身黒ずくめの格好で……顔は見えなかつたけど背が高くて、なんかこう……不気味で不気味な雰囲気の男でした」「なにそれ怖い」

「それで、その男は一体何者なんだい？」

「さあ、分かりません。ただ、その男からはとんでもない臭いが漂つてきていました」

「臭かつたのかよ」

「はい、凄く」

臭い男。どうやらそれが一連の騒ぎの犯人で間違いなさそうだ。

炭治郎は静かに怒りを燃やすと、善逸たちを見て言つた。

「善逸、伊之助、禰豆子。ここは俺に任せてくれないか？」

「え？」

「ウホウホ？」

「ゴリラ滝さん、一緒に戦ってくれますか？」

「ウホホオオオッ!!」

ゴリラ滝さんは任せろと言う様に胸を叩き、鼻の穴を広げた。

炭治郎は頬もしいとばかりに笑みを浮かべると、無惨さんに向かって叫んだ。

「無惨さん、皆さんを連れて安全な場所に避難していくください!!」「だが……」

「大丈夫です。すぐに終わらせてきます!!」

「……分かつた。だが、決して死ぬな」

「はい！」

無惨さんは善逸達に目を向けると、全員を引き連れてその場から離れていった。炭治郎はゴリラ滝さんの背中に跨ると、日輪刀を構え、戦闘体勢に入る。

「臭い男はよくあちらの通りの方に逃げて行きました」

堕姫はそう言つて指を指した。炭治郎はゴリラ滝さんと共にそちらの方向へと向かった。

向かう道中、炭治郎はふと疑問に思つたことをゴリラ滝さんに聞いてみた。

「そういうえば、どうして浅草に来たんですか？」

「ウホホウ」

「え、『浅草のうどんを食べたかった』？そつちですか……」

「ウホホウウホホウッ！」

『浅草のうどんは美味しい』つて？本当ですか？俺も食べてみたいな

「ウホホウウホホウ」

「え、今度は”俺が奢る”つて……いや、いいですよ。流石にそこまでしてもらうわけには……。とにかくこの事件を解決してうどんを食べに行きましょう」

「ウホホ」

「え、俺の事は心配するなつて？でも……」

「ウホホウウホホウ」

「え、”俺は強いから安心しろ”つて？……そうですね、ゴリラの滝さ

んが言うなら信じましょう

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

そう言いながら二人は目的地へとたどり着いた。そこは寂れた神社があるだけで、特に変わった様子は無かつた。

「ウホホウ」

「え、『この中に臭い男が居る』？確かに言われてみれば、そんな気がします」

炭治郎は目を閉じて集中すると、嗅覚を研ぎ澄ませた。
すると微かに人の気配を感じ取つた。

（見つけた！）

炭治郎は日輪刀を構えると、大きく息を吸い込んだ後、呼吸法を使つた。

ドゴオオオオオンッ！！ 次の瞬間、炭治郎の一撃が神社の本殿を打ち碎いた。

「ひいいっ！」

その衝撃で屋根の上に居た臭い男の姿が露わになつた。

炭治郎はすかさず臭い男の元に駆け寄ると、地面に組み伏せ、動きを押さえつけた。

「ウホオツ！……ウホツ！」

ゴリラ滝さんが加勢しようと走り出すと、何処からかもう一体の鬼が現れた。どうやら鬼は二人組だつたようだ。

「ウホツ!?」

「ゴリラ滝さん！」

ゴリラ滝さんはもう一體現れた鬼の攻撃を受けて吹っ飛ばされてしまつた。一方、もう一人の鬼はと、ゴリラ滝さんには興味がないようで、そのまま炭治郎の元へ向かつてきた。

「ウホオオオオツ！」

「えつ!? ゴリラ滝さん!」

ゴリラ滝さんは再び立ち上ると、雄叫びを上げ、炭治郎のピンチを救つた。ゴリラ滝さんはそのまま炭治郎を守るように立ち塞がり、

敵である2人を睨み付けた。

「ウホホオッ!!」

——ゴリラの呼吸、参ノ型、ドラミング・スペシャル——

ドコオオオオオオンッ!! ドガアアアアアンッ!! ゴリラ滝は自分の胸を力強く打ち付けると、衝撃波を発生させた。その威力はすさまじく、2人の鬼を怯ませることに成功した。

「ウホッ!!

「ぐわつ!!」

「今だ!!」

炭治郎は隙を突くと、鬼の体を斬り裂いた。鬼は血を噴き出しながら倒れ込むと、塵となつて消え去つた。

ゴリラ滝もまたもう一方の鬼を倒そうと構えたが、相手はもう戦意を喪失していたらしく、怯えた表情で炭治郎達を見つめているだけだった。

炭治郎はゆつくりと近づくと、鬼に対して問い合わせた。

「お前がこの事件の犯人なのか?」

「……俺は俺の爆発の芸術を世に知らしめるためにやつただけだ!!」

「……爆発?」

「そうだ!!」

鬼はそう叫ぶと、懷から一つの壺を取り出し、自慢げに見せつけてきた。

「これは俺が今まで作つてきた爆薬を溜め込んでおいた壺なんだ!!これを爆発させて建物を倒壊させ、逃げ惑う人々を見て楽しんでいたんだ!!なのに、なんでこんな目に遭わなければならぬんだよ!!ちくしょう!!」

「……」

ゴリラ滝は鬼の言葉に耳を傾けるつもりはないのか、黙つたまま腕を組み、仁王立ちしていた。そして鬼の頭を掴むとゆつくりと握りつぶし始めた。

「痛い、いたい、イタイツ!!!」

「ウホホ」

「いだだだだだだだだだだだだだだ

「ウホホオオオオツ!!」

「ゴリイイインツ!! 鬼の頭蓋が粉碎される音が周囲に響き渡った。

「ぎやあああああつ!!」

鬼は断末魔を上げると、やがて跡形もなく消滅した。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

こうして浅草の連続爆破事件は幕を下ろした。犯人であつた臭い男の鬼は討伐され、事件は解決した。

無惨さん達は事件に巻き込まれた人達を介抱し終えると、再び旅路についた。炭治郎は別れ際に無惨さんに向かって言つた。

「またいつでも来てくださいね」

「……ああ、機会があればな」

無惨さんはそう言うと、善逸たちの方を見て言つた。

「では、さらばだ」

「ええ、お気をつけて」

「ああ、炭治郎。それから……ありがとう」

「え？」

「……いや、なんでもない。それじゃあな」

無惨さんはそれだけを言うと、去つていった。炭治郎は呆然とした顔で無惨さんの後ろ姿を見送つていると、不意に善逸に声をかけられた。

「なあ、炭治郎」

「ん?なんだ?」

「あの人、最後なんて言つてたと思う?」

「さあ、よく分からなかつたなあ……」

「だよねえ」

「それよりも、早くうどんを食べに行こうじゃないか」

「うん、そうだね」

善逸はそう言つて歩き出した。炭治郎はその後ろ姿を微笑ましく見つめた後、自分もうどん屋に向かうべく、歩みを進めた。

「ウホホウホホウ」

「え、ゴリラ滝さん、何ですか？」

「ウホホウ」

「え、”俺の事は気にするな” つて？でも、まだ奢つてもらつていないですよ」

「ウホホウホホウ」

「え、”俺の分も一緒に奢る” つて？いやいや、いいですよ。流石にそこまでしてもらうわけには……」

「ウホホウホホウ」

「え、”俺を信じろ” つて？……分かりましたよ。それなら一緒にうどんを食べに行きましょう」

こうして炭治郎一行は浅草でも有名なうどん屋に向かうのだった。
——その後、うどん屋の店主がゴリラ滝さんの姿を見て驚いたいう噂が流れただか流れないとか……。

鬼滅の刃 炭治郎立志編ぐらいその6

「炭治郎、鬼と戦う剣士が、様々な呼吸法と型を用いていることは知つてゐるな」

「はい無惨さん！」

「そんなことを教えるのは面倒くさいので、お前には手つ取り早く鬼

「わかりま……え？ 鬼に！？」

「いいから私の血をたっぷり飲め、お代わりもあるぞ」

卷之三

鬼の呼吸とか、特ににそんなものは

A vertical column of 15 alternating black downward-pointing triangles and white upward-pointing triangles.

「うえつぱ……せ、……」

「お代わりはいるか？ん？」

……いえ、結構です」

「そりが残念だ」

「あのー無惨さん 僕はこれからどうすれば良いんですかね」

二晩寝れば健康的で立派な鬼になれるだろう。その後は血鬼術の訓練をしてもらう。一週間コースと一年コースがあるぞ。どっちがいい? たゞ、一週間コースは丑鬼荷が混じる。

「じゃあ一年コースでお願いします」

「……えー」

「なんですかその反応！俺だって嫌ですよ！」

「だからって、そんな……あつそうだ！もう、」

「まう、なしひば試 一二めら二三するか
いんですか!? ほら、もつとこう、楽して強くなるみたいな」

「本當ですか！やつたー！！

「ふむ、だがこの方法はリスクが高い。血鬼術が尻から出るようにな

10

「それは絶対ダメですね!!!!」

「安心しろ、お前なら大丈夫だ」

「どういう意味ですかそれ!! あとなんか怖いんで近寄らないでもらえますかねえ!?」

「おいこら逃げるな炭治郎」

いやああああああああ来ないでくださいいいいいいい」

その後めちゃくちや特訓しました。あと、相性が悪かつたのか鬼にはなれませんでした。

「息子じゃないです」

「なんだ反抗期か」

いや本当に違うんで、むしろ逆というかなんと言うか」

「まあいい、今日ほっこまでにしておいてやる。明日からはみつちり假れるから覚悟)ておくなれ」

「はい無惨さん！」

「返事だけは一人前になつたな。ではまた明日会おう」

そう言つて、無惨さんはどこかへ消えてしまつた。

A vertical sequence of 15 alternating black and white triangles pointing downwards. The pattern starts with a black triangle at the top, followed by a white triangle, then a black triangle, and so on, ending with a black triangle at the bottom.

竈門炭治郎（15）

主人公兼ヒロイン。原作開始時点では17歳くらいの予定。身長170cm前後。細マツチヨ系イナメン。黒髪赤目。

家族を殺され妹は鬼になり絶望していたところ、無

家族を殺され奴は鬼になり絶望していたところ、無惨さんによられて救われた。以降は彼の屋敷に住み込んで家事手伝いをしている。実は結構強い。

〔鬼舞辻無慘（？）〕

年齢不詳の美青年。人間だつた頃の記憶はなく、自分が何者なのか

すら覚えていない。自分のことを『私は誰か』ではなく、『私は鬼である』と考えているため、人を食べなければ生きていけない体になってしまったことにも特に悲観していない。

鬼としての名前は『十二鬼月・上弦ノ零』。

青い彼岸花を探し求めており、その過程で太陽を克服したいと思っている。炭治郎の血肉を定期的に摂取することで太陽の下に出ても死なくなつた。

鬼としては最上位の存在であり、他の鬼とは比べ物にならないほど強いが、本人はそのことをあまり自覚しておらず、「自分より弱い鬼などいくらいても無意味だ」と言つて基本的に単独で行動している。

ちなみに無限城に居るは無惨さんの趣味らしい。鳴女さんかわいそお……。

他にも十二鬼月と呼ばれる自称手下がいるが、彼らは基本的にサークル仲間のようなノリで過ごしている。

【竈門禰豆子（14）】

お兄ちゃん大好きっ子の妹。血氣術はまだ使えないけどそのうち使えるようになるはず。多分。

今のところは普通に人間の食べ物で栄養補給できる。無惨さんは懐いているがたまにセクハラしてくるので困っている。

【竈門家惨殺事件】

炭治郎と禰豆子以外の家族全員が何者かに襲われ皆殺しにあつた事件。犯人は未だに見つかっていない。

【鬼殺隊】

政府非公認の組織だけどわりと有名。剣士を志す人は大体ここを目指す。無惨さんは一応同盟関係にあり、彼が日輪刀の材料となる鉱石を求めて旅に出た際に護衛を務めることもあるとかなんとか。

柱と呼ばれる最高幹部たちは鬼殺隊のトップであると同時に無惨さんの配下を務めることがある。大体が無惨さんの奢り目当て。うまい！うまい！

【煉獄杏寿郎】

柱の一人。無惨さんの奢りで焼き芋食つた。うまかった。

〔宇髓天元〕

柱の一人。無惨さんから鰻重を食わされた。うますぎて泣いた。

〔不死川実弥〕

柱の一人。無惨さんから寿司を奢つてもらつた。
美味しかつたけ
ど弟が怖くてしばらくまともに顔を見れなかつた。

甘露寺蜜璃

柱の一人。無惨さんからパンケーキを奢つてもらい、無惨さんのことを「素敵な殿方」と認識した。

〔伊黑小芭内〕

柱の一人。無惨さんに蛇を持つてこられてビビッた。

蟲柱。姉が継子にしていたこともあり、無惨きんと面識がある。よく怪我をして帰つてくる姉の治療をするついでによく愚痴を聞いてもらつていて。無惨さんからよくお菓子を貰う。

富岡義勇

水柱 無惨さんと会ったことはないものの、噂で存在は知っていた。炭治郎と禰豆子のことも最初から知つていて黙認してくれていた。

〔鯵瀧左近次〕

からは「あの爺はいい奴だよ」と聞いている。

雷の呼吸の使い手。後に炭治郎の同期となる。無惨さんによく饅

頭を差し入れしてもらえる。稽古は死ぬかと思つた。

獣の呼吸の使い手。山育ちなので読み書きができない。無惨さん

に奢つてもらつた天ぷらは絶品だつた。

普通のモブ。無惨さんから認識されていない。

A vertical column of 15 alternating black and white triangles pointing downwards. The sequence starts with a black triangle at the top, followed by a white triangle, then a black triangle, and so on, ending with a black triangle at the bottom.

「あー……暇」

俺は畳の上でごろりと寝転びながらそう呟く。現在時刻午前11時30分。昼食の時間まであと1時間ほどある。

今俺がいるのは、無限城の一室だ。

ここは無惨さんの屋敷の中だが、普段俺たちが暮らしているところとは別にある部屋だ。主に客人をもてなすために使われていて、普段は誰も寄り付かない。なぜこんなところに居るのかと言うと、先程言つた通り俺が暇だからだ。

無惨さんは朝早くからどこかへ出かけてしまつたし、鳴女さんは琵琶の練習中だし、他にやることも無いのでゴロゴロするしかないのだ。

「なんか面白いこと起きないかなー」

そんなことを考えていると、ふいに部屋の扉が開かれた。

「炭治郎、お前も鬼にならないか？今なら無惨様ポイントが2倍だぞ」

「猗窩座さん、それ別の話で使つたネタです」

「2人合わせて炎の鬼狩りコントだ」

「煉獄さん、それも別の話で使つたネタです」

「なんだつまらん」

「どういうか何やつてるんですか？」

「無惨様がいない間、お前たちの面倒を見るように仰せつかつてな。せつからくだからお前たちも鍛錬に参加させてやろうと思って」

「本当ですか！？ありがとうございます！」

「お前たち二人ともなかなか見込みがありそうだからな。期待してい るぞ」

「はい！」

「ところで炭治郎」

「なんですか？……ひやつ？」

突然耳を舐められて変な声が出た。びっくりして飛び上ると、そこにはいつの間にか童磨さんがいた。

「どうまざん、やめてくらさい……」

「炭治郎くん、これは嘘をついている味だ」

「童磨さん、それもう作品違つてきてます」

「おや、君もいたんだね」

「いましたよ」

「そろいえ、ばさつきから何か聞こえてたような気がしないでもないなあ」

「おい」

「まあ冗談はこれくらいにしておいて、本題に入ろうか。今から煉獄くん、僕、猗窩座くんで君を攻撃する。必死に避けなさい。そういう訓練だ」

「死にますよ！」

「大丈夫大丈夫、ちゃんと寸止めにするから」

「いや無理ですって！本当に死んじやいますって!!」

「心配はいらない。さあ、始めようか」

「いやああああああああああああ」

この後めちゃくちゃ逃げ回った。



「今日はこのくらいにしておいてあげようじゃないか」

「ぜえ、はあ、げほつ」

「大丈夫かい？ほら、これを飲み給え」

「は、はい……」

差し出されたお茶を一気に飲む。
熱い液体が喉を通り抜ける感覚。

「ふはあ」

「さて、次は何をして炭治郎くんで遊ぼう？鍛えようか？」

「今俺で遊ぶつて言いかけましたよね!?」

「言つてない言つてない」

「絶対に言つてました！」

「まあまあ、落ち着きなされ」

「落ち着いてられる状況じゃないですよこれ!!助けてください鳴女さん！」

遠くからこちらを見ていた鳴女さんは、そつとプラカードをあげる。

＼生命を燃やせ！／

「鳴女さんんんん!!!」

「ははは、元気がいいねえ」

その後めつちや逃げた。

A vertical column of twelve alternating black and white downward-pointing triangles, arranged in a repeating pattern.

「はあつ、はあつ、疲れた……」

無惨さんが帰ってきたのは、

みれ泥だらけの俺は、玄関先で出迎える。

すると無惨さんはいつものように不機嫌そうな顔をして、

一 岡治郎
風呂に入れ。そのままで風邪を引くだろう。私は着替え

ぐるから先に湯船に浸かり体を温めて二言つ二相室二川の入浴をまつて。

相変わらずぶつきらぼうだが優しい人……人じやなかつた鬼だつた。言われた通りに大浴場へ向かい、ゆつくりと浸かる。

「極樂う」

思わずおっさんのかき言葉が漏れてしまう。

この屋敷の大浴場はとても広い。そしてとても綺麗だ。

なんでも無惨さんが鬼になつた時に、人間だつた頃の習慣が残つて
いるのか、それともただの趣味なのか、毎日欠かさず掃除しているら
しい。おかげでいつでも清潔で快適だ。

「無惨さんに感謝しないと」

そんなことを思つてゐると、ガラリと脱衣所の引き戸が開いた。

「ん？ なんだお主居たのか？」

と堂々と朱紗丸さんが入ってきた。
!

「やあ、お前は？」

他の経口抗脳梗塞薬は、溶栓療法の併用には適応がない。

と堂々と朱紗丸さんが

卷之三

俺の絶叫が屋敷中に響き渡った。

△
▽
△
▽
△
▽
△
▽
△
▽
△
▽
△
▽
△
▽

俺と朱紗丸さんは服を着たまま二人で向かい合つて正座していた。俺は涙目で彼女を見つめるが、彼女はどこ吹く風である。

「別に減るものもあるまいし、気にせず入ればよいではないか」

「俺のメンタルがすり減ります!!」

「ははは、面白いことを言うのう」

「全然面白くないです!!」

「そんなに恥ずかしがらすともよい。私も一緒に入ってやるゆえ安心せい」

「それはもつと嫌です！」

朱紗丸さんは幼い時に無惨さんに助けられて鬼になつた女性で、幼い見た目の割には立派な大人だ。鞠が得意と言うこともあって良く禰豆子の面倒を見てくれている、なんと言うか近所のお姉さんの的存在だ。

俺のこともよく可愛がってくれる。ちょっと過激だが……。

「それで、何かご用でしようか？」

「うむ、実はな。毬を投げすぎたら手が痺れて痛くなつたのじや」「なるほど、わかりました」

「お主ならわかつてくれると思つたぞ」

そう言うと、彼女は俺の膝の上に頭を乗せてきた。いわゆる膝枕の体勢だ。

「はあ～気持ちいいの〜」

とろけるような表情を浮かべる彼女に、俺は苦笑いするしかなかつた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

夕食の時間。無惨さんに呼ばれて食卓に向かうと、そこには十二鬼月の皆さんその他には珠世さんと兪史郎さんの姿があつた。

「よく来たなお前たち。今日の料理は私が腕によりをかけて作つたものだ。残さずに食べるよう」

そう言われて出てきたのは、天ぷらと刺身、それに炊き込みご飯だ。

「わあ！美味しそうですね！」

「当然だ。私の手づから作られたものだからな」

「いただきます」

箸を取り、まずは天つゆにつけてから口に入る。サクツとし

た食感のあとにジュワッと旨みが広がる。

「うまつ」

「美味しいです無惨さん！」

「当たり前だ」

「天ぷらも最高です！」

「ふふ、褒めても何も出ないぞ」

「天ぷらは出ますけどね」

「うるさいぞお前」

「あー……天ぷらはうまいな……うん……うまい……」

「どうしたのですか？なんだか上の空のようでしたが」

「いえ……その……なんと言いましょうか……今日は色々あります

……

「？」

「いや……本当に……色々なことが……」

「どうした？何かあつたのか？」

「いや……まあいいか……」

「？」

「無惨様が作るものは全ておいしい……」

「そうでしようそうでしよう」

「炭治郎、俺にもくれ」

「はいどうぞ」



食事の後、俺は無惨さんの私室に呼ばれた。

「さて、炭治郎。私がお前に教えられることはもう全て教えたつもりだ。後はお前次第だ」

「はい」

「お前が望むならお前はいつまでここにいて構わない。しかし、お前は家族の仇をとりたいのだろう？」

「はい、もちろんです！」

「……分かつた、なら留めはしない。だが覚えておいて欲しい。私はお前を息子のように思っているし、ほかの皆もお前を家族と思つてい

る。いつでも帰つておいで、ここはお前の家だ」

「無惨さん……ありがとうございます！」

「ふん、礼などいらん。お前は私の命令通り働けば良いのだ」

「はい！」

「……ああそうだ、忘れるところだつた」

「なんですか？まだ何かあるんですか？」

「これは鬼殺隊入隊のための委任状だ。これがあれば最終選抜に参加出来る」

「ありがとうございます……つてえ!?」

「どうした？何がおかしい？」

「あの……俺、鬼殺隊に入るなんて一言も……」

「私はなんでも知つているのだ。それにバレてないとでも思つていたのか？」

「えつ」

「柱どもは気づいているようだがな。他のものは知らないが。あいつらは頭が固いからな、おそらく反対されるのが目に見えている。特に朱紗丸なんかはお前を気に入つてるからな……。朱紗丸を嫁に貰つてここで暮らすと言う選択肢もあるが、お前は今はそれを選べないだろう？」

「いや、朱紗丸さんのことは初耳です」

「……あー……。すまない、聞かなかつたことにしてくれ。こほん、ともかくだ。私は賛成だ。あとは好きにしろ」

「はい！」

「ただし、条件がある」

「はい」

「死ぬなよ」

「……はい！」

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

こうして、俺の最終選別参加が決まった。

キン肉マン（技のみクロス）のファンタジー戦記もの

この世界では、クロスボウの代わりにクロスボンバーが主流となっている。そのため戦争時には多くの若者が弓や弩ではなく二人一組で敵の身体に組み付き、相手の勢いを利用してそのまま地面に叩きつける格闘技を習得する必要に迫られた。また銃火器は高価であるだけでなく整備にも技術を要するため、軍隊においては近接戦闘の技術向上が重視されている。したがって柔道と相撲はこの世界でも広く受け入れられており、国技としての名声を獲得している。

その日、王国、帝国、両軍ともに騎兵隊、歩兵隊、そしてクロスボンバー隊を揃えた布陣で相対していた。

クロスボンバー隊はその名の通り敵と組み合うことを想定した部隊であり、基本的には三人組の小隊を組んでいる。彼らは二人一組の相手に対し左右それぞれから組み付くことで動きを止め、最後に残つた一人が渾身の力を込めて相手を地面に叩きつける。訓練の際にはお互いの呼吸を合わせ、相手が倒れやすいようにタイミングを調整することが重要となる。もちろん三人全員が一度に倒れる必要はなく、誰か一人でも立ち上がりがあればそれでよい。また、場合によつては一人を相手に二人がかりで取りつき、同時に地面へ押し倒すことも有効な戦術として考えられている。

今回の戦争においてクロスボンバー隊の人数は三百人とされる。これは標準的な人数であるが、実際の運用にあたっては三百人程度まで増員されることが一般的だつた。

両軍とも陣形を整えてしばらく睨み合いが続いた後、やがてゆつくりと前進を始めた。まずは互いに距離を保つたまま、間延びした速度で前進を続ける。やがて双方の兵士たちの間に緊張感が高まり、少しずつ息苦しくなってきた頃を見計らって、両軍の指揮官はそれぞれ合図を送り合つた。

それを切つ掛けにして両陣営は一斉に駆け出した。兵士の一人ひ

とりがそれぞれ自分の所属する部隊の先頭に立ち、剣を振り上げて敵に襲いかかる。両軍の兵士が入り乱れ、激しい白兵戦が始まった。

歩兵隊に続くように騎馬隊、クロスボンバー隊もそれぞれ前へと進み出る。クロスボンバー隊はそれぞれの担当範囲に向かつて突進し、次々と敵を薙ぎ倒し始めた。



戦況は帝国軍側の方が全般的に優勢であつた。帝国のクロスボンバー隊は全員馬に乗つており、機動力を活かした攻撃を行う。一方王国側のクロスボンバー隊は馬に乗れない者も多く、移動速度という点で大きく劣っていた。加えて帝国側は騎兵を中心に編成されているのに対し、王国側は歩兵が中心となつていた。このため戦況は徐々に帝国側に有利に展開していった。



開戦から1時間後、王国の陣地の一角では早くも敗北ムードが漂い始めていた。元々数の上では互角だつたが、帝国側のクロスボンバー隊が予想以上に強力だつたのだ。既にほとんどの部隊が壊滅状態に追い込まれていた。

「ちくしょう！ なんなんだあいつらは！」

そう叫びながら王国兵の一人がクロスボンバー隊員の一群に飛びかかつた。しかしその瞬間には逆に投げ飛ばされ、仰向けに倒れたところを別の隊員によつて押さえつけられてしまつた。もう一人の兵士が慌てて仲間を助け起こうとするが、その時背後から現れた別の隊員に取りつかれてしまい、結局二人して地面に転がされてしまつた。

その様子を見て他の王国兵の士気は完全に挫けてしまつっていた。もはや戦意を失つた者たちが次々と武器を捨てていく。

勝敗は既に決していた。



帝国軍のクロスボンバー隊は見事な戦いぶりを見せていた。帝国側が有利な状況になつたとはいえ、それでもまだ王国側もかなりの戦力を残しているはずだつたのだが、どうやら彼らはもう戦う意思を

失つてしまつたようだつた。

帝国側のクロスボンバー隊指揮官であるバッシュ少佐は部下たちを鼓舞するように声を張り上げた。

「よし、我々の勝利だ」

既に王国側からは敗北を認める旨の宣言が出されており、戦闘は終了している。

A vertical stack of 15 alternating black and white triangles, starting with a black triangle at the top.

毎年行われるこの戦争は、いわゆる国家間の交流を兼ねた軍事合同練習ではあるが、その実戦場における実戦訓練という意味合いの方が強かつた。特に今回は王国側がかなり手強いという噂もあり、バツシユはいつも増して気合を入れて臨んでいた。実際にこうして勝利を収めた今となつてみれば噂などただの噂に過ぎなかつたわけだが、いずれにしても彼の率いるクロスボンバー隊は素晴らしい戦果を上げたと言えるだろう。

特に最大の勝因と言えるのは帝国クロスボンバー隊の騎乗技術の高さにあつた。本来であれば敵と接近して組み合う以上、どうしても馬の速度は落ちてしまう。ところが彼らの場合は乗馬したままでも素早く行動することができたため、その分だけ王国クロスボンバー隊よりも速く動くことができたのだった。

もちろんそれだけではここまで圧勝することはできなかつたはずだが、もう一つ大きな要因があつた。それは彼らが馬上で格闘術を習得しているという点だつた。この世界では古くから馬上の格闘技が盛んであり、多くの流派が存在している。そして帝国クロスボンバー隊では徒步と馬上の両方を想定した訓練を行つていたため、その技術が実践の場で役立つたのだつた。

一方で王国の敗因はクロスボンバー隊の動きが鈍かつた点にある。彼らも馬に乗ることはできたが、帝国ほど習熟していなかつたためにその速度が出なかつた。そのため結果的に帝国クロスボンバー隊に動きを読まれやすくなつてしまつたのだつた。

いずれにせよ今回の戦争において帝国クロスボンバー隊は大戦果を挙げた。来年もまた同じメンバーで戦うことになるかもしれない

が、少なくともバツシユにとつては満足できる結果だった。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

帝国軍の勝利が宣言されると、王国軍の兵士たちは一斉に地面に座り込んだ。今年の戦争も、特に大きな怪我なく終わった事に安堵する。そこかしこで帝国、王国とともに兵士たちが互いの健闘を褒め称え合っていた。

そんな様子を横目で見つつ、一人の若い騎士が馬を駆りながら王国軍本陣へと向かっていた。彼は今回の戦争において王国クロスボンバー隊の隊長を務めていた。元々は歩兵としての訓練を受けていた彼であつたが、昨年の戦いの際に王国クロスボンバー隊の副隊長に任命され今年は隊長として、その役割を務めてきた。

今回の戦いでも王国クロスボンバー隊の働きは目覚ましいものだつた。王国クロスボンバー隊も決して弱くはなかつたが、帝国クロスボンバー隊が強すぎたのだ。

「それにも……」

彼は先程の戦闘の様子を思い出していた。

王国クロスボンバー隊は確かに強い部隊ではあつたが、帝国クロスボンバー隊の敵ではなかつた。敵が馬上にいるにも関わらず、彼らは容易に敵を押し倒し、馬乗りになつて相手を制圧することに長けていた。

もし仮に自分一人での部隊と戦うことになつたとしたら、果たしてどれだけ持ち堪えることができるだろうか？ そう考えると彼は思わず身震いした。

「あんな連中を来年も相手にしなければいけないのか」

改めて自分達の置かれた立場を認識し、憂鬱になる。

しかしすぐに頭を切り替え、再び前を向いて馬を走らせ始めた。

彼が向かう先は王国軍の本陣であり、そこでは今回の戦争の王国側MVPとなつたことを祝つて宴会が行われる予定となつていた。

しかし彼の表情は決して明るいものではなかつた。

何故なら王国クロスボンバー隊は来年も同じメンバーで構成されるのだから。鍛錬を積まねば。目先の宴よりも先を見据えた男の目

に、油断はなかつた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

先程まで戦場だつた平原に宴の歌々が木靈する。王国帝国共に戦の後の合同大宴会が始まつていた。

戦いが終われば敵味方関係ない。今年も無事、死者を出すことなく戦争を終わらせられたことに皆が喜び、酒を酌み交わす。普段は交流のある隣国同士という事もあり、両国の兵士たちは肩を組んで陽気に歌い踊つていた。

この戦争は合同軍事練習の名目ではあるが、元々は両国の主神である筋肉の神『キン肉神』に捧げる祭りであるとも言われている。つまりこの戦いが終わつた後は合同の大宴会を開き、更に両国ともそれぞれの国に戻つたあとも、それぞれ盛大に祝うのが通例となつてゐる。

しかし、今回の戦争に参加した両軍のクロスボンバー隊の面々にとって、今回の戦勝を祝うべき相手は自分の所属する部隊の指揮官ではなく、もつと別の人物だつた。

両軍のクロスボンバー隊の面々が目指す先にいるのは、今回の戦争で最も多くの戦果をあげた男、すなわち帝国クロスボンバー隊指揮官であるバツシユ少佐だつた。

両軍のクロスボンバー隊の兵達は全員、バツシユの下へ集まつていった。彼らは酒の入つた杯を手にしながら、まるで上官に対するかのようにバツシユに対し敬礼をしてゐた。バツシユはクロスボンバー隊の面々に向き直つた。

クロスボンバー隊の兵たちはバツシユの言葉を一言一句聞き逃すまいと、真剣な眼差しで彼を見ていた。

バツシユはクロスボンバー隊の兵たちを見回した。

そして口を開いた。

「筋肉神の御加護を！」

クロスボンバー隊の兵たちから歓声が上る。

『筋肉神の御加護を!!』

そして次の瞬間、クロスボンバー隊の兵たちは手に持つた酒瓶を掲げて一気に飲み干した。

クロスボンバー隊の兵たちの雄叫びが、何時までも夜の闇の中に響き渡つていた。

鬼滅の刃 柱合裁判——その7

炭治郎は目を覚ますと鬼滅隊本部、お館様の屋敷前の庭にいた。鬼となつた妹を隠していた罪で、拘束され連れてこられたのだ。

「ここは鬼殺隊の本部です。あなたは今から裁判を受けるのですよ。

竈門炭次郎君」

蟲柱——胡蝶しのぶが話しかける。炭治郎が慌てて周りを見回すと他にも人の姿があつた。

炎柱——煉獄杏寿郎。

音柱——宇髓天元。

恋柱——甘露寺蜜璃。

岩柱——悲鳴嶼行冥。

霞柱——時透無一郎。

蛇柱——伊黒小芭内。

水柱——富岡義勇。

風柱——不死川実弥。

そして……ドラゴンボール柱——フリーザ様。

「ホツホツホ……全く不愉快な地球人ですね。煉獄さん、不死川さん、この方を処刑してしまいましょう。そうですね、わたし自ら汚い花火にして差しあげても構いませんよ?」

フリーザ様が機嫌よく笑う。しかし目が笑っていない。どうやら本気で怒っているようだ。

「よもや、フリーザ様の手を汚すまでもない!俺が斬首する!」「煉獄さん、貴方の手を汚す必要もないでしょ?わたしが汚い花火に変えてしまいます」

「あア!?ふざけんじやねエぞオ!コイツは俺が殺すウ!」

「おいおい、落ち着けってお前ら。つーか、こんな奴の為にわざわざ柱を三人も使うなよ。暇だろ?」

「南無阿弥陀仏……」

「あらあら皆さん落ち着いてください。でも、炭次郎君はこれから裁判を受けるんですよ?少し黙つてくれませんかね?」

「……」

炭治郎は呆気に取られていたがすぐに我に返り、「禰豆子はどこですか!?」と声を上げる。するとそれに答えたのはお館様だった。
「炭次郎君……まずは私の話を最後まで聞いてくれないかな?」

「……はい」

「ありがとうございます……。実はね、鱗滻さんから君のことは報告を受けているんだ。もちろん鬼を連れた隊員のことも含めてね。それで今回皆を集めてもらつたんだけど、その前に一つ確認したいことがあるんだよ」

「何でしようか?」

「炭次郎君はどうして妹を連れているのか教えてくれるかい?」

「それは……妹だからです!!」

「つまり妹萌えということかな?」

「違います!! 家族として一緒にいるだけです!」

「つまり血の繋がつた妹じやないと萌えないということかな?」

「いえ! そういうわけじやありませんけど……つて、ええ?? ちょっと待つて下さい! それどういうことなんですか!??」

「ああ、ごめんね。説明不足で驚かせてしまつたみたいだね。私は別に君の妹を蔑んでいるわけではないんだよ。ただね……鬼を連れているとか関係なく、君のような変質者がいるというだけで許せないだけなんだ」

「誰が変質者ですか! 僕は純粹に妹のことを思つてですね!」

「そうだね、でもね自覚のない犯罪者は皆そう言つてしまふものだよ。……フリーザ様、やはり炭治郎君は汚い花火にしてしまうべきでは?」

「そうですね、汚い花火にするしかないようですね。仕方ありません。さつさと殺つてしまいましょう」

「……どうしたら妹萌えじやないって信じてもらえますか?」

「そうだね……誰か禰豆子ちゃんをここ連れて来てくれるかい」

「分かりました。おい、竈門炭治郎。お前はそこで大人しくしていろ」「はい……」

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

しばらくすると、禰豆子が可愛いフリフリの衣装を着せられてやつて来た。いつもの格好と異なりなかなかに新鮮で可愛い。

「禰豆子ちゃん、炭治郎君に上目遣いで「お兄ちゃん」と言つてみてくれないかな?」

「お兄ちゃん♡」

「グハッ!!!」

(こ、これは……ヤバイ!!)

炭治郎はあまりの破壊力に吐血しそうになるのを抑えながら必死に耐える。フリーザ様の冷たい視線など気にならなかつた。

「俺は……俺は妹萌えじやないです!」

炭治郎は鼻血を垂れ流し、胸を押さえながら叫ぶ。

「まだ言うか貴様アアアアアア!!!」

そんな彼の言葉を聞いた瞬間、伊黒は怒り狂い刀を抜いて襲いかかつた。

「おやめなさい、小芭内さん」

「しかし!」

「お館さんの前ですよ。あなたも汚い花火にして差しあげましようか?」

「……申し訳ありませんでした」

伊黒は渋々といった感じで引き下がる。他の柱たちも一様に顔をしかめる。

「……俺は……俺は妹萌えじや……ないです……」

炭治郎は口元から血を流しながらも、そう言い切つた。

「嘘はいけないよ、炭治郎君。鼻血、そしてその出血量から察するに相

当無理をしているようだね? 大丈夫かい?」

「お気遣い感謝します……。でも本当に違うんです! 俺は妹のことを愛しているだけです! 変態なんかじゃないです!!」

「……なるほど、萌えというレベルでなく性の対象として見てしまうほどに欲情してしまったということだね?」

「違います! そんなんじやありません!」

「今『愛している』と断言したじやないか。それが証拠だろう？まつたく君は救いようがないね」

兄の突然の告白に、禰豆子

二〇

だけだ！それだけなんだ！」

うわあ……きもお……近寄らないでくれる?」

卷之三

おまけのショックは腰をぐく崩落

やはい房治良君　君は救いよがたないよシテ
ハリハナ様　一思ひに

「そうですね、わたしもこれ以上無

「…………では死になさい」

フリーザ様が指先をクイッと動かすと、炭治郎は拘束されたかのよ

うに動けなくなり、そのまま宙に浮き上がっていく。

「いやだ！死にたくない！助けてくれエエエエエエエエ！」

おなたの娘も合言葉もおなたを救おうとはしながんでしょう？諦めることですね

「では、さきげんよう、汚い花火におなりなさい」

炭次郎に向ける。

「やめてくれエエエエエ!!」

「バキュン！」炭次郎は断末魔と共に爆発四散する。フリーザ様の

「お館さん、これでよろしかつたでしょうか？」

「うん、ありがとう。フリー・ザ・様」

いえ、これくらいどうってことないですよ」

A vertical column of 15 alternating black and white triangles pointing downwards.

「ところで禰豆子ちゃんはフリーーザ様の所で治療してもらえるということでおいいのかしら?」

「ええ、そうですよ甘露寺さん。彼女が望むなら特別に私直属の戦士として鍛えてあげましょう」

「あ、あの……私もお願ひできますか?」

「ええ、構いませんよ。私の部下はいくらいても困りませんからね」

「あ、ありがとうございます!」

「それでは行きましょうか

「はい!」

鬼滅の刃 柱合裁判——その7 （リベンジ）

炭治郎は目を覚ますと鬼滅隊本部、お館様の屋敷前の庭にいた。鬼となつた妹を隠していた罪で、拘束され連れてこられたのだ。

「ここは鬼殺隊の本部です。あなたは今から裁判を受けるのですよ。

竈門炭次郎君」

蟲柱——胡蝶しのぶが話しかける。炭治郎が慌てて周りを見回すと他にも人の姿があつた。

炎柱——煉獄杏寿郎。

音柱——宇髓天元。

恋柱——甘露寺蜜璃。

岩柱——悲鳴嶼行冥。

霞柱——時透無一郎。

蛇柱——伊黒小芭内。

水柱——富岡義勇。

風柱——不死川実弥。

そして……ドラゴンボール柱——フリーザ様。

「ホツホツホ……全く不愉快な地球人ですね。煉獄さん、不死川さん、この方を処刑してしまいましょう。そうですね、わたし自ら汚い花火にして差しあげても構いませんよ?」

「もう! それは困りますぞ!」

「そうだぜエ、殺すなら俺にしろオ!!」

「ええ!? ちょっと待つてください!! どういうことですか!? どうして皆さんで殺し合いをしようとしているんですかああああ!!!」

炭治郎は突然の不死川達の発言に混乱する。ここは俺が糾弾される流れじやなかつたのかと?

「簡単な話だよ、竈門少年。我々鬼殺隊は政府非公認の組織だ。つまり法も何も通用しない。それ故に我々は裁かれることもまたない。力こそがパワーなのだ。あと不死川は単にドMなだけだ、気にするな」

「そーいうことだア。さつさと俺を殺せクソガキイイイ!!」

「ひいいいいいいい!!!」

「あのおゝ話が進まないんで黙つてくれませんかね? というわけで炭次郎君は斬首決定です。早く首を斬らせてくださいよ、私こう見えて忙しいんですね。なんたつて私は鬼舞辻無惨を倒すためだけに生きているのですから……」

「ちよつ! まつ! うわああああああ!!!」

「あらら……可哀想に……。でも安心してください。痛みを感じる暇もなく一瞬で楽にしてあげますからね」

「お待ちなさいのぶさん、わたしが汚い花火に変えてやりますよ?」「俺を汚い花火にするだとオ!!」

「……不死川さんは黙つてくれませんか? 後でサンドバッグにして差しあげますから。さあ、誰に殺されたいか言いなさい。私が直々に選んできますからね?」

「……(ブルブル)」

「まあまあ落ち着くんだしのぶ君! まずはこの少年の処遇を決めることが先決だろう!」

「それもそうですね。斬首、花火、サンドバッグ、どれがいいんじようねえ」

(やばい……殺される……)

「では取り敢えず斬首ということで」

「いやいやいやいや!! おかしいですよ!! 僕は一体何をしたつていうんですか!? そもそも俺は妹を連れて逃げようとしただけなのに何故殺されなくちゃならないんですか!?」

「フリーーザ様よオ、早く殴つてくれエ♡」

「いい加減お黙りなさい不死川さん。これ以上騒ぐようであればあなたの身体を切り刻んでいきますよ?」

「ひやつほうウ!!」

「だからそういうところだつて言つてるじゃないですか! もう嫌だこの人達怖いよおおおお!!」

「まあいいではないですか、竈門君。落ち着いてください」

「……冗談はここまでにしておきましょう、お館さんのお成りですよ」

そこに現れたのは産屋敷耀哉。鬼殺隊元締にしてこの国のトップである内閣総理大臣だつた。

「よく来たね私の可愛い剣士たち、お早う皆。今日はとても良い天気だね。空は青いのかな？」

産屋敷耀哉は赤いジャケットにやたら高く襟の立つたシャツを来てサングラスを身につけている。世が世ならビックボスと呼ばれてもおかしくはない。

「サングラスを外さないと空は見えないとおもいますけど!?」

炭治郎は思わず突っ込む。

「うん? どうしましたか竈門炭次郎君? そんなに顔を赤くして息も荒くして風邪でも引いたのですか? 大丈夫ですか?」

「違う! そうじやない! そうじやなくてですね!と言うかここには誰も常識人は居ないのか.....」

「早く俺を殴つてくれエ!」

「不死川さん、もうお黙りなさい」

フリー・ザ様は素早く不死川の後ろに回り込むと、トン! と首に一撃を与えて気絶させる。その動きはまるで瞬間移動しているかのように速かつた。

「ふう.....。やつと静かになりましたね。それで、話はどこまで進みましたでしようか? 確か炭次郎君の斬首でしたつけ? 私としては炭治郎君は汚い花火にした方が見応えがありそうなのですが」

「そうだね、ただまずは炭治郎君、彼がどうして鬼になつた妹を連れていたかを説明して欲しいな。あと、君が妹萌えだと判明したらすぐに処刑だからね。発言は慎重にね」

「はい分かりました!! えっとどこから話せばいいんだろうか.....。俺には6人の妹弟がいるんですが、ある日下の弟達が鬼に襲われてしまつて.....。その時はそこのフリー・ザ様に助けていただいたんだすが.....」

「.....たしかにそういう事もありましたね。そうですか、あなたがあの時の.....。しかしあれは別にあなたを助けるためにやつたわけではありませんよ。たまたま通りかかった時に、襲われていた地球人達

を保護しただけですよ。無辜の民を保護するのもフリーザ軍の義務ですか」「

「それでも！ありがとうございました!!」

いえ、当然のことでしたまでです。それにしても……まさかあの時助けた地球人が鬼殺隊に加わるとは驚きですね。世の中何が起こる

か分からぬものですね」「そういえばあの時フリーザ様は『お前は一体何を考えているのだ?』とか仰つてたような気がしますが、あれは何のことだったんでしようか?」

「ああ、それはですね、あなたがあまりにも愚かな行動を取つたもので
すから、つい口を出してしまつたのですよ。あなたのあの時の戦闘力
はたつたの10。ゴミクズ以下でした。そんなあなたが戦闘力10
0以上の鬼に勝てるはずがないでしよう？それなのにどうしてわざ
わざ戦いを挑むのか理解に苦しみます。あんな雑魚相手に命を落と
すなんて本当にバカですね」

「ええええええええ!? 嘘でしょ!? あの時俺つて10しかなかつたんで
すか!?

「炭治郎さん、あなた鬼殺隊に加わってから戦闘力を測る方法を習つたんじやないですか？それなら自分の戦闘力くらいおよそ検討がつきますよね？どうしてそこまで無知なんでしょう？」

いやうそとそれはでそれそのの……ついでにいふせん

「はい。その後俺は死にかけながらもなんとか生き延びることができまして、でもその時俺を助けてくれたのが妹の禰豆子なんです。彼女は鬼になつてしまつたんですが、人を襲わずに俺を守つてくれたんです！信じてください！」

リーザ軍も把握していましたよ」

「竜門少年、問題は君がそれを報告せずに我々に隠してたことにあるんだ。君を庇っていた柱達やお館様、そしてフリーザ様にもね」

「煉獄さんの言うとおりだぜ。俺達は知っていたんだ。鬼舞辻の呪いを解くことができたんだから、妹を人間に戻すことができるはずだつ

てこともな」

「しかし炭治郎さん。あなたはそんなわたし達の信頼を裏切った。これは許されざる裏切り行為です。切腹だけでは生ぬるい。極刑に値する大罪です」

「まあ待て甘露寺、フリーザ様。炭次郎君は鬼舞辻無惨を倒して、妹を救いたい一心で我々に内緒で戦つてきたんだ。そこは汲んでやつてもいいんじゃないか？」

「でもお兄ちゃん、『禰豆子萌え』ってこの間言つてました
ビックボス産屋敷に連れられてやつてきた禰豆子は炭次郎を指差す。

「うわあああああ!! なんで知つてるんだよ!!」

「私はお兄ちゃんのことなら何でも分かるよ。なんせお兄ちゃんの妹だからね」

「なんでそこでドヤ顔するの!?」

「炭次郎さん、妹萌えというのはどういう意味ですか？」

「はい！ それはですね！ 炭次郎君は女の子大好きで、中でも特に妹属性を持つ子が好みということなのです！ 間違いありません!!」

甘露寺が早口で説明する。

「なるほど、地球人というのはなかなかに面白いですね、ホツホツホ
「うわああ！ 恥ずかしくて死にそうだあああああ！」

「まあ、そういうわけで炭次郎君。君が我々の信頼を裏切つていたことについては1回目はお咎めなしとする。ただし、今後は気をつけようにはね」

「はい……」

「しかし、先程『君が妹萌えだと判明したらすぐに処刑だからね』と伝えたね。よつて炭次郎君、君を今から処刑したいと思う」

「うわあああん!! やっぱり殺されるのかああ!!」

「安心してください竈門君、殺しはしませんよ。ただちょっと汚い花火になつてもらうだけですからね？」

「結局死ぬのと同じじゃないかあああ!!」

「さて、そろそろいいかな？ 炭治郎君、君の処分についてだけど、……」

君には2つの選択肢がある。ひとつは鬼殺隊を辞め禰豆子ちゃんとも別れ、どこか遠いところでひつそりと暮らす。もうひとつは……」「もうひとつは？」

「ホツホツホ、わたし自らの手で汚い花火にして差しあげます」

「どちらも嫌だよおおおお!!ていうかなんでこんな目に遭わなければならぬんだ!?」

「炭次郎さん、これも全てあなたが悪いんですよ?さあ、覚悟はよろしいですね?ではいきますよ?」

「いやだああああ!!助けてくれえええ!!誰か助けてくれええ!!俺はこれからどうすればいいんだあああ!!」

「炭次郎君、君の来世に幸多きことを祈つてあるよ」

「フリー・ザ様、お願ひします!やめてくだー!」

「デスビーム」

炭次郎の身体を貫いた光線は一瞬にして彼を焼き尽くした。

「あつけない最期でしたねえ」

「いやはや、全くその通りだ!竈門少年、君のことは忘れないぞ!君が死んでしまった悲しみは一生癒えることはないだろう!だが安心して欲しい!君の分まで我々は戦い続ける!君の思いは無駄にはならない!だからどうか安らかに眠つてくれ!」

「お兄ちゃん、どうか安らかにお眠りください」

「……」

「竈門炭次郎君、君の魂は地獄へと墮ちるが良い。さらばだ」

こうして炭次郎の短い人生は幕を閉じたのであつた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

「さて、これで一件落着だね。つぎは禰豆子ちゃんの処遇だけど……フリー・ザ様、鬼の治療の研究はそろそろ目処が立つたのかな?」

「はい、あと少しというところですよ。珠世さんは素晴らしいですね。鬼を人に戻す薬の開発にも協力してもらつてるので助かつていますよ。彼女が居なければこの研究はもつと遅れていたことでしょう」「そうか、それは良かった。禰豆子ちゃんは暫くフリー・ザ様に預かってもらうことにする。もちろん監視付きではあるが、自由に暮らせる

ようになるから安心してくれ。それまでに鬼殺隊のみんなが、彼女を人に戻してくれると信じている

「はい！私頑張ります！」

「炭次郎君は汚い花火にしてしまったけど、この娘は綺麗な花火に、我々の希望にしたいものだね。」

「そうですね。私もそう願つております。炭次郎さん、あなたのことは決して忘れません。あなたの想いは必ず私達が引き継いでみせますからね」

「私も炭次郎さんと過ごした日々を忘れるることは絶対にないでしょ。私にとつて彼はかけがえのない存在でした。だから、きっと彼ら私達の想いを引き継いでくれるはずです」

「炭次郎君、君には感謝している。君のおかげで鬼殺隊は救われたようなものだからね。だから今度は私達が君を助ける番だ。どうか草葉の陰で見守つてくれ」

「炭次郎さん、あなたは私の誇りです。あなたは私に生きる目的を与えてくれた。あなたがいなかつたら、今の私は存在しなかつたでしょう。あなたのことは決して忘れません。そして、あなたが繋いでくれた命を決して絶やすことなく、未来へつなげていくと誓います」

「ホツホツホ、炭治郎さん、あなたは本当に良い仕事をしました。あなたがしてくれたことを、わたしは生涯忘ることはないでしよう。ですからわたしもあなたの遺志を継いで、あなたが守った命を絶やさず、次の世代に繋げていきましょう。それがあなたへの手向けとなるのですから」



『いや、俺処刑したのあなたたちですかー！』とは草葉の陰から突っ込めなかつた炭次郎だつた。

テニスの王子様　国際会議場事件編

テニスとは、テニスコートと呼ばれる横長の長方形をした競技用地において、ラケットという専用の道具を使ってボールを相手のコートに打ち込むスポーツである。互いに打ち合い、返球に失敗するか、テニスコート外にボールが落ちた時点で得点となる。

ある程度の場所、専用の道具とラケット、器具が必要なため、サッカーなどほかの球技に比べて簡単に開始できるものでは無い。

しかし世界的に最も人気で、かつ競技人口も最も多いスポーツであり、その起源は人類史発生以前に遡る。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

何故、テニスがこれほどまでに人気なのか。容易さだけであればサッカーやバスケットボールなど、ほかの球技に軍配が上がるだろう。

しかしテニスはただの球技ではない。他の球技と異なり、得点以外にもうひとつ勝敗の基準が存在する。

プレイ継続不能となつた選手は失格となる。——即ち、最後まで立つていた選手が勝利者となる、極当たり前にシンプルなルールだ。この際、選手の生死は問われない。そのため、プロアマ問わず年間を通じてテニスによる死者は少なくない。

このように球技でありながら格闘技であるテニスは、古代にその形が完成して以降も、脈々と現代まで受け継がれ、今なお不動の人気スポーツの地位を維持している。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

だが、テニスと言う常に命の危険が伴う競技が、一体何故ここまで競技人口を得るに至つたのか。

通常、格闘技やロッククライミングなど最悪命を落としかねないスポーツは、その人気に反して競技人口は少ない。真に覚悟ある者だけにその門徒が開かれており、命を賭して競技に望むが故に、栄光と人気を得ているのである。

ではテニスはどうだろうか。その危険性に反して競技人口は世界

一である。これは前述の一般論からは大きく乖離する。

『テニスは競技中つねに死の危険はあるが、実際にはそれほど死者が出るわけではなく、世間一般に言われるほど危険な競技ではない。』このような意見が存在する。確かに競技中の死者数だけで言えば毎年の競技人口の2%にも満たず、事故や病気、紛争などの他の死亡要因と比べても大きく下回る。

しかし骨折など重大な怪我を含む重傷者は、年間の競技人口の約10%に及ぶ。つまりテニス競技者の十人に一人は、毎年必ず何らかの重傷を負っていることだ。この割合は他の競技を遙かに大きく上回り、また負傷率の高さゆえに、一度大きな怪我を負うとその選手生命を終える可能性すらありえる。

それでもなぜ、人々はテニスに魅了され、そして人生を賭す程の情熱を持つて競技に臨むのか。



テニス異能という言葉がある。

ご存知の通りテニスは人類史と共にある。これはテニスが人類がテニスと共にその文化、歴史を築いてきたことを表している。そして同時に、人類の長い歴史の中で、テニスもたま人類の発展に合わせて進化してきたのだ。

ラケットはその特有の構造から呪術的な回路を形成する。また、テニスボールを打つ動作とその軌道もまた一種の陣と儀を形成し、ラケットとボールの生み出す音は高度に圧縮された虚数言語として場に作用する。

結果これらの呪術的、科学的因素は空間に微弱な歪みを発生させ、物理法則に大きく干渉することが可能となるのだ。

これによりテニス選手は常人とは異なる力を発揮することを、古くは魔導師と呼ばれた者達は発見していたとされる。現代ではこれらの多くの現象については科学者らによつて解明されているが、それでも今だ謎が多い。

そしてこの事象を操るに至ったテニスプレイヤー達は、自らの自身と誇りを持つて「テニス異能」と呼ぶのであつた。

テニス異能はテニスを学ぶことでしか身につけることができない。テニス異能には大小様々なものが存在し、小さな事象は僅か数瞬の間だけ炎出現させると言つた程度であるが、高度な事象ともなると『巨大化する』『任意の人物の五感を奪う』『複数人に分裂しそれぞれが独立した思考を持つて行動する』『海賊幽霊船とそのキャプテンを召喚し任意の人物を攻撃する』など、その規模、内容は多岐に亘る。特に大規模なものは『巨大隕石を地球圏へと誘導し衝突させる』など國家規模の災害となりうる事象を引き起こすことが、可能であり、またその力を有するテニス選手は核に等しい一種の抑止力として国家の保有戦力として丁重に扱われることも少なくない。

これら強大なテニス異能を身に宿しテニスに愛された者達のことを人は畏敬を込めてこう呼ぶ。——『テニスの王子様』と。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

前述の通り、テニス異能は使い方次第では容易に人を殺める事が可能だ。そのため、アメリカにおいて自衛のための拳銃購入が当たり前であるように、多くの人々は自らを守るためにテニスを学ぶようになったことは自明の理である。勿論テニスを通じて地位や名誉を得ようとする者もまた少なくはないが。

このような理由から、テニスは未だ世界一の競技人口を誇るスポーツであり、恐らく人類がその存在を終えるまで、その地位は揺らぐことは無いだろう。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

尚、まったくの余談であるが、世界の頂点を極めたテニス選手達をその技量の高さから『ウイザード』と呼ぶことがあるが、これは前述の通りかつて魔術師と呼ばれた者達もまたテニス選手であつたことに由来する。

彼ら魔術師はテニスラケットを用いて様々な問題を対処していたことは歴史を紐解いても明白であり、また、よくゲームなどメディア作品に描かれる魔術師や魔法使いが必ずテニスラケットを持つているのは、このためである。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

テニスティロ組織『コートの夜明け』が多数の人質と共にショッピングモールへと立てこもつたとの連絡がテニス特殊部隊に入つたのは、事件発生からわずか三十分後のことだつた。

犯人の規模、要求ともに不明。だが、モール内に居た大勢の客を人質に取つたことだけは明確な事実である。

犯人の多くがテニスラケットを所持しているとの情報もあり、事態の早期解決のためには、テニス特殊部隊の出動が求められていた。



警察による犯人の要求と人質の安否の確認、人質の解放交渉が数時間に渡り行われ、テニス特殊部隊が派遣が決定されたのは事件発生から半日後の深夜となつた。

テニス特殊部隊は少数精銳の部隊である。その任務はテニスによるテロや犯罪を鎮圧すること。そして、テニスにより発生した事件の処理を行う。

この日、テニス特殊部隊の隊長を務める男——手塚国光は、部下来率いてモールへと向かつた。

「手塚さん、今回の作戦について何か質問はありますか？」

車の中で、副隊長である不二周助が問う。

彼は若くしてその実力を認められ、今回手塚の副官を務めている。「……そうだな。まず、敵がどの程度の人数で、どんな能力を有しているのか分からぬ。そのため、今回はいつもより多めに隊員を配置しておきたい」

「分かりました。では、そのように手配します。他には？」

手塚は一瞬考え込む。

そして、言つた。

「……いや、ない。あとは現場を見てからだな」

そうですか、と呟くと、副隊長は無線のスイッチを入れた。

「こちらA班、B班は予定通り配置についたよ。C班は準備できてるかな？うん、分かった。じゃあ、よろしくね」

その言葉に手塚は少し目を見開く。

「どうしたんですか？」

その様子に気付いたのか、助手席に座っていた大石秀一郎が問いかけた。

「いや、別に大したことじゃないんだが……」

「何ですか？」

「奴らの、『コートの夜明け』の目的がわからない。」

「目的、ですか。確かに、これだけの騒ぎを起こしておいて、ただの強盗つてことはないでしようけど……」

「ああ。それに、もし本当にテニスリストなら、目的はもつと別のところにあるはずだ」

「確かに。では、彼らの本当の狙いは何だとお思いなんですか？」

「さあな。まだわからん。ただ、一つ言えるのは、この事件の裏にはかなり大きなものが隠れているということだ。それが一体何なのかは、俺にも想像できないがな」

「……」

沈黙が流れる。

そして、それを破ったのは、やはり副隊長だった。

「手塚さん、着きます」

「了解」

車は速度を落とし、やがて停車した。

「全員降車！」

「はいッ!!」

全員が素早く車を降りる。

そこは、ショットピングモールの入り口前だった。



「まだ警察による交渉は続いているが、恐らくは決着はつかないだろう。奴らはどうも時間稼ぎをしている節がある」

手塚は集まつた面々に向かつて言つた。

「つまり、犯人達はそもそも交渉に応じる気はないということですね」「そういうことだ。このことは上も同じ意見だ。偵察テニス部隊による調査と情報共有が終わり次第突入する。総員、装備確認」

「はい」

返事とともに、手塚を除く全ての隊員が自身のテニスラケットの最終点検を始める。

「手塚さん、僕たちは何をすればいいでしょうか」

大石が問う。

手塚は静かに答えた。

「……どこにいてもサーブを打つことには変わりない。いつでも打てるようにしていろ」

「わかりました」

大石は納得すると、自らのテニスラケットを手に取る。

その時、手塚の元に一人の男がやってきた。

「手塚、そろそろいいか」

「真田。ああ、大丈夫だ」

手塚は小さくうなずく。

この男は真田弦一郎。テニス特殊部隊の隊長補佐を務める男だ。

彼のテニスラケットは特殊合金製。その強度と硬度は通常の金属を遥かに凌駕する。

「よし、行くぞ。目標はモール内正面入り口。各自サーブ打撃後は速やかに突入、人質の安全を最優先しろ。以上だ」

「はい!!」

テニス特殊部隊は駆け出した。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

モール正面、テニス特殊部隊でも特にサーブ力に秀でた者達はラケットを構えると、その先端をモールの外壁へと侵入していく。

そして、

「はっ!!」

鋭い掛け声と共に、そのラケットから放たれた威力を極限まで高めた一撃は、テニステロリスト達が設けたバリケードを軽々と吹き飛ばし、そのままモール内部へと侵入していく。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

テニスの打球は、その性質上通常の銃火器とは比べ物にならないほどの破壊力を持つ。そしてそれはテニスにおける攻撃においても同

じことが言えた。

テニスボールは音速の三倍近い速度で射出される。また、対テロ用に開発され今回の作戦でも用いられたこのテニスボールは、通常使用されるテニスボールよりも二回りほど大きい。更にその表面には、強力な衝撃吸収剤が塗布されている。

これらの要因が重なり、テニスボールは着弾と同時に爆発的な衝撃波を生み出し、弾丸のように高速かつ広範囲に渡つて飛散し、その殺傷力を高めているのだ。

勿論人に向かつて使用して良い物ではなく、国際ルールにおいては対人の使用を禁じており、今回もバリケードの破壊のみに用いられるのだった。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

手塚率いる部隊がモール内部に進入してから数分後、今度はモール内部の壁が爆ぜた。続いてモールの天井が崩れ落ちると瓦礫が落下し始め、辺りには土煙が立ち込める。

突入に気がついたテニステロリストの一部が反撃に移つたのだ。

テニステロリスト達もたまサーブを構える。テニスを用いた射撃戦ではサーブは距離の面において非常に有利だ。

しかし、それもすぐに止むこととなる。

手塚の背後から一人の隊員が飛び出したかと思うと、その手に握られたテニスボールをテロリスト達の頭上に放つたのだ。

その隊員の名は乾貞治。彼はコート（戦場）全体を俯瞰しコート（戦場）の状況を把握し、即座に適切な指示を下すことができる。また、その卓越した観察眼は相手の動きの先を読み、相手が最も嫌がることを瞬時に判断し実行することができる。

つまり、彼は『コート上のデータマン』なのだ。

乾のテニスボールはテロリストの頭部に着弾。テニス異能を用いて放たれたテニスボールは、容易に人体を破壊する。テロリスト達はその頭部の中身を撒き散らしながら崩れ落ちた。

乾は再びテニスボールを放つと、他の隊員達と共に店内へと入つていった。

A vertical sequence of 15 alternating black and white triangles pointing downwards. The pattern starts with a white triangle at the top and ends with a black triangle at the bottom.

「こちらA班、二階フロア制圧完了しました」

『B班、同じく二階を制圧しました』

『C班、一階の人質を救出。これより四階に上がります』

次々と入る報告に手塚は冷静に答える

「わが二女
日向は三階から揚譲してくわ」

二解！

達作をせしも
三塚に口を開いた
のミリニ簡易一ダツトム

「ええ、まるで手応えがありませんね」

副隊長である不二が相づちを打つ。

「敵の人数や武装から考えて、これが連中の全てとは思えない。恐ら

くは陽動だろう」

「ということは、本命はまだ別にある、と？」

卷之三

手塚の言葉に副隊長は微笑みながら言つた。

一では行きましょうか

一
九

一時間後、この間の列車を無視して三塙に到着する特
殊部隊は、モールの外にいた。

「手塚さん、これからどうしますか?」

大石が尋ねる。

手塚はそれに答えた。

……今田は国際テニス会議の最終日だ。おそらく、会場にもテニス

「そうですね。では、我々はそちらに向かうべきでしょうか？」

手塚は首を振る。

「いや、奴らの狙いは恐らくテニステロだけじゃない。大会そのものに対するテロの可能性も考慮すべきだ。」

「確かにそうですね。では、どうしますか？」

「部隊を分ける。公安テニス警察にも連絡を入れろ、おそらく彼らも動いているはずだ」

「分かりました」

「では、解散だ」

手塚の指示のもと、テニス特殊部隊は散開した。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

手塚らがモールに突入する数時間前。

警察庁警備局、特殊テニス事件捜査課に所属する警察官の橘桔平もまた、その任務に就いていた。

彼は現在、テニステロ組織による国際会議襲撃の警戒及び要人暗殺未遂事件の捜査本部を指揮していた。会議室には既に多くの捜査官が詰めかけている。

「……以上が、我々が掴んだ情報です」

橘はそう言つて説明を終えると、手元の資料を閉じる。

「……なるほどな」

そう呟いたのは、特殊テニス事件捜査課長の堀尾聰史郎警視である。堀尾は資料に目を落とす。

「まず、状況を整理しよう。今回の事件は、国際テニス会議最終日に、テニステロリストによる襲撃の予告があつたところから始まる」

「はい」

「その犯行声明によれば、テニスによる世界征服が目的とされている。これはつまり、テニスによるテロリストだ」

「テニステロリスト……」

橘は小さく呟く。

「そして、これに先立ち、各国の首脳が集まるテニスサミットにて、テニステロリストに狙撃されるという事件が発生している」

「はい。」

「犯人グループは、テニステロを実行するにあたり、要人の暗殺という手段を選んだようだな」

「その通りです」

「そして、今回の件でテニステロ事件の標的となつたのが、この国際会議場だ。恐らくなんらかのテニス異能によるテロが計画されていると思われる」

「はい」

「そして、手塚くんの調べによると、テニステロリストの構成員の中に、国際テニス連盟の理事の名前が確認されたらしい」

「国際テニス連盟の!?」

「そうだ。しかも、手塚くんの話によると、その男は今年の会長選にかけてかなり強引な行動を取つているとのことだ」

「会長選ですか……」

「ああ。そして、手塚くんはその男について、何か知つてているような素振りを見せていた」

「手塚さんが？ 一体どういうことなんでしょう？」

「さあな。だが手塚くんは信用できる男だ。少なくとも俺はそう思つていてる」

「はい、私も手塚さんのことは信頼しています」

「ならば、その手塚くんがお前に話さなかつたことを俺が話すわけにはいかない。」

「……」

「話を戻そう。とにかく、手塚くんの情報によつて、敵が国際テニス連盟の理事であることは判明した。よつて、その男の身柄を押さえ込むことが、奴らを追い詰める大きな一步となるだろう」

「わかりました」

「ただ、手塚くんが言つていたように、相手はテニスのプロ選手だ。確実に強力なテニス異能を使えると考えていいだろう」

「はい」

「そこで、今回、我々は公安テニス警察と協力し、テニス特殊部隊と共に合同の作戦を行つてもらうこととした」

「我々とテニス特殊部隊、公安テニス警察と合同作戦、ですか？」

「そうだ。手塚くんからの報告にあつたテニステロリストの中には、

国際テニス連盟の理事がいたのだろう。ならば国際問題にも発展しかねん」

「確かにそうですね」

「手塚くんが言っていたが、手塚くんは奴らのことにある程度把握していた節がある」

「手塚さんが……わかりました」

「そして、この作戦の総合指揮官は橘、お前だ」

「私が指揮官を、ですか？」

「お前は公安テニス警察にもテニス特殊部隊にも顔が利くしな」

「いえ、そんなことは」

「謙遜するな。とにかく、頼んだぞ」

「はっ！」

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

橘は部下達を集め、ブリーフィングを行っていた。

「それでは改めて今回の作戦を説明する。今回は国際テニステロ組織によるテロの防止および会場内に潜むテロリストの確保を目的とする。作戦目的は大きく分けて二つある。一つは、国際テニステロ組織の殲滅。もう一つは、今回のテロの首謀者とされる国際テニス連盟の理事の確保と確固たる証拠の入手だ。今回の作戦には公安テニス警察とテニス特殊部隊も参加することになつていて。また、この作戦の指揮は私、橘が執る」

橘は続ける。

「また、今回は公安テニス警察の協力により、テニス特殊部隊が突入した後も、引き続き広域でのテニステロ行為の阻止と、人質の救出に当たつてくれるとのことだ」

「はい」

「では次に、各班ごとに詳細な作戦内容を伝える。質問があれば隨時申し出るようだ」

橘は手元の資料を見ながら指示を出し始めた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

テニス特殊部隊によるモールの人質救出作戦から一時間後、橘は手

塚からの連絡を待つていた。

事前の連絡では、モールの制圧 자체は既に完了しており、テニスティリスト達も全員制圧されたとのことだ。しかし、テニスティリストのリーダー格と目されている男だけが見つからないのだという。

手塙からの説明によれば、モール内には人質を除いてテニステロリスト以外の人間は確認されなかつたとのことだつた。

橋は脇を組みながら考へる

(まさかとは思うが、手塚さんか取り逃かしたのか?)

しかし、手塚の実力はよく知っている。手塚のテニスホールは着弾と同時に爆発的な衝撃波を生み出す。もし仮に手塚が取り逃しても、その被害は広範囲に渡るはずだ。

たが手塚がそのようなヘマをするとも考えにくく、おそらく首謀者はそこにはいないのだろう。

橘は手塚に通信を入れる。

「手塚さん？ 橘です。何か分かりました？」

『橘か……すまない、まだ見つかっていない。』

「手塚さんの予想通り陽動だつたということでしょう」

『そうだな、奴らの本命はやはり国際会議場だ』

こちらも今作戦本部を設営したところです。これから国際会議場に向かいます

「わかつた」

通信を切った橘は部下達に言つた。

「これより我々は、
国際会議場の警備に移る。
総員直ちに準備しろ」

はい！

（）からか正急場か…）

「手塚、どうした？」

「こちらの調査が空振りに終わつただけだ」

手塚はそう答えたが、実際は手塚が取り逃がすことなどあり得ないのだ。

手塚はモールの制圧中、テニスボールを射出する際、モールの構造や天井の高さなどを事前に調査していた。テニスボールの威力を最大限発揮するためには、正確な弾道計算が必要となるからだ。

「相手が一枚上手だつたということだな」

「そういうことになるな。だが、相手は国際テニス連盟の理事だ。そういう簡単に尻尾を掴ませるとは思えないがな」

手塚はそう言うと、コート（戦場）を俯瞰して見ることのできる眼鏡型端末を外し、目を閉じた。

「……」

手塚は黙考すると、ゆっくりと口を開いた。

「どうやら向こうは俺達がここに残ることを知つているようだな」

「ああ。だが、どうしてだ？」

「テロリスト制圧の後の調査のため、どうしても隊長である俺は残らなければならぬ。俺がいない分、現場での初動は後手に回る可能性が非常に高い。それを見越してこのショッピングモールで人質事件を起こしたのだろう」

「だが公安テニス警察もいることだし、手塚ならなんとかしてくれるだろう？」

「もちろんだ。既に橘には了解を得てある。俺達も国際会議場に向かうぞ」

「了解」

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

橘ら特殊テニス事件捜査課の一一行が国際会議場に着くのと同時刻、国際会議場周辺ではテニステロ組織による大規模なテニステロ活動が行われていた。

国際会議場周辺の警備にあたっていた公安テニス警察は、橘の指示を受け、手塚らテニス特殊部隊が到着するまでの時間稼ぎをしていた。

「撃つてきました!! うわあっ!!!

一列に並んだテニスリストたちがサーブを放つ。

放されたテニスボールは、時速300kmを超える速度で飛来するが、公安テニス警察の面々はそれを難なく打ち返す。

「落ち着け！ ただの直線的軌道だ！」

「は、!!」
公安テニス部監察の一人が叫ぶと
他の隊員達は一齊に答える

四

しかし爆発性のテニス異能により放たれたサーブは、打ち返される度に爆発し、周囲の建物を破壊していく。手塚らが到着した時、国際会議場周辺は瓦礫の山と化していた。

酔い有様だな。

「はい……」

手塚の言葉に部下が同意する。

「C班、D班は公安及び捜査課の支援にあたれ。議場に突入だ。」

「はい！」



テ国際会議場に突入後、一人テニステロリストを無力化しながら進む手塚は、会議場内でテニステロリストと対峙していた。

一
国
際
テ
ニ
ス連
盟の
理事
金
田
龍
之
介
だ
」

手塚の目の前にいるのは、金田と名乗ったスース姿の男である。「やはり理事、あなたが今回の事件の首謀者で間違いないんですね？」手塚の問いに対し、金田は首肯する。

「ああ。私が今回のテロを計画した」

「なぜこんなことを？」国際問題に発展する恐れもあつたんですよ？」

て得られる利益は計り知れん』

「テロによる利益だと？」

「そうだ。君たちは知らないかもしれないが、昨今のテニス界は低迷期に入っている。それはなぜか？理由は簡単だ。プロの世界のトツ

「確かに最近は特に、海外の選手が強いだけで日本
う風潮がありましたが……」

「そうだろう？だから私は考えたのさ。今一度世界に、私の存在を示す必要があると。そして、私こそが世界最強の選手なのだと示すために、まずは私が自ら鍛え上げたテニスプレイヤー達が最強であることを見証しなければならない」

「……奴らのどこがテニスプレイヤーだ。ただのテニステロリストじゃないか。」

手塚は呆れながら『う
だな。』

「なんだと!?

「いいだろう教えてやる。テニスにおいて最後にたつていた者こそが勝者であり絶対強者であるということをな！」

「へやけぬなよー。」

手塚の怒りの声と共に、手塚と金田の戦いが始まった。

A vertical column of twelve alternating upward-pointing triangles and downward-pointing triangles.

国際会議場周辺でのテニス戦は激化の一途を辿っていた。橘らの抵抗に業を煮やしたテニステロリスト達は、大規模なテニス異能を発現させる。

テニスコート召喚と共に大量の爆弾が出現し、テニスボールが打ち込まれると同時に大爆発を引き起こす。

「あー！」一矢口！

「惜むな！ テニスボールを確実に処理しろ！」

橘は声を張り上げるが、橘の視界の端では橘ら公安テニス警察のメンバーが次々と倒れ込んでいく様子が映る。

倒れ公安局テニス警察以外のメンバーも戦闘不能に陥っていた。

卷之三

橘は唇を噛む。その時、橘の耳元にある通信が入った。

橘！

一手塚さん、どうしました？」

『テロ組織のリーダーを発見した。今から確保に行くが、逃げられる
と厄介だ。そこで、櫻には外の指揮と確保を頼みたい。うちのC班D
班の指揮権も預ける。頼んだぞ』

【一】
「わかりました。ごせらは任せてくれ下さい」

「C班 C班 聞こえたな！ 橋に指揮権を預ける しくじるなよ】

「よし、お前達は引き続きここでテロ組織の殲滅に当たつてくれ。た

「ま、
」

橘は通信機で部下達に向けて話す。

「手塚さんが首謀者を見つけた。確保するまでの時間と周辺の安全を確保する。手塚さんの作戦通りに動け！」

「了解！」



金田龍之介は国際テニス連盟の現理事であり、かつてはウイザードの称号を得た無差別級テニスの10年連続チャンピオンだった男だ。しかし、その栄光は長くは続かなかつた。

金田は試合中は陰參を詰めようとした相手を死に至らしめるという行為を繰り返し、ついには公式戦出場禁止処分となつたのだ。

しかし、その実力と功績とともに大きく、その後、金田は国際アーティスティック連盟の理事となるが、同時に裏社会との繋がりを持つようになる。

金田にとつて、表舞台に立つことは手段であつて目的ではなかつたのだ。金田の目的はあくまで、自分と自らの流儀が世界最強であることを証明することであつた。



「手塚くん、良い試合を仕様じやないか」

金田は背広を脱ぎ捨てると一瞬でテニス装備へと着替えた。優れたテニス異能を持つ者は、瞬時にテニス異能を使うに相応しい服装に着替ることができる。金田は全身黒一色の衣装に身を包んでいた。

「貴様、目的はなんなんだ？」

手塚は尋ねる。

「そんなものは決まっている。私は世界最強の存在になりたいのだがよ。そのためには、君の力が必要なのさ。」

「何を言つている？」

「テニス特殊部隊に所属する者、或いはそれに類する技術を学んだ者は、対人戦に優れているか故に公式のテニスの試合には参加することは出来ない。これは国際ルールにも定められている事は知っているね？」

「ああ」手塚は答える。

「だがそれがどうした？」

「手塚くん、例え公式の試合で世界チャンピオンになつたとしてもそれは最強の証明にはならないんだよ。例えば君やテニスギヤング、テニスアサシンなどのように表舞台に立てない者達がいるようにな。」

「なるほど、それでテロ組織を組織したのか。」

「そういうことだ。私はこの力でテニスルールを破壊し、誰もが平等にテニスで殺し合える世界を創ろうと思っているのだよ！」

金田はそう言うと、サーブを放つた。放たれたサーブはテニスボールの形状こそしているが、明らかに威力が桁違いであった。手塚は咄嗟にラケットを盾にして防ごうとするが、衝撃に耐えきれず後方へ吹き飛ばされてしまう。

「さて試合を始める前に、もう少し準備をしようか。はああ！」

空間が歪み辺り一帯がテニスコートと化す。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

通常、テニスコートを呼び出すなど継続的かつ大規模な空間干渉は、空間干渉に秀でたテニス異能を持つプロのテニスプレイヤーが数人必要となる。特にテニスコート召喚はテニスコートが用意できな場合などの非常時に緊急措置として用いられるだけで、通常は行わ

れない。

しかし、テニス異能が最も効果的にその力を発揮するのもまたテニスコートである。極一部のテニスを極めた者達はその力を最大限に発揮する為、自らの力で自分に適したテニスコートを召喚するのは当たり前の事だつた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

「先手は君にあげよう、打ちたまえ」

金田は余裕の表情で手塚に語りかける。

「舐めるな！」

手塚は叫びながら金田に向かつて駆け出し、テニスボールを射出する。

「無駄だ」

金田はテニスボールを打ち返す。打ち返されたテニスボールは手塚の脇腹に命中し爆発した。

「うつ……」

手塚は膝をつく。

「手塚くん、その程度かね？最強のテニス特殊部隊隊長と聞いて期待していたのだが」

金田は手塚を見下ろしながら言つた。

「くつ……まだだ！」

手塚は立ち上がり再び金田に歩み寄る。

「無駄だと言つているのがわからないのかい？」

金田は再びテニスボールを放つ。しかし、今度は手塚はテニスボールを打ち返す。

「何？」

金田は驚きの声を上げた。打ち返されたテニスボールは金田の頭上を越え、金田の背後で静止すると爆発を起こす。

意識外からの爆風。金田はよろめきながらもなんとか踏み止まる。

手塚はニヤリと笑うと叫んだ。

「手塚ゾーン!!」

手塚の周囲に無数のテニスボールが浮遊する。

「手塚ゾーンだと!?」

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

手塚ゾーンとは手塚国光が自身のテニス異能を用いて編み出した技で、小規模ながら自身の周囲に自分に優位なテニス空間を生み出し、相手の攻撃を無効化するとともに反撃を行う手塚独自の技である。手塚はこの技により、数々の難敵に対して勝利を収めてきた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

「ほう、私のテニスコートの中で独自のテニス空間を展開できるか……。面白い、やつてみろ！」

金田はテニスボールを放つ。手塚は飛来するテニスボールを次々と打ち返していく。

「どうだ！」

手塚は叫ぶ。

「ふむ、なかなかやるようだな。ならばこれでどうだ？」

金田はコートを海に変える。

「手塚ゾーン！」

手塚は叫ぶが、金田の作り出した海によつて手塚の周囲の空間が遮断される。

「手塚ゾーンは使えないぞ？ 残念だつたな」

金田の言葉通り、手塚の生み出したテニス空間は、金田の作り出した海水によつて消失してしまつていた。

「手塚くん、もう終わりかな？」

「まだまだだ！」

手塚は飛び上ると、空中からテニスボールを射出する。

「なんだそれは？ そんなもので私を倒せるとと思うな！」

金田はテニスボールを弾き飛ばす。

「いや、それでもないさ」「何？」

金田は弾いたテニスボールがいつの間にか軌道を変え、金田の背後に回つていることに気がつく。

「まさか……手塚ゾーンは水の上だけじゃないという事か？」

「そうだ」

手塚は着地と同時にテニスボールを金田に打ち込む。手塚は手塚ゾーンをテニスボールに纏わせることで、テニスボールの軌道を操作していたのだ。

「ぐわあつ!!」

テニスボールを受けた金田は大きく吹き飛ぶ。

「…先程の言葉は撤回しよう。良いぞ！良いぞ！実際に良い!!君は私の宿敵に相応しい！」

金田は立ち上ると笑いながら叫んだ。

三葉は二二ノジ
一
一
一

三塙は六二不永之孚を躬當しながら、今日に近づいていく

う一・】

始める。



金田は量子理論を応用し確率論的に希薄になることでそこに存在するが同時に存在しない状態を作り出すことにより、あらゆる物理攻撃を防ぐことができるテニス異能を用いた。勿論、通常空間では行うことには出来ず、金田自身のテニスコート空間があつてこそ、可能な芸当である。



「手塚くん、君は最高だよ。だからここで死ね！」

金田は手塚の眼前まで来ると、テニスホールを手塚の身体に叩き込んだ。

「ぐつ！」

金田の放ったテニスボールは手塚の胸元に当たり、爆発を起こした。明らかに致命傷である。金田は勝利を確信し、ニヤリと獰猛な笑みを浮かべた。

しかし、何事も無かつたかのように手塚は立ち上がりつてみせた。



手塚ゾーンにより生み出されるテニス空間は、ある種の手塚の支配下にある世界であり、つい先程金田が行つた量子理論の応用による物理攻撃無効化を、手塚は手塚ゾーンを用いることで再現して見せただ。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

「バカな……何故生きている?」

金田は狼驚する。

「金田、いや金田さん、あなたはすごいテニスプレイヤーだ。俺もまさかこんなことが出来るなんて思わなかつた。出会い方が違つていれば、あなたが道を誤つていなければ、あなたから色々なことを学べただろう。だから……」

「手塚くん、何を言つている?」

「……だからここで終わらせる」

手塚は金田に歩み寄り、金田にテニスボールを撃ち込み続ける。「なにを、私は、私は、世界最強の」金田はテニスボールを受けながら呟き続けた。

金田が手塚ゾーンの海に飲み込まれた時、手塚は呟いていた。

「金田さん、あなたは強かつた。」

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

国際テニス連盟本部ビル屋上。

そこには確保された国際テニス連盟現理事・金田龍之介の姿があつた。金田は拘束され、公安テニス警察に囲まれていたが、金田は満足げな笑みを浮かべていた。

「金田龍之介、お前には色々と聞きたいことがある。大人しくしてもらおう」

橘は金田に詰め寄る。

「橘くん、私はね、ようやく理解したよ。私が求め続けていたものが何かをね」

「金田龍之介、それは一体なんなのだ?」

「強さだよ。誰よりも強くありたいという想いこそが、私を強くしてくれたのだ」

橋は金田の発言の意図がわからず首を傾げる。

「そして想いは引き継がれるからこそ価値が生まれると……手塚くんにはすまない、そしてありがとうと伝えてくれ」

金田は静かに目を閉じた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

国際テニス連盟本部はテニステロリスト達のテロ活動により壊滅状態となつた。死傷者の数は不明。国際テニス連盟は機能不全に陥り、世界中が混乱に陥つた。

しかし、手塚が金田を倒したことによつて、テニス界に平和が訪れたのもまた事実であつた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

「手塚さん、今回の件、お疲れ様でした」

金田逮捕後、手塚は特殊テニス捜査課のオフィスにいた。

「ああ、今回ばかりは流石に死ぬかと思つたがな」

「またそんな冗談を……」

「まあ、あれだ。彼は少なくとも俺以上の技術を持つていた。それを学ばなければ、あの場で俺は死んでいただろうな」

「手塚さん以上ですか……」

「ああ、だが次は負けないさ」

手塚はそう言つて不敵に笑う。

「ところで、手塚さん。例の殺人テニスボール事件についてですが

……」

「ああ、あれか。資料を頼む」

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

戦士に休息はなく、人々の平和を守るため、彼らの戦いはまだ終わらない。

～続かない～

ヒカルの碁　v s 咲—S a k i —

ヒカルは一手目を置くと咲は「ふーん」と呟いた。

「へえ、これがあなたの打つた一手なわけ？」

「そうだよ。本因坊秀哉さんの一局だ」

「じゃ私は……チー」

そう言つて咲は牌を切る。

囲碁 v s 麻雀の異種格闘技戦は意外にも序盤から白熱した展開を見せていた。どちらも実力伯仲といつたところで、なかなか勝負がつかないのだ。

二人とも序盤は定石通りの展開を見せるものの、中盤以降になると奇策に打つて出ることが多かつた。特にヒカルの方はその傾向が強く、そのせいで咲に遅れを取ることもしばしばだつた。

「ねえヒカル君、あなたは囲碁いつから始めたの？」

「今年に入つてからだよ。ほら、去年の年末にオレが風邪引いて寝込んだことがあつたろ？　あの時に佐為が囲碁のこと教えてくれてさ」「あら、それはいいわね。私もやつてみようかしら」

「ああ、うん。でもお前にはちょっと難しいかもなあ」「ヒカル君も麻雀やつてみる？」

「いや……遠慮しとく」

ヒカルは苦笑して首を振つた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

囲碁と麻雀は似通つた遊戯であり、実際このように異種格闘技戦のような対局を行うことが出来るのだ。

しかし両者の間には決定的な違いがある。囲碁の場合は盤面が広大であるが故に相手の石の配置を読むことが容易であるのに対して、麻雀の場合には卓上に限られたスペースしか存在しないため、相手の石の位置を把握することが困難であるのだ。またリーチをかける際など、両手を用いる必要のある局面も多く存在する。そのため囲碁では有効とされる戦術が麻雀においては悪手に映るというケースがしばしば発生するのだ。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

「それでき、囲碁つて結局何かしら？」

「囲碁が何なのか、か……。うーん、説明が難しいんだけど、まあ一言で言うなら”人間社会の縮図”かな」

「人間の社会……？ なんかもつとこう抽象的なものじゃないの？」

「抽象的というよりもしろ単純と言った方がいいかもしない。囲碁は複雑なゲームだけど、そこにはパターンがあるんだよね。ルールブックを読めばすぐにわかるけど、それぞれの石には役割があつて、それを如何にして活用していくかというところにゲームの面白さはあると思う」

「ふうん……」

咲は腕組みをして考え込んだ。

「それじゃあ例えさ、ヒカル君は自分の石を何に使う？」

「そりやもちろん敵の石を攻撃するよ」

「どうして？」

「だつて敵がいるから。敵を倒さないことには何も始まらないじゃないか」

「そういうことね。何となく理解したわ」

「咲お姉ちゃん、逆に麻雀って何なんだろ？」

「麻雀もね、人間社会そのものよ」

咲はそう言うとニッコリ微笑んだ。

「どういうこと？」

「要するにみんな自分の利益のために行動するの。誰よりもたくさんお金を儲けた人が偉くて、他人を出し抜いて利益を得た人こそが勝者になるの。つまり勝つためには手段を選ばないのよ」

「ふうん、なんだ」

「だから私はいつも負けないように頑張ってるわ。他の人にどんな汚い手を使われても決して負けたりしないで最後まで勝ち残るように心掛けているの。たとえ相手が子供であつても容赦はしないわ。……さて、おしゃべりはここまで。勝負を再開しましょ？」

「そうだね」

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

二人は再び黙々と石を置き牌を切り続けた。

それから三十分後、ヒカルの石はほとんど無くなり、形勢は明らかにヒカルの方が不利になつていて。一方咲の方は相変わらず優勢を保つたままで、このまま行けば間違いなく咲の勝利に終わるだろうと思われた。

だがその時突然、ヒカルは捨て身の一手を打つた。

「カン！」

咲が驚いて顔を上げた。

「あら？……まさかこんなところで鳴くとは思わなかつたわ」

「オレはもうここで終わりだと思ってる。だからこの手で一気に決めるつもりだよ」

それはヒカル起死回生の一手だった。確かにこの一手が入れば形勢は大きく逆転することになるのだが、同時にこれまでの手順を全て無に帰してしまう危険もある。そのことは当然咲にもわかつていた。そして咲がそんなリスクの高い一手に安易に乗るはずがないということをまたよく知っていた。

「ごめんなさい、私の勝ちね。ロンです」

しかし咲は冷静な表情のままそう宣言すると、ヒカルが打った石のすぐ隣にある石を素早く打ち返した。

「えつ？」

ヒカルはその予想外の動きに思わず声をあげた。

「はい、これであなたの石は全部落っこちたわ」

「でもまだオレにはツモが残つているはずだよ」

「いいえ、あなたにはもう次のツモはないわ。なぜならヒカル君が切つた石が当たりだから」

「ええー……そんなあ」

ヒカルは情けない声で言つた。

「嘘みたいだけど本当よ。私が引いたドラ表示牌の中に『西』があつたでしょ？」

「うん」

「あれは実は私にとつては一番欲しくない牌だつたの。だからあなたに切られてすぐ困つたわ。でも、だからこそ逆にチャンスでもあると思つたわ」

「……どうして？」

「もしもヒカル君が自分の石の心配ばかりして、その辺に転がつてゐる石ころなんかを適当に手に取りながら切つてたら、おそらく私はそこで勝負を決めていたわ。でも、あなたは最後の最後でちゃんと私の石を狙つてくれた。それが嬉しかつたし、何より楽しかつたわ。ありがとうヒカル君」

そう言つて咲は優しく微笑んだ。

「そつか。オレ、咲お姉ちゃんのことずっと強いなつて思つてたけど、本当は全然違つたんだね。咲お姉ちゃんはただ単に強かつたんじやなくて、自分の石を守るために必死になつて戦つてただけなんだ。相手の石を取ることしか考えてなかつたオレとは違うんだね」

「そうよ。私はいつだつて自分が一番大事。だから今度からはもつと氣をつけることにするわ。それにしても、囲碁と麻雀が人間の社会そのものなら、囲碁と麻雀はどうやら相容れないものらしいわね」

咲はクスリと笑つた。

「囲碁は相手の石を取つて自分のものにすることしか考えていなければ、麻雀にはもつと大切なことがあるから……さてもうひと勝負する？」

「いや、今日はもういいや。オレが勝てる日が来るとは思えないもんなあ」

「それじゃあ今度は一緒に麻雀やつてみる？」

「うーん……ちよつと待つて。考えるから」

「別に無理に考えなくともいいのよ？」

「いや、そうじやないんだ。ちよつと思いついたことがあつてさ。今からやつてみるから見ててくれるかな？」

「何を？」

「オレが囲碁以外のことでの誰かに勝つところ」

「へえ、それは楽しみみね」

ヒカルの碁　ＶＳ　遊戯王（デュエルモンスターズ）

「俺のターン……ドロー！」

遊戯は高らかに宣言し、山札からカードを一枚引き抜いた。そしてそのカードを確認し、不敵に微笑む。

「来たぜ！俺は魔法カード『死者蘇生』を発動する

「死者蘇生だと!?」

ヒカルが思わず声を上げた。それは誰もが知っている強力な魔法カードの一枚だったからだ。

「このカードは自分の墓地に存在するモンスターを一体特殊召喚できる。蘇れ！ 我がブラックマジシャン!!」

墓地よりブラックマジシャンが復活し、遊戯のターンは終了した。ヒカルのターン。碁盤上の遊戯とヒカルの状況は互角であり、次の一手で勝敗が決まると思われた。

ヒカルは碁石を握り締めると静かに言つた。

「……オレも本気で行くぞ」

ヒカルの一手は、かつてないほどの速さで打ち出された。
「なつ……何だあの速度!?」

あまりの早さに誰も打つことができず、一瞬の間が空いた。

天元に打たれた一手は遊戯のブラックマジシャンを破壊しライフに直接ダメージを与えた。

「うわああああーーッ!!」

遊戯はライフポイント、残り2200まで減っていた。

「へへっ、これがオレの全力だぜ」

「くつ……」

遊戯は悔しそうに歯噛みした。

（これがプロの実力かよ……）

「だが勝負はまだ終わっていないぜ!! 次は俺の番だ！」

遊戯は祈るようにカードを引く。

「ドロー！……来たぜ！俺は魔法カード『融合』を発動する

「融合だと!?」

ヒカルが再び驚きの声を上げる。

「自分のフィールドまたはデッキから素材となるモンスターを二体選択し、それらを融合させる事ができる。俺は場のブラックマジシャンと、デッキからブラックマジシャンガールを選択して融合を行う!!」「なんだつてええええーーー!!」

場に現れた二つの黒い渦の中に、ブラックマジシャンとブラックマジシャンガールの姿が見える。

「黒き魔術を操る魔導師よ、可憐なる魔法使いの少女よ、今一つとなりて闇夜を切り開く新たなる力を生み出さん!!融合召喚!!ブラックマジシャンブラックガール!!」

遊戯の場に新たに現れたのは、漆黒のローブに身を包んだ美しい少女だった。

「これが俺の新しいエースモンスターだ!!」

遊戯は自信満々といつた表情を浮かべていた。

「なんだよそれ……」

「ブラックマジシャンブラックガールで碁石を攻撃する!・ブラック・バーニング!」

遊戯の指示を受け、ブラックマジシャンブラックガールの攻撃が始される。杖を振りかざすと、そこから炎が飛び出していくつかの碁石を包み込んだ。

「うわああああっ!!!」

碁石は一気に燃え上り、その勢いによって全ての碁石が吹き飛ばされてしまつた。

「これでお前を守るものは無くなつたぜ!さあ、どうする?」

「くそおおおおつ!!」

ヒカルは追い詰められていた。しかし、その時ヒカルの脳裏に一つの考えが浮かぶ。

(待てよ?こいつ、確かまだデッキに切り札を残していたはずだ……。ならその切り札が出てくる前に勝負を決めるしかない!)

ヒカルの一手は速かつた。まるで初めから決めていたかのように迷いなく打つたのだ。ブラックマジシャンブラックガールを白石で

囲い込むような布陣であつた。

……オレの勝ちだ！」

ヒカルは勝利を確信していた。

「ふうん、それで？」

対する遊戯は余裕綽々といつた様子である。

「お前の父親はこれまで絶れにが、」

一レヤ
「わたくしナセ」

碁盤に刻まれたのは白の一手。しかしその動きは先程までのものよりも遥かに速く、そして正確無比なものとなっていた。

遊戯に驚愕の声を上げた ヒカル
であればもう使える手は無いはずだ。

「なにい！？」

「相手の場の最も攻撃力の高いモンスターを破壊することができる。破壊するのは勿論ブラックマジシャンブラックガールだ」

遊戯の場には最強のカードが存在する。それは当然ブラックマジシャンブラックガールのことである。

「オレの最強モンスターが……破壊されただと!?」

「西暮　ＶＳ　テニエルモンブターリスの時に適応される特殊ルール『モンスター破壊時にはライフダメージとなる』が適応され、お前のライフケイントはゼロとなつた！」

遊戯は敗北した。ヒカルの勝利が確定した瞬間であつた。

「負けたぜ」

遊戯はそう言つて笑つた。

「いやあ、いい勝負だつたぜ」

二人は握手を交わした。友情が生まれた瞬間であつた。

「ところで、どうして、んな」とをしたんだ？」

ヒカルは疑問を口にする。

「俺はデュエリストとして高みを目指そうと日々修行に明け暮れてい
る。そんな中、たまたま見つけた囲碁のサイトで、プロ棋士とデュエ
リストの対戦という企画があることを知った。これは是非とも実現
させてみたいと思ったんだ。だからこうして実行に移したのさ」
「そういうことだったのか。まあでも、別に悪気があつたわけじやな
いのなら許してやるよ」

「ありがとう。助かるぜ」

「オレの方も、勉強になつたぜ」

「そういえば、囲碁と将棋ではまた戦法が違うらしいな」「
そうだな。次は将棋に挑もうと計画しているところだ」

「へえ、そうか。頑張れ！」

「ああ、お互いな」

「じゃあ、オレは帰るぜ」

「ああ、俺もまた修行に励むとするぜ」

「じゃあ、また会おう！」

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

二人の熱い戦いは終わつた。

こうして囲碁界に新たな伝説が誕生した。

gd gd 宴会 ガンダム編

「フイン・ファンネル！」

そう叫びながらアムロはシャアを殴り飛ばした。

「な、何をするんだ！この暴力男め」

「それはこつちのセリフだ！人の気持ちも知らないで」

「人の気持ちだと？私は君が喜ぶと思つてやつた事なのに何故怒るのだ？」

「だからそれが余計なお世話だつて言つてんだよ！」

酒場の一角で突然始まつた酔っぱらい同士に喧嘩に、客達はざわめき始める。

「いいかよく聞けよ。俺とお前では住む世界が違うつて事を」「何を言うか！私には君の言つている事が理解出来ないぞ！」

「いいから黙れ！」

再びアムロはシャアの胸ぐらを掴む。

「ララアはお前の母親じやない。なに年下の女の子にバブみを感じて母性本能くすぐりまくつてんだよ！お前はオギヤりたいのか!?」

「うつ…………」

「シャア、男として情けないとは思わないのか!?こんな小さい子に甘えて嬉しいなんて思うなんて、それじゃあまるで赤ん坊じやないか

!!

「ぐぬう…………」

シャアの顔がみつともないほど赤くなる。

「赤い彗星が赤くなつたぞー！」

誰かが叫ぶ。

「わ……私はそんな事は思つてないぞ！ただその…………ララアは優しくしてくれるし、色々と面倒を見てくれるからつい……」

シャアの言葉を聞いてランバ・ラルが口を挟む。

「確かに彼女は優しい子ですな。しかしいくらなんでもちよつとやり過ぎではないですか？たしかに嫁というものは素晴らしいですぞ。ただあまりにも甘えすぎるのもどうかと思いますな」

「ほら見ろ！やつぱり甘えん坊じやないか！」

「ノルマ...」

シャアは頭を抱えてテーブルに突つ伏す。そつとアムロはシャアにビールを差し出す。

「とにかく飲め。そして落ち着け」

シヤアは無言のままシニッキを受け取ると一気に飲み干した

よしよし良い手だ

アムロはシャアの頭を撫てる

近くの席に座つていいた男が言う。

「すまない。迷惑かけた」

譲りたから」もアムロの目には完全に「こいを殺していい」と

「いや別に邪魔とかそういうんじゃなくてさ、あんまり騒がれると他の客にも迷惑だし」

あ／＼も一粒食ひなが

アムロは男の少年たるヒカルを注ぐ

「ああどうもありがとう」とここでさつきの話だけとぎ シヤア大佐もララアさんの事もう少し考えてあげてもいいんじやないか？あの人はまだ子供なんだしさ」

!

シヤアは拳を握つて力説する。

だからそれが駄目だつて言つてんだろうがあ!!」

A vertical column of 15 alternating black and white triangles pointing downwards, arranged in a repeating pattern.

それから二時間後、酒場の中は静寂に包まれていた。そこには酔いつぶれて眠っている者、ひたすら酒を飲み続ける者などがいた。そんな中、カウンター席では二人の青年が静かに飲んでいた。

•
•
•
•
•

ぶつくさ言いながらアムロはビールを飲む。

「貴様は自業自得だろう？」

シャアは呆れたように言つた。二人は結局あれからも仲良く口論を続けていた。

「アムロ、貴様こそアルテイシア……セイラにチエーン、ベルトーチカと女に手を出したい放題ではないか。しかも全員美人ばかりときている。貴様には節操という物がないのか？」

「うつさいわボケエ!!お前なんか口リコンじやねえか!!」

「認めよう、若さ故の過ちというものを。私は確かに口リコンではあるが何か問題でもあるのか？」

「開き直つたぞこの野郎!!」

また始まつたかという顔をしてバーーンは一人から離れていく。「だいたい貴様はいつもそうやって自分の欲望を満足させておいて……。だから女性関係が上手くいかないのだぞ！」

シャアは勝ち誇った顔で言う。

「アムロ、ひとつアドバイスしておく。バブみはいいぞ。ララアもクエスも私の母になつてくれた人だ。君も一度試してみるといい」「死ねッ!!」

アムロはジヨツキに残つたビールを全て飲み干すと勢いよくテーブルに置いた。その衝撃でジヨツキが割れてしまう。

「アムロ、セイラに、私の妹に手を出した君は私の義弟となるのだよ。お兄ちゃんと呼べ」

シャアはニヤニヤしながら言う。

「なら、こは義兄の奢りだな」

シャアは驚いたような表情を浮かべる。

「……ふむ、それもそうだな。よからう好きなだけ飲むといい」

シャアは財布を取り出すと数枚の札を取り出した。それをアムロに差し出す。

「シャア、それはエゴだよ」

アムロは差し出された金を握り潰した。

「僕は金が欲しいわけじやない。ただお前が羨ましいだけだ。俺には

もう家族はいないからな

シャアは何も言わず黙つてアムロを見つめていた。

「……君のお父上はこの間『このバーツをつければガンダムの機能は数倍になる』とマ・クベと変なツボを持つてきたでは無いか？」

「俺にはもう家族はいないからな！」

「……アムロ、君は誤魔化すことが下手だな。そんなに分かりやすい嘘をつくものではないぞ」

シャアは立ち上がる。そして店の入り口に向かつて歩き始めた。

「シャア、どこにいくつもりだ？」

「少し風に当たつてくる。心配はいらんすぐに戻る」

シャアは店の外に出ていった。

「全く……何しに来たんだよあいつは……」

アムロは残つたビールを飲み干す。

「大佐は坊主と飲んでる時だけ素直になれるお方だからな」

ランバ・ラルが話しかけてきた。

「そうなんですか？」

「ああ、昔からあの人はああいう性格だつたからな。他人を寄せ付けない感じがあつて、部下にも友達と呼べる奴はいなかつた。だが坊主と出会つてからは少しずつ変わつていつた」

「そうちだつたのですか……」

「取つ組み合いの喧嘩が出来たのは大佐にとつて初めてだつたのかもしだんな」

「……」

「まあ、たまにああやつて爆発することもあるけどな。それくらい許してやれ」

「ええ……」

「それとな、大佐の事は頼むぞ

「え？ 何をですか？」

「バブミトークに付き合つてやるのも友人としての務めだ」

「はあ！？」

「俺はこれから女房のところに行くが……ぐれぐれも大佐の事を頼ん

だぞ

「ちよつと待て！…どういう意味だそれは！」

「じゃあな」

店を出ようとするとランバ・ラルをアムロは引き止めとするが酔つ
払つたブライトと黒い三連星に絡まってしまい、カウンターに引き戻
される。

「ブライト、アムロ、マッシュ、オルテガ、ガイア、ジエットストリー
ム乾杯を仕掛けるぞ！」

「誰!?」

「ジオンの栄光に」

「いらねえ！」

「連邦の勝利に」

「違う！」

「我らのシャア達に」

「シャアは一人しかいない！」

「ガンタンク万歳！」

「ドムの出来損ない！」

「うるせえ！」



こうして夜は更けていき、翌朝アムロは酷い二日酔いに悩まされる
事となつた。

けものフレンズ 「このあらいを作つたのは誰だ！」

「このあらいを作つたのは誰だ！」
「アライさんなのだ！」

海原雄山は絶句する。この店でフレンズ——またはアニマルガールと呼ばれる彼女が雇われたのは昨日のことだと聞いた。たった1日だけの経験でここまであらいを仕上げてきたのだ。それはまさしく天性の才覚であるように雄山には思えた。

これが何年も経験のある板前の仕事であれば当然のごとく怒りをぶつけるところであつたが。

彼女はまだ若い、しかもその才能はまさに原石だ。こんなところで燻っているべき人材ではない。雄山はそう考えた。
そしてこう言つた。

「君、うちに来る気はないかね」

アライさんは驚いたような顔をして雄山を見た。

「うちつて……？」

「私の經營している店だよ。私は料理評論家をしているんだがね。アライさんと言つたね、君には才能がある。私の元で修業しないか？
もちろん住み込みでいいぞ」

「本当なのだ！」

アライさんの目が輝いた。

「ああ、本当だとも。うちなら設備もあるしな。どうだ、来るかね？」
「ちよ、ちよつと待つてくださいよ海原先生！」

店長が慌てて引き抜きを止めようとする。アライさんは入店したばかりとはいえこの店の板前見習いであり、何よりもまだフレンズに対する法整備が十分でない昨今、安い給料で働くことが出来る貴重な人材なのだ。

それが引き抜かれてしまえばたまつたものではない。
だが雄山はそれを手で制すると、

「なんだね君は？ 今は彼女話をしているのだ、黙ついてくれないかな」

と威圧的な態度を取つた。店長はその剣幕に思わず息を飲む。

「あー、えつとですね。まず彼女の意思を聞いてからじゃないですか？ ほら、アライさんだつていきなりそんなこと言われても困るでしょうし……」

店長は引きつった笑みを浮かへながら言う
「雄山はそれを見てやれやれといった表情をする。」

「では聞くぞ、アライさん。給金も倍額以上だそう。他に要望もあるば聞くが？悪い話ではないと思うのだがね」

アライさんは少しの間考え込んだ後、口を開いた。「フェネックも一緒に連れてきてもいいのだ？」

「あとは……」こよりも広いところに住みたいのだ！ それにお腹

「つづつ。すゞ、手配しよう」
いつはい食べられる場所が良いのだ!!

雄山は大きく首肯する
それを聞いたアテイさんは嬉しそうな顔
になつた。

「じゃあ行くのだ!! これからよろしくお願ひしますなのだ!」

三表は二の表二に並んで二の表

た。何より安い人材を失うのは痛い。

だが相手はこの業界でも屈指の権威を持つ男である。下手に逆らつて店を潰されてしまつては元も子もない。

卷之二十一

だが店長も人の子だろう。少なくとも食うに困らないよう貰いだけはしつかりとアライさんに食べさせるつもりではあつた。2人が店を出て行つた後も店長は大きなため息をついた。

A vertical column of 15 alternating black and white downward-pointing triangles, arranged in a repeating pattern.

「という訳でフェネック、今日からここがアライさんとフェネックの愛の巣なのだ」

「あいすぼーる?」

アライさんは自慢げに胸を張る。フェネックと呼ばれた少女は不思議そうな顔をしてその言葉を繰り返した。

ここは高級ホテル『白雪』の一室である。

海原雄山のツテを使ってこの部屋を借りることは簡単だつた。新しい住処が決まるまで、暫くこのホテルに滞在し、板前として腕を磨くことになつたのだ。

「そうなのだ。フエネットクもホテルのお仕事頑張るのだ」

ただ、無駄飯食らいとなることもまた彼女らのプライドが許さず、フェネックもホテルに滞在する間は雑用などの手伝いをすることとなつた。

さて、明日から忙しいのだ。早く寝るのだ」「んう……」

ベッドに入ると、フエネットはすぐに眠つてしまつた。アライさんはしばらく目をぱちくりさせていたが、やがて自分も眠りについた。

A vertical column of 15 alternating black and white triangles pointing downwards.

一ヶ月後、アライさん達の新居が決まる頃には、高級ホテル『白雪』にアライさん達はすっかり溶け込んでいた。元々料理の腕はかなり良かつた上に接客業にも慣れており、たちまち人気者となつたのだ。海原雄山の紹介ということも大きかつたが、それ以上に彼女ら自身の人懐っこさが客達の評判を呼んだ。

らも可愛がられていた。

また、『アライさんのあらい』は冗談とも取れる料理名に反して、板前としての腕と才能により生み出された逸品は、リピーターを生み出していた。

A vertical sequence of 15 alternating black and white triangles pointing downwards.

新居が決まりホテルを去る日、アライさんとフエネットクは多くのホテルの従業員たちに見送れた。

「寂しくなるわねえ」

「まあしようがないんですけどね……」「元気でやるんだぞおー！」

アライさんは一人一人の目を見て挨拶をする。その中にはホテルの支配人もいた。

「短い間でしたが大変お世話になつたのだ！ありがとうございしたなのだ！」

「いいえ、こちらこそ。アライさん、あなたのおかげでこのホテルは救われたようなものよ。本当に感謝しているわ」

「そ、そんなことはないのだ。皆が頑張ったおかげもあるのだ」「それでも、あなたの力が大きいことは間違いないわ。いつでもうちに戻つてらっしゃい」

「うん、ありがとうございます」

アライさんは笑顔で答える。

「そうだ、これを持って行きなさい」

「これは？」

アライさんは支配人から渡された木箱を手に取る。

「アライさん、貴女はまだ自分の包丁を持つていなかつたのでしょ？だからこれをプレゼントするわ。それは私の夫が昔使っていたものだけれど、まだ使えるはずよ。大事にしてちようだいね」

「良いのだ？」

「もちろん、私からのせめてもの気持ちよ。受け取ってくれるかしら？」

「ありがたく頂戴するのだ。大変お世話になりましたなのだ！」

「ええ、どうかお幸せにね」

アライさんは頭を下げる、後ろで待つていたフェネックの手を取りつて、車に乗り込む。

「じゃあ行くのだ」

「うん」

車は走り出す。その背中に向かつて支配人は大きく手を振つた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

一年後、板前としてもシェフとしても腕前を磨き上げたアライさんは、海原雄山の紹介により主任料理人として店を一つ任されるようになつていた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

「雄山先生、今日はなんの用なのだ？」

アライさんの店の控え室、アライさんは訪ねてきた海原雄山を出迎えていた。粗茶ですが、とフェネックの出したお茶をひと口飲むと、雄山は言つた。

「ああ、君に折り入つて頼みがあつてね」

「な、何か怖いのだ」

「そんなに身構える必要はないよ。実はだね、私に新しい仕事の依頼が来たのだが、これが少し厄介でね。そこで、アライさん。君にこの料理勝負に参加して欲しい」

海原雄山が取り出したチラシには『味王料理決定戦』の文字が並ぶ。「何のだ?」この『味王料理決定戦』というのは

「その名の通りだ。世界各地から集まつた料理自慢たちが競い合う大会だよ。世界有数の味王グループが主催を務める大会でもある」

「それで、アライさんに何の関係があるのだ」

「君は板前としての腕も素晴らしい、しかもフレンズとしては初の料理人だ」

あまり一般的に知られていることではないが、海原雄山はフレンズ、あるいはアニマルガールと呼ばれる人類の新たな隣人達の人権保護や社会地位向上のための活動を支援しており、アライさんの活躍が彼女らフレンズの地位向上に繋がると確信していた。ただ、アライさんを板前としての雇つたのは、純粹に彼女の才能を見込んでのことである。

「この大会に優勝すれば、君は一躍有名人だ。もちろん、私が全面協力を約束しよう」

「本当なのだ!」

アライさんは身を乗り出して雄山に尋ねる。

「それに、優勝出来れば君の夢だつた『ジャパリパーク支店』の出店も夢ではなくなるかもしねないぞ」

「ほ、ほんとうなのだ!!」

アライさんは飛び上がつて喜んだ。

「それじゃあ、お願ひできるかね？」

「わかつたのだ!!」

アライさんは力強く首肯した。

アフリカの筋肉料理人アフリカの

アメリカの筋肉料理人やアフリカの魔術ヒサ料理人など数々の料理人たちとの料理勝負を勝ち抜き、ついに決勝のステージへと進出したのは、アライさんとフエネックのコンビであった。

決勝の舞台は巨大な中華鍋バ真座

決勝の舞台は巨大な中華鍋が鎮座している大広間である。そこには各国の審査員達が座り、アライさんたちを見舞つていた。

文单朴三は咲三ノハツの

「アライさん、フェネック、いよいよ決勝だが、準備は大丈夫か?」

た。

! !

フエネックもまたアライさんのアシスタントとして十分な腕前を
振るうこの二、今日ほど二邊強三重み二三二、ぞ。

「ふむ、頼もしい限りだ。では始めよう。アライさん、

意はいいがな?

一
は
い
な
の
た

微笑んでその様子を見ていた。

A vertical sequence of 15 alternating black and white triangles pointing downwards. The pattern starts with a black triangle at the top, followed by a white triangle, then a black triangle, and so on, ending with a black triangle at the bottom.

「はい、お用事ですか」と、

アライさん達コンビは阿吽の呼吸で調理を進める。

司会の宣言とともに、会場のボルテージは最高潮に達した。

今回アライさん達が用いる食材はどれも海原雄山自らが市場へと

まず最初に投入されたのは、アライさん特製の隠し調味料である。

「これを使うのだ」

アライさんはボウルに入れた液体を一つまみすると、それをゆつくりとフライパンの中へ垂らす。

ジュッと音を立てて蒸発したその中身の正体は……塩である。常温では液体である特殊な塩を加熱することにより瞬時に結晶化させ、その旨味成分を凝縮させたものである。

さらに、アライさんがもう一つの小瓶を取り出す。

「こつちはアライさんが作った醤油なのだ」

そう言つてアライさんが傾けた小さな容器からは透明な液体が流れ出し、油のようないが漂つてくる。

「さつき入れたあれは何ですか？」と司会者が質問する。

「ん？ああ、これは『海の涙』という海水から作られた特別な塩と醤油なのだ」

「しょ、しょゆ……？」

「うむ、海原雄山先生のこだわりの逸品なのだ」

アライさんは得意げに胸を張る。海原雄山こだわりの逸品と言えばそれだけでブランドと成りうるだけの信用がある。「で、でも、しょゆってあんな色でしたつけ……」「あのしょゆは特別製なのだ」

「そうなんですか……」

「さあ、料理を再開するのだ」

アライさん達は次々と料理を仕上げていく。

「最後に野菜炒めを作つていくのだ」

「はーい」

フェネックは手際よく材料を切り分け、炒める。そして最後に味付けをした肉を投入する。

「これで完成だねー」

「いやまだなのだ。最後の工程が残つているのだ」

アライさんはそう言うと、あらかじめ用意していた大きな鉄鍋を取り出した。

「さあ、ここからが本番なのだ」

アライさんは熱せられた鉄製の巨大鍋の中に、フェネックが切り分けた具材を次々と放り込んでいった。

「え、ちょ、アライさん、それはやりすぎじゃない？」

「心配ないのだ」

アライさんは一年の修行の間に和食だけではなく、洋食の作り方もマスターし板前としてもシェフとしても一流となっていた。

「さあ、できたのだ」

鉄板の上にはこんもりとした白い小山が出来上がっている。

「えっと、これは？」

「ご飯なのだ」

野菜炒めご飯。シンプルな組み合わせであるが故に、その実力が試される料理である。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

対戦相手、味吉陽一とアライさん達、両チームの料理が完成した。まず最初にミスター味つ子、味吉陽一の料理からだ。審査員たちは運ばれてきた洋一の皿を覗き込む。

「ほう、見た目はシンプルですが、なかなか凝った盛り付けですね」「確かに、これだけだと何の料理なのかわかりませんね」

審査員たちが見守る中、陽一はおもむろに箸を取り。さつと皿をかき混ぜると料理が審査員たちの目の前で揺れる。

「これは……チャーハンですな」

「しかし、これは米粒が立っている」

「これは期待できそうだ」

「これで完成だよ、食べてみて」

陽一は皿を審査員たちの元に運ぶと、笑顔で促す。

「いただきます」

「どれ……おお！」

「これは！」

審査員の一人が驚いたように目を見開く。それは他の審査員も同じだったようだ。全員が無言のままスプーンを口に運び続ける。

やがて皿の上のものを全て平らげると、全員同時に顔を上げた。

「美味しい……なるほど、これは黄金鳥の卵を使つたチャーハンか！」

黄金鳥とは鶏の中でも特に大きく、鮮やかな黃色い羽毛を持つ鳥類のことである。飼育が難しいことで有名だが、味は絶品であり特に卵料理とは相性が良い。その卵と鶏肉を使った親子チャーハン、それが陽一の出した答えであつた。

「しかし、それだけじゃない……この米の舌触りまるで炒きたてのよ
うに柔らかい」

それにバラリと散った海苔の風味が食欲をそそりますね。」「しかもこのソースはなんだ？」

「これはおそらく酢飯に少量のゴマ油を加えたものだと思われます

「これがまた良いアクセントになつてゐる」

「、お、おやがこて母の腕の時う主が、こゝは

「素晴らしい、
実に見事だ」

た。



続いてアテイせん達の料理た

飯』だ。

一 沢山食へるといいのだ

アライさん自ら審査員たちに料理を配膳していく。
「おお、これが尊に聞く『アライさん』の料理ですかな?」

審査員の男が興奮気味に尋ねる。

アライさんが『アライさん』と呼ばれていることは海原雄山から聞いていた。

『アテイさん』？

「ああ、彼女はアライグマのフレンズですよ。ご存知ありませんか？」
フレンズ初の料理人にして、海原雄山先生のお墨付きだ」

「なんと、海原雄山先生の？」

「そんなことより早く食べるのだ。冷めたら美味しいのだ！」

アライさんは急かす様に言う。

「それもそうですな」

「では、頂きましょう」

一同は一斉に料理に口をつける。

「…………」

一瞬の静寂。

「どうなのだ？」

アライさんは固唾を飲んで審判のジャッジを待つ。

「なんと、なんと言うことだ」

「こんなことが本当にあるのか？」

審査員たちは動搖を隠しきれない様子だ。

「アライさん、君は一体」

味吉陽一はアライさんを問い合わせる。

「落ち着いて、ちゃんと食べるのだ、陽一さんも食べるのだ？」

アライさんはそう言つて、自分の分の料理を頬張る。

「うん、アライさんも美味しいと思うのだ！ほつべが落ちそうになるのだ!!」

「…………」

陽一は黙つてアライさんを見る。そして差し出された野菜炒めご飯を一口食べた。

「!?

陽一は目を見開いた。そしてそのまま勢い良く野菜炒めご飯をかけ込んだ。

「野菜炒めと言うシンプルな料理のはずなのに、なんなのだ、この、口の中に広がる旨味は……!？」

動搖から落ち着きつつあつた審査員たちはアライさんの料理を食べ始める。再び騒ぎ始めた。

「う、うまい！うますぎる!!」

「これは、家庭的な懐かしい味のはずなのに、高級感も両立している

!?

「う、うむ、これはもはや、ただの野菜炒めでは無い。しかも米と一緒に食すことで更に味わい深くなっている」

—— そうか、これが隠し味の秘密か！

アライさんが隠し味として用いた『海の涙』それは特に米料理との相性が良く、アライさんはそれを知っていたのだ。さらに醤油にも秘密があつた。通常の醤油は塩分濃度が高いため米と合わせると、米の水分によつて蒸発しなくなつてしまふ。それを防ぐために、アライさんは醤油の塩分濃度を下げ、代わりに昆布出汁を加えていたのだ。「この料理にはさらに隠し味として海産物の出汁を使つてゐる。そのおかげで醤油の塩分と合わさつて、ご飯の味を引き立ててゐる」「單なる野菜炒めではない、計算し尽くされた料理……まさに奇跡の一品ですな」

「すごい、アライさん、君、天才だよ」

ふふん、アライさんにかかれば朝飯前なのだ

アテイさんは胸を張って鼻高々と言つた

奢查は团麿を窮めたり。方丈の上量も長い奢語の後、いよいよ絶頂發表

「ドヤ、ラーメン一皿六十円だぞ、お前が

会場は割れんばかりの拍手に包まれた。

「やつたのだああああああああああ!!

アライさんは飛び上がつて喜んだ。

「アライさん、今回は僕の負けだよ」

「ありがとうございます」

二人は固く握手を交わした。

こうして、アライさん達は見事優勝を果たしたのだつた。

A vertical column of 15 alternating black and white triangles pointing downwards.

後日、海原雄山は約束通り『ジヤバリパーク支店』改め『アライさん割烹』をオープンさせた。

場所はジャパリパークにあるアライさん達が暮らしていたログハウスの庭先。そこに小さな店舗を拵えた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

アライさん達はそこで今日も腕を振るつて いる。

「今日の献立は野菜炒め定食とおにぎりセットなのだ」

「さあ、食べてみるのだ」

2人の料理はたちまち評判となり、連日大盛況である。

「フェネック、楽しいのだ？」

「そうだねえ、まあ悪くはないかな？」

おしまい

ハリー・ポッター　おじぎをするのだ　その4

「おならをするのだ。ポッター、決闘の前だぞ!! 決闘の作法は守らなければいけない」

「お、おなら? おじぎじゃなくて??」

「おならをするだ。ポッター。そんなことも知らないのか? 礼儀をわきまえない奴め! おならをするのだ!!」

「わ、わかつたよ……」

ポッターは尻に力を込める。しかしながら出てこない。

「どうした? 早くしろ!」

「うーん……出ないんだよ」

「出さんか!!」

ヴォルデモート卿は怒鳴り声をあげる。

「ええい、もうよい。俺様がしてやるから動くな!!」

「いやだよ!! 汚いじゃないか!!」

「黙れ!! さつさと出すんだ!!」

「いやだ!!」

ヴォルデモート卿が杖を振り上げ呪文を唱える。武装解除の呪文を応用した魔法をポッターの尻めがけて放つた。すると、ポッターのお腹がグルルルルと鳴った。そしてポッターの顔色が真っ青になつた。

「あ……」

「ほう、出るではないか。さあ出せ」

「ちよ、ちよつと待つてよ」

「待たぬ。さつさと出すのだ。でなければ決闘は始められぬ」

「待つてくれ!! 僕まだ心の準備ができてないんだ!!」

「知るか!! さつさとしろ!!」

「嫌だ!!」

ポッターが叫んだ瞬間、気が緩んだのかボフウと音がし、白い煙があたり一面に立ち込めた。

「なんなのだこの煙は……まさか護りの魔法なのか!?」

続けてバフンボフンと響くような快音を。ポツターは尻から奏である。

「良い音色だ、俺様も応えねばな」

ヴォルデモート卿もまた、ポッターと同じように尻に力を入れる。

「ふん
!!」

「ああ!! やめてよ!!」

「うるさい!! お前が先に出したのだろう!! 大人しく聞け!!」

ウォルテモート卿もまたボッターニ応える最高の音色を響かせよ

うと
たむ

ホハーンと笑って聞いたことのない音を出したから、二人は没頭を始めた。

A vertical column of 15 alternating black and white downward-pointing triangles, arranged in a repeating pattern.

その日、ホグワーツではポッタードとヴォルデモート卿の決闘が行われたことは、瞬く間に学校中に知れ渡ることとなつた。

「ねえ、ハリー……それ何?」

ロンが震え声で尋ねる。ハーマイオニーが信じられないという目で見つめ、ふうふう。パソコンをさわる。

、リーフは包帯が巻かれ、痛々しく姿になつてゐる。

「……結局おなう合戦になっちゃつてね」

「それでこんな大怪我をしたつていうのかい？君つて馬鹿だなー

「うん……そうみたい」

「どうして渋鬪の最中におなら合戦なんて始めるのよ？あなたたちは

「ともどもなしていふれ」

「だつて、決闘前におならをするのは礼儀だつて言うから……」

一般的なルールではな、と思うけれど

「そうなの？ 知らなかつたな」

「ウオルテモリト卿のお尻は無事なの？」

「大丈夫だと思つ 決闘が終わつたらいいの間にか消えていたから」

「そつか、よかつたね」



「それにしても驚いたわ。あなたのお父様とお母様にこのことを話したらどんな顔をするでしょうね」

「それは勘弁してくれよ」

「冗談よ。それよりヴァオルデモート卿とはどんな関係なの？突然決闘だなんて言い出して」

「…………うーん……、近所の魔法を教えてくれる変なおじさんかな？」

時々一緒に遊んでくれるんだ。僕の両親と仲が良いらしくよ」

「へえ、不思議なこともあるものね」

「ほんとにね」

鬼滅の刃 柱合裁判——その8

炭治郎は目を覚ますと鬼滅隊本部、お館様の屋敷前の庭にいた。鬼となつた妹を隠していた罪で、拘束され連れてこられたのだ。

「ここは鬼殺隊の本部です。あなたは今から裁判を受けるのですよ。

竈門炭次郎君」

蟲柱——胡蝶しのぶが話しかける。炭治郎が慌てて周りを見回すと他にも人の姿があつた。

炎柱——煉獄杏寿郎。

音柱——宇髓天元。

恋柱——甘露寺蜜璃。

岩柱——悲鳴嶼行冥。

霞柱——時透無一郎。

蛇柱——伊黒小芭内。

水柱——富岡義勇。

風柱——不死川実弥。

そして……セクシーコマンドー部、部長——花中島マサル。

「柱ですか？」

ガビーンという効果音と共に、炭治郎は衝撃を受けた。一体のこの人は誰だ？いや、何者なんだ？

「この方はセクシーコマンドー部の部長であらせられます！」

どこからか現れた隠の一人が言つた。

益々意味がわからぬ。セクシーコマンドーとは！？

「セクシーコマンドーって何ですか？」

思わず尋ねた炭治郎に答えたのは、やはりマサルさんその人だつた。

「俺達のスポーツだ!!」

「スポーツ……」

ますます意味が分からぬ。

「炭治郎だからあだ名は……ゲロシャブか、ターザンかな？どう思う

？」

「どつちかつつうとターザンじやねえのかア？」

「ええ、私ターザンも好きだけど、ゲロシャブの方が可愛いと思うわ」

「……僕はどつちでも構わないけど」

「…………」

皆勝手な事を言っている。しかしこのままではゲロシャブに決まってしまうそうだ。炭治郎は慌てて叫んだ。

「待ってください!! 僕はターザンでお願いします!!」

「決まりましたね」

そういうことになつた。



「では、これから裁判を始める! そこには鬼を連れた隊員ターザンではないか? どういう事なのか説明してもらおう!」

炎柱・煉獄杏寿郎が声を張り上げた。

「はい! それは俺の妹でして、二年間人を喰つた事はありません!」

炭治郎ことターザンはきつぱりと言いつ切つた。

「そんな事が信じられるかあ! 嘘をつくんじやあないよオ」

音柱・宇髄天元が怒鳴る。

「本当にそうなの? 鱗滝さんつていうのはどなたかしら? なく鱗滝さんにも責任が及びます! どうか信じてください!!」

必死に訴えかけるターザンの言葉を聞いて、恋柱・蜜璃が顔を赤らめた。

「まあ……そうなの? 鱗滝さんつていうのはどなたかしら?」

「水の呼吸を使う剣士です! 僕の」

「いい人なのね!」

「違います!」

「男同士の友情という名の純愛なのね!!」

「全然!! 違います!! そういうんじゃないから!!」

蜜璃は少し天然と腐が入つていてるようだつた。

「うむ! ターザン少年、君の言うことはわかつた! だがそれでも俺は納得できない!」

「どうしてですか？」

やつぱり君はゲロシャブの方が似合つてる気がするぞ」「その話題は終わつてます！」

三角関係なのね！」

「違うから！ 本当に！」

「ふるせう！ 黒れ工！ 誰か進まねたのうか？」

不死川実弥の一喝により、その場はしんとなつた。

「何故ですか!?」

タリサンこと炭治郎は食い下がった

「ます第一に妹か人を襲うか否かの半端は確かこそうですね」俺には出来ないからだ】

「第二に、仮に襲わないとしても、人の血肉を口にしていいな

「されば、人間を襲い出すがもしれない」

「第三にゲージャブよりタリザンを選んだつて事だ

「それ関係ないですよね！」

君達兄妹を語める語りにはいかない

•
•
•
•
•

沈黙を破つたのは蟲柱である胡蝶しのぶであつた。

「では、こうするのは如何でしょうか？ターザンくんの裁定はお館様に任せましょう」

10

「ならば、さあそくお館さまを呼んでこよー！」



半刻後、産屋敷耀哉は柱合会議の場に姿を現し、そしてそのまま倒れました。

半透明な産屋敷耀哉が体からふわりと浮かび上ると「良し、逝け

る！」とグツと親指を立てて天に消えそうになつていく。

「逝くなー！」

ターザンは慌てて耀哉の体を抱えると、その両頬を思いつきり叩いた。

「痛い！何をするんだ！」

いや、なんか死にそうだったの……」

「まだ死んでないよ」

「いや明らかにお迎えが来てましたよね？あとちょっと遅かつたら間違います」

「遠いなく行つてましたよ」
「大丈夫だよ。私は死はないから」
「……」

柱達は困惑していた。今日の前で起きている光景の意味が理解できなかつたのだ。

「えつと……お館様？」

蛇柱・伊黒小芭内が恐る恐る尋ねる。

「何だい？小芭内」

今何が起きておいでなのでしよう?

一気のせいたよ?」

「いえ、しかし」

「何も起きてない、いいね？はい、この話はこれで終わり」

木道は赤茶けの色を見合せた。

は今日も可愛いね』

産屋敷耀哉はにっこりと微笑んだ

卷之三

A vertical column of 15 alternating black and white triangles pointing downwards.

「というわけで、ターザンはセクシーコマンドー部に入部させることにした」

マサルさんが宣言した。

「えええええ……どういうことなんですか!?」

「俺に聞くな、ターザン。俺はセクシーコマンドー部の部長だからな！」

「えええええ……」

ターザンは頭を抱えた。一体自分はどうなってしまうのだろうか？

「あの……一つ質問してもいいですか？」

「なんだ、ゲロシャブ」

「違いますターザンです。いやターザンでも無いです炭治郎です」

「ゲロターザン？」

「だから炭治郎です!!」

「何の用だ？」

「ええと、俺がここに連れて来られた理由がよく分からないんですけど……」

「ああ、それはな。お前の妹は危険だし、その辺に放り出しておいても誰かに殺される可能性があるだろう？なら、セクシーコマンドー部で預かろうという事になつたんだよ」

「そんな殺伐とした部活があるなんて知りませんでした……」

「ちなみに部員は全員男だ」

「……」

「お前も入部すれば、男ハーレムが出来るぞ」

「入りません！」

「遠慮すんなつて。大丈夫だつて、すぐ慣れるつて」

「男同士の純愛なのね！素敵だわ!!」

「甘露寺、落ち着け」

「……」

(富岡さん無言の圧力かけてくるのやめてくれ)

「俺は嫌ですよ！絶対に入りません！」

「じゃあターザンは死刑、禰豆子ちゃんはセクシーコマンドー部入り」という事で

「えつ……いやいやいや」

「いい加減にしろオ！そんな馬鹿げた話が通ると思つてんのかア!?」

不死川が怒鳴る。

「お前はセクシーコマンドー部入りかア、死ぬかだよオ」「ゾつちかつてハウヒ、タリザンはゲコシャブぞと思うぞ

「黙れ工宇髓イ！」

「ええ、じゃあどうするの？」

蜜瑞は尋ねた

……俺は禪豆子とセクシーコマンドー部に入ります……。あと

「決まりだね」



こうして、炭治郎ことターザンは鬼滅隊本部の地下にある、謎の地下格闘場、通称・セクシーモンドー部の道場で修行する事になつたのだつた。めでたし、めでたくもなし。

鬼滅の刃 柱合裁判——その9

炭治郎は目を覚ますと鬼滅隊本部、お館様の屋敷前の庭にいた。鬼となつた妹を隠していた罪で、拘束され連れてこられたのだ。

「ここは鬼殺隊の本部です。あなたは今から裁判を受けるのですよ。

竈門炭次郎君」

蟲柱——胡蝶しのぶが話しかける。炭治郎が慌てて周りを見回すと他にも人の姿があつた。

炎柱——煉獄杏寿郎。

音柱——宇髓天元。

恋柱——甘露寺蜜璃。

岩柱——悲鳴嶼行冥。

霞柱——時透無一郎。

蛇柱——伊黒小芭内。

水柱——富岡義勇。

風柱——不死川実弥。

そして……ケアロボット——ベイマックス。

「私の名前はベイマックス。あなたは大変緊張しているようですね。10段階で表すとどれぐらい緊張していますか？」

「えつ……」

突然、横合いから声をかけられて炭治郎は戸惑つた。確かに自分はひどく緊張していたのだが、それを初対面の人物?に言い当てられるとは思わなかつたからだ。

「では緊張をほぐすため、電気マッサージをしましよう」

そう言うとベイマックスは両手から紫電を迸せながら炭治郎の両肩に手を置くと、背中側に向けて放電した。バチイツ!

「ぎやああああっ!」

「どうですか? 緊張はほぐれましたか?」

「あばばばばば、な、何するんですばばば」

感電しながら涙目で抗議の声を上げる炭治郎だつたが、他の柱達は特に反応せずただ黙つて成り行きを見守つてゐるだけだつた。

「もう十分な場合は『大丈夫だよ、ベイマックス』と言つて下さい」「あばばばば」

い』

「わかりません」
—ひやああ

「ぢやあああ

バチバチバチバチバチッ!
容赦のない連續攻撃にたまらず炭治郎は絶叫を上げた。

「ややああああ！」

もう大丈夫だ。ハイマツクリ。竜門少年も情にならないな。この程度で」「どの程度でしょうか？10段階で表して下さい」

卷之二

「もう少し強い方がいいでしょうかね？」

「いや、充分だろう。よくやつたぞ、ベイマックス」

「アーティストの才能を発揮するためには、必ずしもアーティストとしての才能をもつておかなければなりません。」

「いえ、それほどでもありません。ところで緊張はほぐれましたか?」

「…………まあいいんじやないか?」

痺れる炭治郎の姿を見て笑う宇髄を見て、伊黒がネチネチと言い募

る

そんな二人のやり取りを無視して甘露寺が言つた。

、ラ富義二二三五九放翼哉ゾ見ル、主合ノ義ニ共ニ成ル台三ノ。

「まずは君の妹さんについてだが、鬼殺隊として人を守る為に戦え。

なつたのか説明してくれるかい?

お館様の言葉に炭治郎は背筋を伸ばして姿勢を正す。

「緊張しているようですね。電気マッサージをしますか？」

「結構です！」

「10段階で言うとどれくらい結構ですか？」

「えつ……じゃあ5くらいで……」

「わかりました。それでは5段階の電気マッサージをします」

そう言つてベイマックスは炭治郎の背後に回ると両手から紫電を放ち、両肩に手を置いて放電した。

「ひいつ!? ちよ、ちょっと待つて違う！『もう大丈夫だよ、ベイマックス！』

慌てて炭治郎は叫ぶと、ベイマックスは手を離し、その場から少し離れた。

「本当に大丈夫だと思いますか？もつと強くても大丈夫だと私は思います」

「あの、もう充分だから！むしろ強すぎて痛かつたから！」

「本当ですか？」

「うん」

「……話を続けて貰えるかな。あとベイマックスは少しあちらで不死川くんを見ていてくれないかい？あまり刺激を与えないようにね」

「わかりました」

そう言うとお館様に言われた通りベイマックスは離れた場所まで移動した。

「えっと、どこまで話しましたつけ？」

「君の妹が人を襲わないかどうか、それをこれから判断するんだよ。そして君の話はここから先になるから、落ち着いて話すといい」「はい」

お館様の優しい言葉を聞いて炭治郎は大きく深呼吸するとゆつくりと口を開いた。

「俺は家族と住んでいる家に一人で留守番をしていました。妹が、禰豆子が血だらけで帰ってきたんです。最初は熊に襲われて怪我をしたのかと思いました。でも、それは違いました。禰豆子は無惨に鬼にされて、でも殺されそうになつた家族を庇つたんです。その時の

血が自分の服にも付いていました」

「成る程」

「それで、俺の家族はその事で揉めていました。禰豆子を人間に戻す方法を探すと言つて聞かない母と、このまま殺すべきだと言う父。弟や妹達は二人の間で揺れていて、どちらの意見が正しいのかも分からなくて……とにかく鬼殺隊ならなんとかなるかもつて富岡さんに言われて……」

「富岡くんに？」

「はい、富岡さんは育手という人のところへ俺を連れて行つてくれたんです。そこで修行して、最終選別に行つて合格して、今は鬼滅隊の剣士として働いています」

「ふむ」

「でも、最近になつてわかつたんです。妹の事。俺、ずっと知らなかつた。何も知らずに、ただ必死に鍛錬して、鬼を斬る事だけを考えていた。でも、俺には妹を人に戻す事も、守ることも出来なかつた。それが悔しくて仕方がないんです」

そう言うと炭治郎は俯き、唇を噛み締めた。その様子を見て不死川を電撃で黒焦げにして戻つてきたベイマックスが言つた。

「あなたは今とても混乱しています。電気マッサージをしますか？ 緊張がほぐれますよ」

「いらない！」

「10段階で表せばどれぐらいの混乱ですか？ 5ですか？ 6ですか？ 7ですか？」

「えつ……うーん、まあまあ」

「そうですか。では電気マッサージをします」

「バチバチバチバチバチッ！」

「ぎやああ！ 何するんですばば」

「どうですか？ 落ち着きましたか？」

「おちばばばば、落ち着きばばましばばば」

「そうですか。よかつたですね」

「あばばばばばば」

『『もう大丈夫だよ、ベイマックス』……ベイマックス、向こうで煉獄くんをマッサージしてあげてくれるかい?』

「わかりました」

「よもや!?

バチバチバチバチバチツ!!

「あばばばばばばば」

「……さて、富岡くんが関わっていたのか。いや実は鱗滝さんからも君と君の妹のことは実は聞いていたんだ。ただ確証がなかつたからね。もし違つたら君を傷つけてしまうかもしれないから、本人から聞きたかつたんだ」

「お館様、ご存知だつたのですか?」

「ああ。彼は優秀な育手なんだが、少々変わり者でね。鬼にされた妹を連れた少年がいるらしいとしか聞いていなかつたから。ただ、鬼を狩る組織にそのような存在が現れたらどうするか、それも確認したかつたんだ」

「……」

「君が言つていたように、君の妹、禰豆子ちゃんは鬼になつたが人を喰つていないうだ。しかし、まだ完全に人に戻つたわけでもない。ならば、鬼殺隊としてその責任を取らねばならない。覚悟はあるかい?」

お館様の言葉を聞き、炭治郎は目を閉じて深く息を吸い込むと静かに目を開いて真っ直ぐにお館様を見据えた。

「もちろんです!」

「10段階でどれぐらいの覚悟ですか?」

杏寿郎を黒焦げにして戻ってきたベイマックスが再び炭治郎に問う。

「10以上の覚悟でやります!!」

「エラー、1～10で答えてください」

「ええ……」

「どうなんですか?」

「まあ、それなりにあります」

「わかりました」

バチバチバチバチバチツ!!

「さやああ」

「お館様、炭治郎は嘘は言つていません」

バチバチバチバチバチツ!!

「ややああ」

「お館様、炭治郎は『そゝそゝ』の覚悟は出来ています」

「あばばばば！」
そうか、頑張ってくれる期待しているよ

A vertical column of 15 alternating black and white triangles pointing downwards.

柱合会議が終わると宇髓はお館様に話しかけた。

「あれは……なんだろね、あれ。私もよく分からんの」
「どこまでハイテクは何者なんですか？」

「ははは、またお館様も冗談を仰られる」

「……いや、本当にわからないんだよ。いつの間にか蝶屋敷に居て、怪

我人の三、三の三、仕事や看護の眞似事

「そういえば……お館様の具合はいかがですか?」

「そう言えばまだ診てもらつてなかつたね、世つかくだからベイマツ
クスを呼んでみよう」

「はい」

「ベイマックス、こつちに来てくれるかい?」

「わかりました、何をしましようか?」

「私の体を診てくれるかい？最近調子が悪くてね」
「わかりました。では服を脱いで下さい

「わかつたよ」

「脱いだ服はそこに置いて下さい」

「いいよ、ではお願ひ」

「おかりに迷ひたては、アリス、お姫様で」

た。

「お館様？お館様！？しつかりしてください！お館様ああああ！！！」

宇髓は絶叫した。

「うわあ、うわあ、うわあ、お館様ああああああ！！！」

「概ね健康です」

「お館様ああああああ!!!」

その後、産屋敷邸に宇髓の悲鳴が響き渡つた。

A vertical column of twelve alternating black and white triangles pointing downwards, arranged in two columns of six.

大正コソコソ噂話

・産屋敷耀哉

みんな大好き

・竈門炭治郎

妹が鬼になつたのに守れなかつた主人公。この後、柱稽古に参加することになる。

• 宇鼈天元

お館様が心配でならない人。でも、お館様の事は心の底から尊敬している。

・ベイマツクス

自称ケアロボット。色々できるけど、一番得意なのは電撃を浴びせること。ケアロボットとは？

富岡義勇

今回出番なし。

ベイマツクスの電撃で黒焦げになつた人。

伊黑小芭内

ベイマックスの電撃で黒焦げになつてない人。

甘露寺蜜璃

ハハハ、今度の雪転で異魚にいたりしないノ

ベイマツクスに黒焦げにされた人。

勇者王ガオガイガードラえもん V.S

Gドラえもんとフュージョンアップしたのび太は、さらに3機のドーラーマシン——タイムマシン、どこでもドア、バギーちゃんとファインナルフュージョンを試みる。

「あとは、勇気で補えればいい！ファイナル！ヒュウウウジヨオオン！！」
Gドラえもんとドラーマシンは複雑な変形を瞬時に終え、合体が完了する。

「完成!! ノビ! ノビ! タアアアア!」

射撃王ノビノビ外し。これが勝利の鍵だ。

A vertical column of 15 alternating black and white triangle symbols, starting with a white triangle at the top.

「やーはりガオガイガーハーはかーこいなあ……そ、うだトテネモくん」
のび太はガオガイガーの変形プロセスを再生している端末を見ながらドラえもんに話しかけた。

「安全な悪の秘密結社と戦える道具が出してよ」

一急に無茶苦茶なこと言うねのひ太くんは

しゃあ代わりにショーワンがスネ夫みたいを安全な悪の秘密幹部が
なにかに改造してよ」

「人権も糞もなしねのひ太くんに」

ソール11遊星主による三重連太陽系へのダークマター流出は、現太陽系宇宙だけでなく隣接する並行宇宙——ドラえもん次元宇宙の24世紀太陽系にも大きな爪痕を残した。

かくしてGドラえもんはのび太に力を与え、彼らの戦いが始まつた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

秘密結社バイオネットは戦前から暗躍する犯罪組織であり、原種戦役後、旧GGG——ガツツイー・ギャラクシー・ガードにより壊滅に追いやられるも、ソール11遊星主戦役により旧GGGの主力勇者ロボ軍団が二重連太陽系へ旅立つた後、再びその勢力を取り戻しつつあつた。

そのため国連は新たなGGG——ガツツイー・グローバル・ガードを結成、新たな勇者候補として、旧GGGの協力者だつた天海護と戒道幾巳、そして異なる未来からの希望、野比のび太が選出された。だがしかし、彼らはまだ知らない。

バイオネットのみが脅威では無いことを……彼らが知ることになる時、それは運命の歯車が再び動き出す瞬間でもある。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

劇場版 ドラえもん 射撃王 ノビノビター

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

バイオネットによる人造ゾンダーメタルを使用した巨大怪異が、のび太の住むススキが丘に出現したのは、春休みが終わり新学期を迎えた最初の登校日のことだった。

「くそっ！こんな時に……」

GGGの施設から学校に向かう途中だつたのび太とドラえもんは突如現れた怪物に為す術もなく襲われてしまう。

「うわあああつ！！」

「のび太くん、こうなつたらヒュージョンアップだ」

フュージョンアップにはGGG長官による許可が必要だ。既にドラえもんはGGGへの連絡を済ませ、あとはのび太が覚悟を待つていたのだ。

「わかつたよ、ドラえもん！」

「よし、フュージョンアップだのび太くん！」

通常時、のび太に付き従うドラえもんは人間大の対人用端末であり、その本体は学校の裏山内部に設置された地下基地に収納された

巨大ロボGドラえもんなのだ。

「いくぞお！・ドラえもおおん!!」

「おうさ！」

「ウイイイク、アアップ！」

ドラえもんが分割変形し、のび太の体へと装着される形でのび太は戦闘装備へと換装を遂げる。

そして、裏山から発進されたGドラえもんとのび太のフュージョンアップすることにより、Gドラえもん戦闘形態、ノビターへの変形が完了した。

「ノビタアーツ！」



ノビターの操縦席の中、のび太は操縦桿を操作しながら敵の弱点を探る。

「あの触手みたいな腕をなんとかしないと……」

その時、モニターに表示されていた敵情報に変化が起きた。

【未確認機体反応確認】

「なんだって!?」

慌てて周囲を確認すると、そこにいたのはかつて倒したはずの人造ゾンダー変異体だった。

「のび太くん、気を付けて」

アシストA-Iとして戦闘を補助するドラえもんの声が聞こえる。

「あれは人造ゾンダーメタルの暴走個体か？」

暴走個体は触腕をこちらに向けと躊躇することなく、その魔手をノビターへと伸ばす。

「やばい！ 避けろ！」

回避行動をとった直後、先程まで自分たちがいた場所に大きな穴が空いていた。

「なんて威力だ……」

ノビターの攻撃手段は両手に装備されたドラえもんクローと頭部バルカン砲のみのため、敵に近づく必要がある。だが今の一撃だけで敵の危険性を悟ったのび太は一旦退却する事にした。

「ドラえもん……ノビタ一のままじゃおそらく勝てない」「でもファイナルフュージョンはまだ成功したことないよ」

「大丈夫、僕を信じてくれ」

GGG長官、阿嘉からの連絡がくる。

「のび太くん、それでこそ勇者だ。ファイナルフュージョンを承認する。あとは任せだぞ勇者」

「……僕は勇者なんかじゃないです。でも……わかりました。やつてみます！」

「よし、ファイナルフュージョン承認！」

「のび太くん、合体シーケンスは僕の方でもなるべくフォローするよ」「ありがとうございます、ドラえもん。あとは……あとは勇気で補えばいい！」

ススギヶ丘GGG基地より発射された3機のドライマシン——タイムマシン、どこでもドア、バギーちゃんがGドラえもんの周囲を巡回し、合体シーケンスへと移行する。

「まずい、ゾンダーの奴らがこっちに向かってる。早くしてくれ德拉えもん！」

「わかってるよのび太くん、合体シーケンスを4から省略……行けるよのび太くん」

「よっしゃあああ！ ファイナル!! ヒュウウウジヨオオン!!!!」

Gドラえもんとドライマシンは複雑な変形を瞬時に終え、合体が完了する。

「完成！ ノビ！ ノビ！ タアア!!」

射撃王ノビノビター。これが新たなる人類の守護者だ。



人造ゾンダーメタルによつて変貌を遂げた人造ゾンダー怪異体と人造ゾンダー変異体に対し、ノビノビターは怯むことなく立ち向かう。

「ブロウクン空氣砲!!」

ノビノビターの右腕から放たれた圧縮空氣弾はゾンダーメタル変異体の装甲を貫いて内部機構を破壊する。

「グガアアッ!!」

ゾンダーメタル変異体は断末魔の叫びを上げ、やがて活動を停止させた。

「やつたね、のび太くん」

しかし残る怪異体は触腕をノビタリに向け、攻撃を再開した。

「なんのお!」アロ元気エレベリマンド!」

怪異体が放つ攻撃を無効化する。

「今のうちにとどめを刺そう」

必殺の一撃を受け、ゾンダー変異体は爆散した。

一これで終わりかな】

「そうぞ、ドラえもん」

A vertical column of 15 alternating black and white triangles pointing downwards. The sequence starts with a black triangle at the top, followed by a white triangle, then a black triangle, and so on, ending with a black triangle at the bottom.

「おい、野比。お前また遅刻か？」

担任の先生に言われるのでアリは恥でて席に着く

のび太がG

のひ太がGGG特別隊員であることは秘密であり、事情を知る先生は彼を咎めることなく教室へと促す。

まわいい授業始めるそ

- 6 -

こうして、のび太はつかの間の平和を取り戻すことができたのだった。

大

つづかない。……。